

## 第2章 福岡県侵略的外来種リスト選定種の解説

## 福岡県に定着している侵略的外来種の概要

### (1) 動物

侵略的外来種として選定された動物 95 種のカテゴリー区分の内訳は、重点対策外来種 10 種、要対策外来種 51 種、要注意外来種 34 種であった。

これらの侵略的外来種 95 種のうち、哺乳類は 2 種、鳥類は 5 種、爬虫類は 1 種、両生類は 1 種、魚類は 13 種、昆虫類は 47 種、貝類は 12 種、甲殻類その他が 12 種、クモ形類が 2 種で、およそ 50% が昆虫類であった。また、これらの外来種を生息環境から区分すると、水生種が 39 種、陸生種が 56 種となり、全体の 41% が水生種であった。

水生種 39 種のカテゴリー区分の内訳は、重点対策外来種 6 種、要対策外来種 20 種、要注意外来種 13 種であった。各区分に占める割合はそれぞれ、60%、39%、38% となり、対策の優先度が高い区分ほど水生種の占める割合が高かった。今回、重点対策外来種として選定されたアカミミガメ、ウシガエル、オオクチバス、ブルーギル、アメリカザリガニの 5 種の水生種については、捕食などにより直接的に在来の水生種に大きな悪影響を与えることが知られており、早急な対策が必要である。また、タイリクバラタナゴと絶滅危惧種のニッポンバラタナゴの交雑による遺伝的攪乱の問題、ムラサキイガイやカサネカンザシ類などの海洋性の外来種の侵入・定着も、特筆すべき点であろう。

陸生種 56 種のうち 46 種が昆虫類であり、ミナミキイロアザミウマなどの農業害虫とヒメカツオブシムシなどの家屋内害虫が大部分を占めていた。いずれも経済活動に影響を与える外来種であり、根絶は困難であるものの大発生などを未然に防ぐための監視や情報共有などが重要である。また、重点対策外来種として選定されたアライグマ、チョウセンイタチ、セアカゴケグモ、ハイイロゴケグモについては、経済被害や人体被害の影響の大きさから、すでに行政的な対策が多くとられている。これらについては継続した対策の実施が望まれる。

このほか、県内の一部地域に自然分布するものの、自然分布域外に人為的に持ち込まれ定着しているギギの外来個体群の問題やマツノザイセンチュウによるマツ枯れの問題なども確認されている。

### (2) 植物

侵略的外来種として選定された植物 180 種のカテゴリー区分の内訳は、重点対策外来種 10 種、要対策外来種 88 種、要注意外来種 82 種であった。

これらの侵略的外来種 180 種のうち、草本は 162 種、木本（樹木）は 18 種であり、草本が全体の 90% を占めていた。草本 162 種のうち、一年草・越年草または二年草が 67 種、多年草が 95 種であり、それぞれ全体の 41%、59% を占めていた。また、これらの外来種を生育環境により区分すると、水生植物 22 種、陸生植物が 158 種（湿生植物 6 種を含む）となり、全体の 12% が水生植物であった。

水生植物 22 種のカテゴリー区分の内訳は、重点対策外来種 7 種、要対策外来種 10 種、要注意外来種 5 種であった。各区分に占める割合は、それぞれ、70%、11%、6% となり、対策の優先度が高い区分ほど水生植物の占める割合が高かった。外来水生植物の野生化とその異常繁茂は全国的にも問題となっており、本来の水域生態系を改変させるだけでなく、競合による在来水生植物の減少・消滅を招いている。また、通水阻害などの経済・産業被害や一斉枯死による悪臭の発生、水質悪化も引き起こしている。今回、重点対策外来種として選定された園芸スイレン、オオフサモ、ブラジルチドメグサ、ミズヒマワリ、コウガイゼキショウモ、ホテイアオイ、ボタンウキクサの 7 種の水生植物については、前述した影響・被害が生じている、または強く懸念されることから、早急な防除対策が必要である。

水域以外では、県内各地の道路道端、荒地、草地などにおいて、重点対策外来種のオオキンケイギク、要対策外来種のアレチハナガサ、タチスズメノヒエなどの陸生植物が急激に分布を拡大していた。オオキンケイギクは、特定外来生物に指定されて栽培が禁止されているが、人家周辺に植えられていることがあるた

め、駆除活動のほか、啓発も重要と考えられる。法面緑化植物として用いられ、今回、要対策外来種として選定されたシナダレスズメガヤ、カモガヤ、トウコマツナギなども県内各地で逸出・野生化しており、自然性が高い地域などにおける防除対策が必要である。また、畑地やその周辺草地などでは、要対策外来種のホソアオゲイトウ、マメアサガオ、ホシアサガオなどの難防除雑草が定着、繁茂していた。急激に分布を拡大しているため、効果的な駆除対策が望まれる。森林域では、要対策外来種のハリエンジュ、モリシマアカシアなどの緑化樹木が逸出・野生化し、在来種と競合している場合があるため、早急な対策が望まれる。

最近、玄界灘海岸において重点対策外来種のバクヤギクの野生化が確認された。バクヤギクは海外において短期間に分布を拡大し問題となっており、本県においても急速に分布を拡大する可能性がある。また、海岸埋立地では、重点対策外来種のナルトサワギク、要対策外来種のフトボメリケンカルカヤなどの新たな侵略的外来種の定着も確認された。これらの外来種は、侵入初期段階で分布域も限定されているため、県内で根絶できる可能性がある。

## 選定種の解説の見方

本冊子では、カテゴリー（重点対策外来種、要対策外来種、要注意外来種、定着予防外来種）の順に各種の解説を掲載している。各種の解説では、重点対策外来種及び要対策外来種は、表7の12項目について記載し、要注意外来種は種数が多いため、高次分類群、種名、由来（国外か国内か）、影響・被害、特記事項のみを表形式で記載した。また、定着予防外来種は選定理由、原産地、影響・被害、特記事項について記載した。重点対策外来種及び要対策外来種は、特に対策の必要性が高い種として評価されたものであり、記載量を他のカテゴリーよりも多くすることで、重要性を強調した。

分類方法や掲載順序については、動物、植物、それぞれ次のように整理した。動物については、科名、和名、学名及びその配列は、分類群ごとに最も一般的と思われる図鑑や文献に準拠した。また、一部の種については執筆担当者の判断で最も適切と思われるものを使用した。高次分類群の配列は福岡県レッドデータブック2011及び2014に準拠した。植物については、和名及び学名は、原則として「植物和名一学名インデックス YList」（以下「YList」という。）に基づき、YListに掲載されていない種については、各記載論文の和名及び学名を用いた。科名と科の配列は新エングラ体系、科内の配列は学名のアルファベット順とした。

したがって、特に学名については、国の生態系被害防止外来種リストに掲載されたものとは異なっている場合がある。

「各種の解説」の各項目の記載内容を以下に示す。

### オオクチバス ①

スズキ目サンフィッシュ科 ③

別名：ブラックバス、ラージマウスバス ④

*Micropterus salmoides* (Lacepède, 1802) ②

- ⑤ 選定理由 幅広い水生動物を捕食し、生態系への影響が大きい。県内のほぼ全域で確認されており、根絶は困難な状況であるが、小規模な水域であれば局所根絶も可能である。また、捕食による影響を低減するための低密度化や、現在でも密放流が行われることがあるため、啓発による分布拡大防止が必要である。
- ⑥ 原産地 北アメリカ（フロリダ州からバージニア州にかけての大西洋岸、テキサス州、メキシコ州）
- ⑦ 生態的特徴 体長30～50cmの純淡水魚。止水域からやや流れのある比較的水質の良い環境を好む。礫底に産卵床を形成し、卵保護を行う。主に生きた魚類、甲殻類、両生類などを捕食する。
- ⑧ 生息環境 河川、ため池、池沼、湖沼、クリーク、水路
- ⑨ 侵入経緯 釣り対象や食用として1925年に神奈川県芦ノ湖に放流された。県内での正確な定着年は不明であるが、1970年代後半から記録がある。
- ⑩ 定着状況 県内：各地にやや普通（分布図 p.88）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
- ⑪ 影響・被害 魚類、甲殻類、両生類などの捕食、水産有用種の食害
- ⑫ 特記事項 特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.101）、世界ワースト100、日本ワースト100

表7 各種の解説の記載内容

① 種名	和名を記載 県内の一部地域に自然分布するものの、その自然分布域外に導入・定着している種については（外来個体群）と表記した。
② 学名	学名を記載
③ 分類	動物は目名・科名、植物は科名を記載
④ 別名	別名がある場合は記載
⑤ 選定理由	選定した理由を総合的に記載
⑥ 原産地	原産地を記載
⑦ 生態的特徴	種の特徴、生態などを簡潔に記載
⑧ 生息環境／生育環境	動物では生息環境、植物では生育環境について記載
⑨ 侵入経緯	国内及び県内への侵入経緯や侵入年代を記載
⑩ 定着状況	県内及び国内の定着状況について簡潔に記載。第3章に分布図が掲載されている場合は、ページ数を（ ）内に記載 ○ 国内の分布状況は、北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原から選択し記載。分布が限定される場合は、（ ）内に都道府県名または市町村名を記載 ○ 国内由来の外来種は、国内由来の外来種として定着している都道府県名などを記載
⑪ 影響・被害	県内の影響及び被害について簡潔に記載（可能性も含む）
⑫ 特記事項	国内または海外において侵略的外来種として評価されている場合やその他の補足事項がある場合に記載。侵略的外来種は、以下の4つについて記載 ○ 特定外来生物 ○ 国リスト（国の生態系被害防止外来種リスト）：カテゴリー名（通し番号） ○ 世界ワースト100（世界の侵略的外来種ワースト100） ○ 日本ワースト100（日本の侵略的外来種ワースト100）

## ■ 特記事項における用語説明

### ○ 特定外来生物

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）により、生態系や人の生命・身体、農林水産業への被害を防止するために指定された外来種。無許可での飼育・栽培、保管、生きたままの運搬、放流・放逐、許可を受けていない者への譲渡し・販売、輸入などが禁止される。平成30（2018）年4月時点で、148種類の動植物が特定外来生物に指定されている。

### ○ 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）

環境省、農林水産省が、侵略性が高く、我が国の生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす、またはその可能性がある外来種として選定した429種類の外来種リスト（平成27（2015）年作成）。掲載種は、国内での定着状況や第一次産業における利用状況などに鑑み、対策の方向性によって以下の3つに区分している。

- ・ 定着を予防する外来種（定着予防外来種）：101種類
- ・ 総合的に対策が必要な外来種（総合対策外来種）：310種類  
対策の優先度の高さによって、緊急対策外来種、重点対策外来種、その他の総合対策外来種に細区分
- ・ 適切な管理が必要な産業上重要な外来種（産業管理外来種）：18種類

### ○ 世界の侵略的外来種ワースト100

国際自然保護連合（IUCN）の種の保全委員会侵入種専門家グループ（ISSG）が、「生物多様性及び人間活動に対する深刻な影響」、「生物学的侵入の重要な典型事例」の二つの基準によって選定した侵略的外来種100種（2000年公表、2013年改訂）。正式名称は「100 of the World's Worst Invasive Alien Species」。

### ○ 日本の侵略的外来種ワースト100

日本生態学会の「外来種ハンドブック」編集委員会が、特に影響が大きいと考えられる侵略的外来種として選定した100種（2002年作成）。すでに国内で大きな影響がある種だけでなく、海外で大きな影響が知られているもの、生態的な特性から大きな影響が予測できるものが含まれる。

## アライグマ

ネコ目アライグマ科

*Procyon lotor* (Linnaeus, 1758)

選定理由	陸水域をはじめとする生態系への甚大な影響が懸念されており、近年では農業への被害額も増加傾向にある。県内のほぼ全域に分布しているため根絶は困難であるが、被害の深刻さから、積極的防除による低密度化が必要である。
原産地	北アメリカ～中央アメリカ（カナダ南部～パナマ）
生態的特徴	頭胴長 42～60cm、体重 4～10kg の中型哺乳類。夜行性で、果実や野菜などの植物質、両生類や爬虫類、鳥類などの脊椎動物、昆虫類や甲殻類などの無脊椎動物を食べる。
生息環境	森林、畑地、水田、湿地、水路、ため池、市街地
侵入経緯	展示や愛玩目的として輸入され、飼育されていたものが放逐またはかご脱げにより逸出した。国内では 1962 年に愛知県で初めて確認され、県内では 2004 年に朝倉市で初めて確認された。
定着状況	県内：各地にやや普通（分布図 p.85）。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種（中型哺乳類）との競合、小型動物の捕食、農作物の食害、建造物の汚損、人畜共通感染症の媒介の可能性
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.83）、日本ワースト 100

## チョウセンイタチ

ネコ目イタチ科

別名：シベリアイタチ、タイリクイタチ

*Mustela sibirica* Pallas, 1773

選定理由	動植物に対する捕食圧の高さから、生態系への影響が懸念されているとともに、競合により在来のニホンイタチの生息域が縮小しているという報告もある。県内の全域に分布しているため根絶は困難であるが、被害の深刻さから、積極的防除による低密度化が必要である。
原産地	ユーラシア大陸東部（ウラル山脈西側～シベリア、中国、パキスタン、タイ）、済州島、対馬
生態的特徴	頭胴長 25～40cm の中型哺乳類で、国内では対馬のみ自然分布する。夜行性で、果実や穀類などの植物質、ネズミ類や鳥類などの脊椎動物、昆虫類や甲殻類などの無脊椎動物を食べる。
生息環境	森林、畑地、水田、湿地、水路、ため池、市街地
侵入経緯	毛皮採取を目的に輸入され、飼育されていたものが放逐またはかご脱げにより逸出した。国内では 1930 年頃に兵庫県で初めて確認され、県内でもその頃に侵入が始まったと考えられる。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州（岐阜県、愛知県、福井県以西）、四国、九州
影響・被害	在来種（特にニホンイタチ）との競合、小型動物の捕食、農作物の食害、建造物の汚損、人畜共通感染症の媒介の可能性
特記事項	国リスト：重点対策（No.213）、日本ワースト 100

## アカミミガメ

カメ目ヌマガメ科

別名：ミドリガメ、ミシシippiaアカミミガメ

*Trachemys scripta* (Schoepff, 1792)

選定理由	在来カメ類と生息地が競合することに加え、水生植物や水生小動物に対する捕食圧の高さから、生態系への影響が懸念されている。県内の全域に分布しているため根絶は困難であるが、防除方法がほぼ確立されていることから、ため池などの閉鎖水系であれば低密度化が可能である。
原産地	北アメリカ～南アメリカ（アメリカ合衆国南部～ブラジル）
生態的特徴	多様な水域に生息し、水質汚濁に強い。雑食性で、水草や水際の陸生植物、水生昆虫、甲殻類、貝類などを食べる。4～7 月にかけて産卵を行い、1 回に 20 個以上の卵を産む。
生息環境	ため池、池沼、湿地、水路、クレーク、河川
侵入経緯	1950 年代頃から愛玩用として輸入が始まり、飼育されていたものの放逐またはかご脱げにより逸出した。国内では 1960 年代後半から野外で確認されはじめた。県内の侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通（分布図 p.86）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（カメ類）との競合、水生動植物の捕食・摂食、農作物の食害、サルモネラ菌感染の可能性
特記事項	国リスト：緊急対策（No.93）、世界ワースト 100、日本ワースト 100（ミシシippiaアカミミガメ）

## ウシガエル

カエル目アカガエル科  
別名：食用ガエル

*Lithobates catesbeianus* (Shaw, 1802)

選定理由	多様な水生動物に対する捕食圧の高さから、生態系への影響が懸念されている。県内の全域に分布しているため根絶は困難であるが、被害の深刻さから、重要地域の湿地やため池などの小規模な水系においては、積極的防除による低密度化が必要である。
原産地	北アメリカ（カナダ南東部、アメリカ合衆国東部・中部）
生態的特徴	水草の多い水域を好む。夜行性で、昼間は水草や水辺周辺の茂みに隠れる。肉食性で、水生昆虫、甲殻類、魚類、両生類など口に入る大きさであれば何でも食べる。産卵期は5～9月と長く、池沼などの水量が多い場所に、6千～4万個の卵を水面に広がるように産む。
生息環境	ため池、池沼、水田、湿地、水路、クリーク、河川
侵入経緯	食肉用として1918年に東京都に持ち込まれ、その後、飼育されていたものが逃げ出して国内各地に定着した。県内における侵入年代は不明であるが、1960年代には広く分布していた。
定着状況	県内：各地に普通（分布図 p.87）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（カエル類）との競合、小型動物の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：重点対策（No.129）、世界ワースト100、日本ワースト100

## タイリクバラタナゴ

コイ目コイ科

*Rhodeus ocellatus ocellatus* (Kner, 1866)

選定理由	産卵場所を巡って在来のタナゴ類と競合するほか、絶滅危惧種ニッポンバラタナゴと容易に交雑する。県内では局地的に定着が確認されているが、水系によっては根絶できる可能性がある。また、観賞魚としての販売が行われていることから、それらが野外へ逸出しないよう、啓発による分布拡大防止が必要である。
原産地	中国中南部、朝鮮半島
生態的特徴	体長5～6cmの純淡水魚。主に止水域に生息し、ヌマガイなどの淡水性二枚貝類に産卵する。
生息環境	クリーク、水路、ため池、池沼、河川
侵入経緯	1942年に食用として持ち込まれたハクレン種苗に混入して、関東地方に放流された。県内への侵入年代は不明であるが、瑞梅寺川水系では1990年代には確認されている。
定着状況	県内：紫川水系、遠賀川水系、釣川水系、大根川水系、多々良川水系、瑞梅寺川水系、筑後川水系。 国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（タナゴ類）との競合、在来種（ニッポンバラタナゴ）との交雑
特記事項	国リスト：重点対策（No.131）、日本ワースト100

## オオクチバス

スズキ目サンフィッシュ科  
別名：ブラックバス、ラージマウスバス

*Micropterus salmoides* (Lacepède, 1802)

選定理由	幅広い水生動物を捕食し、生態系への影響が大きい。県内のほぼ全域で確認されており、根絶は困難な状況であるが、小規模な水域であれば局所根絶も可能である。また、捕食による影響を低減するための低密度化や、現在でも密放流が行われることがあるため、啓発による分布拡大防止が必要である。
原産地	北アメリカ（フロリダ州からバージニア州にかけての大西洋岸、テキサス州、メキシコ州）
生態的特徴	体長30～50cmの純淡水魚。止水域からやや流れのある比較的水質の良い環境を好む。礫底に産卵床を形成し、卵保護を行う。主に生きた魚類、甲殻類、両生類などを捕食する。
生息環境	河川、ため池、池沼、湖沼、クリーク、水路
侵入経緯	釣り対象や食用として1925年に神奈川県芦ノ湖に放流された。県内での正確な定着年は不明であるが、1970年代後半から記録がある。
定着状況	県内：各地にやや普通（分布図 p.88）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	魚類、甲殻類、両生類などの捕食、水産有用種の食害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.101）、世界ワースト100、日本ワースト100

## ブルーギル

スズキ目サンフィッシュ科

*Lepomis macrochirus* Rafinesque, 1819

選定理由	雑食性で幅広い動植物を捕食・摂食し、生態系への影響が大きい。県内のほぼ全域で確認されており、根絶は困難な状況であるが、小規模な水域であれば局所根絶も可能である。また、捕食による影響を低減するための低密度化や、啓発による分布拡大防止が必要である。
原産地	北アメリカ（カナダのセントローレンス川水系を北限とする北アメリカ大陸中央平原）
生態的特徴	体長 10～15cm の純淡水魚。止水域を好む。礫底に産卵床を形成し、卵保護を行う。魚卵、甲殻類、昆虫類、水生植物などを捕食・摂食する。
生息環境	河川、ため池、クリーク、湖沼、池沼、水路
侵入経緯	食用目的として 1966 年に静岡県一碧湖に放流された。県内での正確な定着年は不明であるが、1980 年代から記録がある。
定着状況	県内：各地にやや普通（分布図 p.89）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	水生動植物の捕食・摂食
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.99）、日本ワースト 100

## アメリカザリガニ

十脚目アメリカザリガニ科  
別名：ザリガニ*Procambarus clarkii* (Girard, 1852)

選定理由	水生の動植物を幅広く捕食・摂食しイネも食害するほか、水田の畔に穴をあけるなどの被害も知られる。県内のほぼ全域で確認されており、根絶は困難な状況である。重要地域の湿地など小規模な水域においては、低密度化の取組が必要である。また、啓発による分布拡大防止も重要である。
原産地	北アメリカ（ミシシッピ川流域を中心とした地域）
生態的特徴	全長 10～15cm になる淡水性甲殻類。水田や池沼などの浅い止水域を好むが、河川や水路などの流水域にも生息する。雑食性で様々な動植物を食べて成長する。
生息環境	水田、湿地、水路、クリーク、ため池、池沼、河川
侵入経緯	ウシガエル養殖のための餌として、1930 年に神奈川県に持ち込まれた。県内では 1934 年に柳川市に持ち込まれた記録があり、その後 1950 年代には広く分布するようになった。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	水生動植物の捕食・摂食、イネの食害
特記事項	国リスト：緊急対策（No.110）、日本ワースト 100

## セアカゴケグモ

クモ目ヒメグモ科

*Latrodectus hasselti* Thorell, 1870

選定理由	人の健康被害への懸念が強いことから、対策の必要性が高い。また、在来の多様な昆虫類を多く捕食するという報告もあり、生態系影響も懸念される。根絶を目指すとともに、公園や港湾地域など、人や物資の往来が多い場所では、早急な密度低下対策と定期的な監視が必要である。
原産地	オーストラリア
生態的特徴	腹部腹面に砂時計型の模様があり、雌は腹部背面の赤斑が目立つ。雌は $\alpha$ -ラトロトキシンという人に対して有毒な神経毒をもち、咬まれると痛みや嘔吐、痙攣などの症状が出る。産卵数が多く、生涯に最大 7～8 個の卵のうを産出し、卵のう 1 つあたり数十～200 個の卵が含まれる。
生息環境	市街地、海岸埋立地
侵入経緯	建築資材などの貨物に紛れ込んで侵入したと考えられている。国内では 1995 年に大阪府と三重県で初めて確認され、県内では 2007 年に福岡市で初めて確認された。
定着状況	県内：各地にやや普通（分布図 p.90）。国内：本州（岩手県以西）、四国、九州、沖縄
影響・被害	人体被害（神経毒）、在来種（クモ類）と競合の可能性、在来種の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.106）、日本ワースト 100

## ハイイロゴケグモ

クモ目ヒメグモ科

*Latrodectus geometricus* Koch, 1841

選定理由	生態系に対する被害報告はないが、人の健康被害への懸念が強いことから、対策の必要性が高い。また、県内へ侵入後に個体数の増加は確認されていないため、早期の防除による根絶が期待できる。港湾などの侵入ルートとなりうる場所では、定期的な生息状況の監視が必要である。
原産地	オーストラリア、中央～南アメリカ、太平洋諸島
生態的特徴	腹部腹面に砂時計型の模様がある。雌は $\alpha$ -ラトロトキシンという人に対して有毒な神経毒をもち、咬まれると痛みや嘔吐、痙攣などの症状が出る。産卵数が多く、1回の交尾で18～30個ほどの卵のうを産出し、卵のう1つあたり70～90ほどの幼体が発生する。
生息環境	市街地、海岸埋立地
侵入経緯	建築資材などの貨物に紛れ込んで侵入したと考えられている。国内では1995年に神奈川県横浜市で初めて確認され、県内でも同年に北九州市で1個体が初めて確認された。
定着状況	県内：福岡市、北九州市、大牟田市。国内：本州（東京都以西）、四国、九州、沖縄
影響・被害	人体被害（神経毒）、在来種（クモ類）と競合の可能性
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.105）

## バクヤギク

ハマミズナ科

別名：カルポプローツス・エドウリス

*Carpobrotus edulis* (L.) N.E.Br

選定理由	玄界灘海岸などの重要地域に定着している。栄養繁殖能力が高いため、在来種との競合が懸念される。現在、県内での分布は限定されており、抜き取りなどによる局所的な根絶が可能と考えられる。観賞用に栽培されており、逸出防止のための啓発も重要である。
原産地	南アフリカ
生態的特徴	多肉性の常緑多年草。茎は太さ5～7mmで、分枝しながら地表を横にはい、マット状に生育する。花期は5～11月、花は淡紅色で直径10cm程度。耐塩性と乾燥耐性が強く、海浜で砂の移動を抑えて小砂丘を形成する。栄養繁殖能力が極めて高く、葉1枚から発根し定着する。
生育環境	海岸砂浜、海岸岩上、堤防
侵入経緯	観賞用、グランドカバープランツ（地被植物）として利用されたものが逸出・野生化した。野生化は最近のことで、2000年代に愛知県で確認、県内では2010年頃に能古島で確認された。
定着状況	県内：玄界灘の海岸。河川堤防にも逸出個体が稀に見られる。国内：本州、九州
影響・被害	在来種（海浜植物）との競合、小砂丘の形成による生育・生息環境の悪化
特記事項	国リスト：重点対策（No.38）

## 園芸スイレン

スイレン科

別名：セイヨウスイレン、  
熱帯スイレン、温帯スイレン

*Nymphaea* cv.

選定理由	ため池や水路などで大繁茂し、水面を一面に覆うため、絶滅危惧種を含む水生植物や水生動物に大きな影響を及ぼしている。人気のある観賞植物で、美しい花を楽しむという善意の植栽が野生化を招き、根絶困難な状態に繁茂している事例もあるので、啓発も重要である。
原産地	園芸スイレンはスイレン属 <i>Nymphaea</i> の栽培品種の総称。ヨーロッパなどで数多く作出された。
生態的特徴	多年生の浮葉植物。園芸スイレンのうち、温帯性スイレンは分枝しながら横に伸びる地下茎を持ち、群落を広げる。熱帯性スイレンは塊状の地下茎を持つ。ほとんどの品種が在来のヒツジグサ <i>N. tetragona</i> に比べて大きく厚みのある葉を持つ。花も華美で、花色は白、黄色、赤など。
生育環境	ため池、クリーク、水路、河川
侵入経緯	栽培品種の意図的植栽及び逸出により野生化した。その年代は国内、県内ともに不明。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、在来種（ヒツジグサ）との交雑、通水阻害、底泥の堆積
特記事項	国リスト：重点対策（No.41）

## オオフサモ

アリノトウグサ科

*Myriophyllum aquaticum* (Vell.) Veldc.

選定理由	県内各地の河川、水路、ため池などに繁茂し、浅水域の水面全体に群生するため、在来種との競合、通水阻害が懸念されている。このため、特に絶滅危惧種が生育している重要湿地での防除対策が望まれる。また、特定外来生物として栽培が禁止されていることの啓発も重要である。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年生の抽水植物。茎は直径 5mm 程度と太く、分枝しながら水中を横走り、大群落を形成することもある。冬季は水面より上部の茎は黄化するが、そのまま越冬する。雄雌異株で日本では雌株のみ確認されている。栄養繁殖が極めて旺盛で、茎断片の分散により分布を拡大する。
生育環境	河川、クリーク、水路、ため池、池沼、湿地
侵入経緯	1920 年頃神戸市で確認。観賞用水草が逸出・野生化した。県内では、福岡県植物目録（1952）には未掲載、福岡県植物誌（1975）には掲載されており、この間に野生化したと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通（分布図 p.90）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、通水阻害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.27）、日本ワースト 100

## ブラジルチドメグサ

セリ科

*Hydrocotyle ranunculoides* L.f.

選定理由	筑後地域クリーク、筑後川水系、矢部川水系、祓川などで大繁茂し、通水阻害が問題化するとともに、生態系影響が懸念されている。茎の成長速度が速いことに加えて、茎断片からの再生能力が高い。水流分散などによって年々分布域が拡大しており、早急な対策が望まれている。
原産地	南北アメリカ
生態的特徴	多年生の浮葉～抽水植物。直径 3～8mm の茎が分枝しながら水面または地表を横走り、各節から 1 枚の葉と根が伸びる。茎は各節でばらばらになりやすい。花期は 4～6 月、葉の付け根から 1～数本の花茎を伸ばす。果実は成熟しないため、栄養繁殖により分布を拡大している。
生育環境	クリーク、河川、水路、ため池
侵入経緯	観賞用水草が逸出・野生化した。1998 年頃に熊本県菊池川流域で初めて確認された。県内では 2007 年に筑後地域クリーク及び筑後川での大繁茂が確認され、問題化した。
定着状況	県内：筑後地域のクリーク、筑後川、矢部川、祓川など（分布図 p.91）。国内：本州、九州
影響・被害	在来種との競合、水生動物の生息環境悪化、通水阻害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.28）。最近、千葉県への侵入・定着も確認された。

## オオキンケイギク

キク科

*Coreopsis lanceolata* L.

選定理由	道端や河原などに繁茂し、しばしば大群落をつくることから、在来種との競合が懸念される。種子生産前の抜き取りなど、低密度化を目指した防除が必要である。特定外来生物として栽培は禁止されているが、人家の庭などに植えられていることがあるため、啓発も重要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	多年草。茎は高さ 30～70cm になる。花期は 5～7 月、花（頭花）は直径 5～7cm で橙黄色。種子生産量が多く、刈り取りに対する再生力も強いいため、繁殖力が旺盛で強健な植物である。
生育環境	道端、空地、荒地、河川敷、堤防、人家周辺、道路法面、海岸砂浜、海岸埋立地
侵入経緯	明治中期（1880 年代）に渡来し、観賞用に栽培された。第二次世界大戦後（1945 年以降）に法面緑化やワイルドフラワー緑化用に利用されるようになり、1970 年代には野生化した。県内でも道路法面の緑化用に利用されたものが、1990 年代には逸出・野生化した。
定着状況	県内：各地に普通（分布図 p.91）。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.30）、日本ワースト 100

## ミズヒマワリ

キク科

*Gymnocoronis spilanthoides* (D. Don ex Hook. et Arn.) DC.

選定理由	筑後地域のクリークや水路、花宗川の岸辺に繁茂しており、在来種との競合、水生動物の生息環境悪化が懸念されている。県内での確認は2003年が最初で、現時点でも分布域はかなり限定されていることから、根ごとの抜き取りなどにより、県内において根絶できる可能性がある。
原産地	中央～南アメリカ
生態的特徴	多年生の抽水植物。茎は中空、高さ0.5～1.5mで盛んに分枝する。直立できなくなると、水面に倒伏して成長し、水面を覆う。花期は6～11月、球形で白色の花（頭花）を多数つける。種子繁殖も行うが、栄養繁殖が極めて旺盛で、茎断片のほか、葉片からカルス再生する。
生育環境	クリーク、水路、河川
侵入経緯	1995年に愛知県豊橋市の河川で確認。観賞用水草として導入されたものが逸出・野生化した。県内では2003年に筑後市のクリークで初めて確認された。
定着状況	県内：筑後地域のクリーク中木室線、花宗川など（分布図 p.92）。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、通水阻害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.31）

## ナルトサワギク

キク科

別名：コウベギク

*Senecio madagascariensis* Poir.

選定理由	ほぼ一年中開花・結実が見られ、大量の風散布種子をつけるなど、繁殖力が極めて強く、在来草本との競合が懸念される。県内への侵入は最近で、現時点では分布が限定されていることから、徹底した抜き取り作業などにより、県内において根絶できる可能性がある。
原産地	東アフリカ（マダガスカル）
生態的特徴	多年草。茎は基部で分岐して大きな株を作り、高さ30～70cmになる。花期はほぼ周年、直径約2cmの黄色の花（頭花）を多数つける、結実も一年中見られ、大量の風散布種子をつくる。繁殖力が強く、アレロパシー活性及び強度の攪乱耐性を有し、しばしば群生する。
生育環境	海岸埋立地、道端、荒地
侵入経緯	1976年に徳島県鳴門市で確認された。埋立地の緑化用種子に混入していたと考えられている。県内では2016年に福岡市（福岡アイランドシティ）での定着が初めて確認された。
定着状況	県内：福岡市東区（福岡アイランドシティ）。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、家畜の中毒（ピロリジジナルカロイドを含む）
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.33）

## コウガイセキショウモ

トチカガミ科

*Vallisneria × pseudorosulata* S. Fujii et M. Maki

選定理由	常緑性で木質化した茎を持つため、冬季に葉が枯れるセキショウモ <i>V. natans</i> よりも繁殖力が強いと考えられ、絶滅危惧種を含む在来水生植物との競合が懸念される。県内への侵入は初期段階で、遠賀川及び柳川掘割に分布が限定されており、県内において根絶できる可能性がある。
原産地	不明。コウガイモ <i>V. denseserrulata</i> とセイヨウセキショウモ <i>V. spiralis</i> との交雑に起源する雑種。
生態的特徴	多年生の沈水植物。2016年に新分類群として記載された。常緑性で、走出枝を横に伸ばし、しばしば密に群生する。花期は10～11月。雌株のみが知られており、栄養繁殖によって分布を拡大していると考えられる。流れが緩やかで水位変動の小さい場所を好む。
生育環境	河川、クリーク、水路、ため池
侵入経緯	1999年に滋賀県琵琶湖岸で採集された標本が国内最初の記録。観賞用水草として輸入・販売されたものが逸出・野生化したと推測されている。県内では2010年代に遠賀川で確認された。
定着状況	県内：遠賀川（直方市、小竹町）、柳川市内の掘割。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、在来種（セキショウモ）との交雑
特記事項	国リスト：重点対策（No.73、外来セキショウモ）

## ホテイアオイ

*Eichhornia crassipes* (Mart.) Solmsミズアオイ科  
別名：ウォーターヒヤシンス、  
ホテイソウ、ホテイ草

選定理由	繁殖力が旺盛で、各地のクレーク、ため池などで大繁茂し水面を覆い尽くすため、在来水生植物と競合する。通水障害や冬季に枯死した腐敗個体による水質悪化を引き起こす。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年生の浮遊植物。走出枝を伸ばして次々と子株を増やし、水面を覆い尽くす。高さは10～80cm、ときに1mを超える。葉柄に浮き袋があるが、過密状態では発達しない。花期は8～10月、結実は少ない。富栄養化の進んだ水路では、ほとんど花をつけない。
生育環境	河川、クレーク、水路、ため池、湖沼
侵入経緯	明治中期に観賞用及び家畜飼料として渡来した。北原白秋の詩集「思ひ出」（1911）の序文「わが生ひたち」に登場しており、すでにこの頃の柳川に見られた。帰化植物（久内、1950）には、筑後川沿岸に非常に繁殖と記されており、これ以前に広く野生化していたと考えられる。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、通水障害、水質悪化
特記事項	国リスト：重点対策（No.75）、世界ワースト100、日本ワースト100

## ボタンウキクサ

*Pistia stratiotes* L.サトイモ科  
別名：ウォーターレタス

選定理由	繁殖力が旺盛で、各地のクレーク、ため池などで大繁茂し、水面を覆い尽くすこともあるため、在来水生植物との競合などが懸念される。通水障害や冬季に枯死した腐敗個体による水質悪化を引き起こす。特定外来生物として栽培が禁止されていることの啓発も重要である。
原産地	不明（南アフリカ原産ともいわれる）
生態的特徴	多年生の浮遊植物。長さ10～30cmの葉を密につける。葉の間から走出枝を伸ばして次々と子株を増やし、水面に広がる。7～10月に小さな花を葉の基部につける。種子繁殖も行われるが、走出枝は容易に切断されるので、子株分散による栄養繁殖が極めて旺盛である。
生育環境	クレーク、水路、河川、ため池
侵入経緯	1920年代に観賞用水草として渡来した。1990年頃から関東地方以西で逸出・野生化した。県内では1988年に柳川市のクレークで大繁茂が確認された。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、通水障害、水質悪化
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.35）、日本ワースト100

## アヒル (アイガモ)

カモ目カモ科

*Anas platyrhynchos domesticus* Linnaeus, 1758

選定理由	マガモやカルガモと交雑することに加え、水生植物の摂食や在来カモ類とエサの競合が生じている可能性がある。都市公園や水田を中心に県内各地で粗放的に飼育されており、マガモまたはカルガモと交配したアイガモも広く確認されている。根絶は困難であるが、飼育個体の適切な管理により、野生個体との交雑をはじめとする被害が軽減できると考えられる。
原産地	不明 (中国産のマガモを家禽化したという説があるが、詳しいことはわかっていない)
生態的特徴	都市公園の池や小河川などの淡水域に生息し、水生植物や穀類、小型の昆虫類、土壤動物などを食べる雑食性。
生息環境	ため池、池沼、河川、水田、湿地、水路、クレーク
侵入経緯	古くから食肉用や愛玩用、水田での除草用として飼育されており、かご脱げによる逸出または放し飼い個体と野生カモ類との交雑により逸出。県内では 1941 年に初めて野外で確認された。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種 (マガモ、カルガモ) との交雑、小型動物の捕食、水生植物の摂食
特記事項	なし

## ガビチョウ

スズメ目チメドリ科

*Garrulax canorus* (Linnaeus, 1758)

選定理由	国内での詳細な影響はまだ報告されていないが、外国では在来鳥類が減少したとの報告があり、日本でも競合による在来鳥類への影響が懸念される。また、生息密度の増加による地上性昆虫類への捕食圧も危惧される。県内の全域に生息していることから根絶は困難であるが、かすみ網や落としワナなどを使った捕獲で低密度化できる可能性がある。
原産地	中国南部、海南島、台湾、香港、ベトナム北部、ラオス北部
生態的特徴	平地から丘陵地の森林と林縁に生息し、特に藪が多い環境を好む。地上で昆虫類や果実などを採食するため、積雪量の多い場所には生息しない。
生息環境	森林、林縁
侵入経緯	さえずりが美しいことから、江戸時代から愛玩用として飼育されはじめ、飼い鳥のかご脱げにより逸出した。1980 年代に北九州市で確認されたのが国内の野外で初めての記録。
定着状況	県内：各地に普通 (分布図 p.85)。国内：本州 (東北地方南部以西)、四国、九州
影響・被害	在来種 (鳥類) との競合、小型動物の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：重点対策 (No.123)、日本ワースト 100

## ソウシチョウ

スズメ目チメドリ科

*Leiothrix lutea* (Scopoli, 1786)

選定理由	ササ類が繁茂した藪を好むため、同様の環境で繁殖するコマドリ、コルリ、ウグイス、メジロなどの在来鳥類と競合する可能性があると考えられている。県内の全域の山林に生息していることから根絶は困難であるが、鳴き声をおとりに使った落としワナなどを使った捕獲で、低密度化できる可能性がある。
原産地	中国南部、ベトナム北部からミャンマー北部、インド・アッサム地方、ヒマラヤ西部
生態的特徴	丘陵地から山地の森林に生息し、特にササ類が繁茂する藪が多い環境を好む。冬期には 10 羽ほどの群れでいることが多く、積雪地では低標高地に移動する。昆虫や果実を捕食・摂食する。
生息環境	森林、林縁
侵入経緯	江戸時代から愛玩用として飼育されはじめ、かご脱げや意図的放鳥により逸出した。国内では 1931 年に初めて兵庫県で確認され、県内では 1970 年頃から野外で確認されるようになった。
定着状況	県内：各地に普通 (分布図 p.86)。国内：本州 (関東地方以西)、四国、九州
影響・被害	在来種 (鳥類) との競合、小型動物の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：重点対策 (No.126)、日本ワースト 100

## ゲンゴロウブナ

*Carassius cuvieri* Temminck & Schlegel, 1846コイ目コイ科  
別名：ヘラブナ

選定理由	在来フナ類と競合及び交雑する。すでに県内に広く定着しているが、放流履歴のない水系への放流を回避するなど、分布拡大を防ぐための啓発などを重点的に行う必要がある。
原産地	国内由来の外来種：本州（琵琶湖淀川水系）
生態的特徴	体長 30cm 程度になる純淡水魚。あまり流れのない環境を好み、原産地では主に動植物プランクトンを食べる事が明らかにされているが、放流されたものは底生動植物も食べているものと考えられる。繁殖期は春から初夏にかけてで、植物が豊富な浅い場所で卵をばらまく。
生息環境	クレーク、河川、水路、ため池、池沼、湖沼
侵入経緯	釣り対象種として淀川流域で養殖された個体が、1920 年代以降、全国各地に放流されている。県内では 1974 年に増養殖に関する研究が行われていた記録があり、その頃から断続的に放流され定着したのと考えられる。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（コイ科）との競合、在来種（フナ属）との交雑
特記事項	なし

## イチモンジタナゴ

*Acheilognathus cyanostigma* Jordan & Fowler, 1903

コイ目コイ科

選定理由	ヌマガイなどの生きた二枚貝に産卵する習性があるため、産卵資源である二枚貝を巡って在来のタナゴ類と競合する。また、在来の二枚貝も多くが希少種となっており、それらに対する悪影響も危惧される。侵入初期であるため、根絶できる可能性がある。
原産地	国内由来の外来種：本州（濃尾平野から近畿地方）
生態的特徴	体長 8cm 程度の小型の純淡水魚。あまり流れのない植生が豊富な環境を好む。繁殖期は春で、オスはヌマガイなどの淡水性二枚貝の周囲に縄張りをもち、訪れた雌はその二枚貝の鰓に卵を生み付ける。二枚貝内で孵化した仔魚は夏までには二枚貝の外に泳出し成長する。
生息環境	河川、クレーク、水路、湖沼
侵入経緯	琵琶湖産アユ種苗への混入、愛好家による放流により各地に定着した。1980 年代に熊本県などで定着が確認されはじめ、県内では 2014 年に那珂川で初めて確認された。
定着状況	県内：福岡市内の那珂川水系。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（タナゴ類）との競合
特記事項	なし

## ビワヒガイ

*Sarcocheilichthys variegatus microoculus* Mori, 1927

コイ目コイ科

選定理由	在来のカワヒガイとの交雑のおそれがあるほか、産卵母貝を巡ってカワヒガイ及びタナゴ類と競合する可能性がある。また、在来二枚貝類に対する影響も未知数である。定着している地域は限られるため、これ以上の拡散が起こらないよう啓発が必要である。
原産地	国内由来の外来種：本州（琵琶湖）
生態的特徴	体長 20cm 程度になる純淡水魚。緩やかな流れのある環境を好み、生きた二枚貝類に産卵する。遠賀川水系ではニセマツカサガイとトンガリササノハガイを利用することが知られる。
生息環境	河川、水路、湖沼
侵入経緯	食用として 1930 年代以降に全国各地に放流された記録が残っている。現在では食用としての放流は行われていない。県内では 1992 年に北九州市の河内貯水池で初めて確認された。
定着状況	県内：遠賀川水系、今川水系、板櫃川水系。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（カワヒガイ、タナゴ亜科）との競合、在来種（カワヒガイ）との交雑、在来二枚貝類への影響
特記事項	なし

## ハス

コイ目コイ科

*Opsariichthys uncirostris* (Temminck & Schlegel, 1846)

選定理由	県内では在来の多様な水生動物を捕食しており、ヌマムツとの交雑も確認されている。また、水産有用種であるアユやオイカワの食害も問題視される。根絶は困難な状況であるが、捕食による影響を低減するための低密度化や、啓発による分布拡大防止が必要である。
原産地	国内由来の外来種：本州（琵琶湖淀川水系、福井県三方湖）
生態的特徴	体長 30cm 程度の純淡水魚。通常は止水環境で生活するが、繁殖は流水環境で行う。完全な動物食性で、生きた両生類、魚類、昆虫類などを捕食する。
生息環境	河川、クリーク、水路、湖沼
侵入経緯	琵琶湖産アユ種苗に混入して放流され、1960 年代以降に日本各地で侵入・定着が報告されるようになった。県内では 1977 年頃には筑後川水系に定着していたと考えられる。
定着状況	県内：筑後川水系、矢部川水系、遠賀川水系（分布図 p.87）。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（両生類、魚類、昆虫類）の捕食、水産有用種の食害、在来種（ヌマムツ）との交雑
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.224）

## カラドジョウ

コイ目ドジョウ科

*Misgurnus dabryanus* (Dabry de Thiersant, 1872)

選定理由	絶滅危惧種である在来のドジョウとの競合や交雑のおそれがある。また、水生昆虫類を捕食していた事例があり、それらへの悪影響も危惧される。現在の分布域は限られており、根絶できる可能性がある。また、中国産のドジョウを含めて放流を防止する啓発も必要である。
原産地	朝鮮半島、中国中南部～ベトナム北部、台湾
生態的特徴	体長 10～20cm の純淡水魚。流れのない泥底の環境を好む。繁殖期は初夏で、植物が豊富な高水温の浅い湿地、水田に侵入して産卵する。
生息環境	河川、クリーク、水路、水田、湖沼、池沼
侵入経緯	中国産の食用ドジョウに混ざって輸入された。国内では 1961 年に長崎県で初めて確認され、1990 年代以降に関東地方北部で多数の定着が確認されている。県内では 2008 年に遠賀川水系彦山川（大任町）で初めて確認され、その後福津市でも定着が確認されている。
定着状況	県内：遠賀川水系彦山川（大任町）、福津市。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（コイ目）との競合、在来種（ドジョウ）との交雑、在来種（昆虫類）の捕食
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.158）

## ギギ（外来個体群）

ナマズ目ギギ科

*Tachysurus nudiceps* (Sauvage, 1883)

選定理由	県内では東部（遠賀川水系～京築地域）に自然分布するが、自然分布域外である筑後川水系での定着が確認されている。筑後川本流の中下流域ではすでに根絶は困難な状況であるが、高良川などの支流では局所根絶ができる可能性がある。
原産地	国内由来の外来種：本州～九州の瀬戸内海側、日本海側の一部（江の川、遠賀川など）
生態的特徴	体長 20～40cm の純淡水魚。緩やかな流れのある環境を好む。夜行性で魚類や甲殻類などを捕食する。岸際の石垣の間や植物の根際に営巣し、卵保護を行う。
生息環境	河川、水路
侵入経緯	琵琶湖産アユ種苗に混入して放流され、1990 年代から全国各地に定着している。筑後川水系では 2000 年代中頃から生息の情報がある。
定着状況	県内：筑後川水系。国内：本州（秋田県、新潟県、福島県、福井県、山梨県、愛知県、岐阜県、三重県）、九州（福岡県、熊本県）
影響・被害	在来種（アリアケギバチ）との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.226）

## カダヤシ

カダヤシ目カダヤシ科  
別名：タツブミノ*Gambusia affinis* (Baird & Girard, 1854)

選定理由	似た生態をもつ希少種のミナミメダカとの競合が大きな問題となっている。すでに根絶は不可能な状況であるが、まだ確認されていない水系もあることから、これ以上分布拡大しないよう啓発などを重点的に行う必要がある。
原産地	北アメリカ中部（ミシシッピ川水系）
生態的特徴	体長 3cm 程度の小型の純淡水魚。主に低平地の流れのない水路や池沼、河川では堰上の湛水域を好む。卵胎生で仔魚を産出するため非常に繁殖力が高い。水質の汚濁にも強い。
生息環境	河川、ため池、池沼、クレーク
侵入経緯	1960 年代以降、カダの幼虫（ボウフラ）防除を目的として全国各地で積極的に放流された。県内への正確な侵入年代は不明であるが、1970 年代後半以降に定着したものと考えられる。
定着状況	県内：北九州市周辺、遠賀川水系、那珂川水系、瑞梅寺川水系、雷山川水系、筑後川水系、矢部川水系など（分布図 p.88）。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種（ミナミメダカ）との競合
特記事項	特定外来生物、国リスト：重点対策（No.132）、世界ワースト 100、日本ワースト 100

## ミカンキイロアザミウマ

アザミウマ目アザミウマ科

*Frankliniella occidentalis* Pergande, 1895

選定理由	食性が極めて広く、農業の重要害虫として知られる。農業への抵抗性があるため、防虫ネットや粘着リボンによる物理的防除、タイリクヒメハナカメムシなどを用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	北アメリカ（アメリカ合衆国西部）
生態的特徴	体長 1.0～1.7mm の昆虫で、イチゴ、トマト、キュウリ、ナス、ミカン、花卉類など 59 科 219 種の植物を吸汁することが知られている。また、トマト黄化えそウイルスを媒介する。様々な農業への強い抵抗性を持ち、温暖な地域では加温施設以外でも越冬できる。
生息環境	畑地、樹園地、道端、水田畦畔
侵入経緯	詳細は不明であるが、輸入した苗または農作物に混入していた可能性が高いと考えられる。国内では 1990 年に千葉県と埼玉県で初めて確認された。県内への侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、在来植物の摂食
特記事項	日本ワースト 100

## ハナアザミウマ

アザミウマ目アザミウマ科

*Thrips hawaiiensis* (Morgan, 1913)

選定理由	食性が広く、柑橘類のほか多種類の作物の重要害虫で、特に県内ではカキの害虫としても知られている。有効な薬剤の使用、防虫ネットなどによる防除のほか、セイタカアワダチソウを増殖源とすることが知られていることから、農地周辺における外来雑草の管理も重要である。
原産地	アジア熱帯域
生態的特徴	体長約 1.0～1.3mm の昆虫で、成虫・幼虫ともにキク科をはじめとする様々な植物の花粉を食べる。また、成虫は夏から秋にかけて柑橘類、カキをはじめとする果樹類の果実に飛来し、その表面から吸汁する。
生息環境	畑地、樹園地、道端、水田畦畔、放棄畑、荒地
侵入経緯	詳細は不明であるが、輸入した苗または農作物に混入していた可能性が高いと考えられる。1980 年代以降に西日本各地で被害が報告されている。県内への侵入年代は不明。
定着状況	県内：不明。国内：本州（関東地方以西）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、在来植物の摂食
特記事項	なし

## ミナミキイロアザミウマ

アザミウマ目アザミウマ科

*Thrips palmi* Karny, 1925

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。農薬への抵抗性があるため、防虫ネットや粘着リボンによる物理的防除や、ナミヒメハナカメムシなどを用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	東南アジア
生態的特徴	体長約 1.1mm の昆虫で、ピーマン、キュウリ、ナスなど 34 科 117 種の植物を吸汁することが知られている。ウリ科植物に対してスイカ灰白色斑紋ウイルスを媒介する。様々な農薬への強い抵抗性を持つが、低温耐性が低いため九州以北では加温施設以外での越冬は困難である。
生息環境	畑地、樹園地、道端、水田畦畔
侵入経緯	詳細は不明であるが、輸入した苗または農作物に混入していた可能性が高いと考えられる。国内では 1978 年に宮崎県で初めて確認され、県内では 1981 年に初めて確認された。
定着状況	県内：不明。国内：本州（福島県以南）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、在来植物の摂食
特記事項	日本ワースト 100

## ネギアザミウマ

アザミウマ目アザミウマ科

*Thrips tabaci* (Lindeman, 1888)

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。一部の農薬への抵抗性があるため、有効薬剤の使用と、防虫ネットや紫外線除去フィルムによる物理的防除、生物的防除の組合せにより、被害軽減が可能である。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	不明（地中海沿岸地域という説がある）
生態的特徴	体長約 1.5mm の昆虫で、ネギ、タバコ、トマト、ミカン、花卉類など 20 科 73 種の植物を吸汁することが知られている。また、トマト黄化えそウイルスやアイリス黄斑ウイルスを媒介する。一部の農薬への強い抵抗性を持つ。
生息環境	畑地、樹園地、道端、水田畦畔
侵入経緯	タマネギや花卉類に付着して侵入したと考えられる。国内への侵入年代は不明であるが、1950 年代にはすでに大きな農業被害を出していた記録がある。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、在来植物の摂食
特記事項	なし

## ミナミアオカメムシ

カメムシ目カメムシ科

*Nezara viridula* (Linnaeus, 1758)

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。在来のアオクサカメムシとの交雑が知られている。農薬を用いるほか、イネの出穂前に農地の雑草を刈り払うことで、農業被害が軽減できると考えられる。
原産地	中国、台湾、東南アジア、南西諸島
生態的特徴	熱帯～亜熱帯地域原産の草食性のカメムシで、食性が広く、32 科の植物を吸汁することが知られている。イネやダイズの害虫としてよく知られ、吸汁されたコメは斑点米として品質が著しく低下する。また、在来のアオクサカメムシとの交雑例が報告されている。
生息環境	水田、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄畑、荒地、道端、河川敷、市街地、人家周辺
侵入経緯	南西諸島には在来種として分布するが、九州本土には非意図的に持ち込まれた可能性が高い。九州本土では 1950 年代に初めて確認され、県内では 1993 年に筑後市で初めて確認された。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（愛知県以西）、四国、九州、小笠原
影響・被害	農作物の食害、在来種（アオクサカメムシ）との交雑
特記事項	なし

## トコジラミ

*Cimex lectularius* Linnaeus, 1758

カメムシ目トコジラミ科  
別名：ナンキンムシ、南京虫

選定理由	人などの哺乳類に吸血し、強いかゆみや発赤を生じさせる。一部の殺虫剤への抵抗性を持つため、適切な薬剤の使用や熱処理による駆除が必要である。また、衣服やかばんなどに混入して移動分散するため、発生した場合には、分布拡大を防止するための注視が必要である。
原産地	不明
生態的特徴	体長5~8mmの茶褐色で扁平な形をした昆虫で、翅が退化し飛翔できない。哺乳類に対する吸血性を持つ。吸血されると、体内に注入された唾液でアレルギー反応が起こり、強いかゆみや発赤が生じる。一部の殺虫剤に対して強い抵抗性を持つことが知られている。
生息環境	人家
侵入経緯	江戸時代末期(1860年代)に外国船内に紛れて侵入したとされるが、詳細は不明。近年、国内で薬剤耐性を持つ個体が確認されるようになり、新たな系統が侵入していると考えられる。
定着状況	県内：福岡市などで情報があるが詳細は不明。国内：関西を中心に記録があるが詳細は不明
影響・被害	人体被害(かゆみや発赤)
特記事項	なし

## トガリアメンボ

*Rhagadotarsus kraepelini* Breddin, 1905

カメムシ目アメンボ科

選定理由	絶滅危惧種であるオヨギカタビロアメンボに対して悪影響を及ぼす可能性が示唆されており、その他の水面生活性の微少な水生昆虫類への悪影響も危惧される。侵入初期で生息地は限られており、根絶できる可能性がある。
原産地	ニューギニア島
生態的特徴	体長約7mmの小型のアメンボ。腹部末端が細く尖ることが和名の由来。ため池や湿地などの止水環境に生息し、しばしば群生する。飛翔能力が高く、国内侵入後に分布域を拡大している。
生息環境	ため池、池沼、湖沼、河川
侵入経緯	輸入された水生植物に卵が付着して侵入したと考えられている。国内では2000年に兵庫県で初めて確認され、県内では2010年に福津市と北九州市で初めて確認された。
定着状況	県内：北九州市、中間市、福津市、糸島市、上毛町(分布図 p.89)。国内：本州(福島県以西)、四国、九州
影響・被害	在来種(オヨギカタビロアメンボ)との競合、在来小型動物の捕食
特記事項	なし

## タバココナジラミ

*Bemisia tabaci* (Gennadius, 1889)

カメムシ目コナジラミ科  
別名：シルバーリーフコナジラミ

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。農薬への抵抗性があるため、黄色粘着板による物理的防除や、チチュウカイツヤコバチなどを用いた生物的防除により被害が軽減できる。
原産地	B系統(シルバーリーフコナジラミ)：インドまたはアメリカの説がある、Q系統：スペイン
生態的特徴	世界で24系統が知られており、日本には在来のJpL系統とNauru系統に加え、外来のB系統(シルバーリーフコナジラミ)とQ系統が定着している。新芽や葉を吸汁するだけでなく、トマト黄化葉巻ウイルスを媒介する。どちらの系統も一部の農薬に対して抵抗性をもつ。
生息環境	畑地、水田畦畔、道端
侵入経緯	B系統は国内では1989年に愛知県で初めて確認され、アメリカから輸入されたポインセチアに付着し分布拡大したと考えられている。県内への侵入年代は不明。Q系統は2004年に広島県、熊本県、鹿児島県で確認され、県内では2005年に初めて確認された。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、すす病の発生源
特記事項	世界ワースト100、日本ワースト100(シルバーリーフコナジラミ)

## オンシツコナジラミ

カメムシ目コナジラミ科

*Trialeurodes vaporariorum* (Westwood, 1856)

選定理由	農業の重要害虫である。生態系への影響は明らかではないが、食性が広いため、在来植物への悪影響の可能性も考えられる。黄色粘着板や光反射シートなどによる物理的防除や、オンシツツヤコバチなどを用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。
原産地	北アメリカ～南アメリカ
生態的特徴	野菜や花卉類などの様々な植物を吸汁する。本種が多発すると、排泄物にすす病が発生し、農作物の品質を低下させる。また、キュウリ黄化ウイルスを媒介する。
生息環境	畑地、水田畦畔、道端
侵入経緯	観賞用植物に寄生して侵入したと考えられる。1974年に広島県で初めて確認されたが、当年だけですでに22県に定着していた。県内では1975年に初めて確認された。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	農作物の食害、ウイルスの媒介、すす病の発生源
特記事項	日本ワースト100

## レタスヒゲナガアブラムシ

カメムシ目アブラムシ科

*Nasonovia ribisnigri* (Mosley, 1841)

選定理由	レタス類の重要害虫として知られる。結球した葉の内部や、葉のひだ状の部分に寄生し、単為生殖により増殖するため防除が困難である。また、一部の農薬への抵抗性も知られる。有効な薬剤の使用と農薬散布時期の工夫により、被害軽減が可能である。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	体長約2.5mm、体は淡黄緑色～緑色。原産地ではスグリ属を一次寄主として成長し、主にレタスなどのキク科植物を二次寄主として成熟する。温暖環境下では二次寄主上で単為発生する。本種が多発すると農作物の品質を低下させるほか、レタスモザイクウイルスを媒介する。
生息環境	畑地
侵入経緯	詳細は不明であるが、輸入した苗または農作物に混入していた可能性が高いと考えられる。国内では2010年に香川県で初めて確認され、県内でも同年に初めて確認された。
定着状況	県内：不明。国内：本州（長野県）、四国（香川県）、九州（福岡県）
影響・被害	農作物の食害、レタスモザイクウイルスの媒介
特記事項	なし

## ルビーロウムシ

カメムシ目カタカイガラムシ科  
別名：ルビーロウカイガラムシ

*Ceroplastes rubens* Maskell, 1893

選定理由	多種類の樹木の重要害虫として知られる。体表にロウ物質をまとっているため農薬が効きにくい。発育終了時期を狙った薬剤散布や、ルビーアカヤドリコバチを用いた生物的防除により被害軽減が可能である。
原産地	アジア熱帯域
生態的特徴	雌の成虫は体長3～4mm程度で、頭部や脚が退化した赤茶色のドーム状の特異な形態をしている。基本的に雌のみで繁殖する。産卵期は5～6月頃で、成虫で越冬する。幼虫、成虫ともにチャ、ツバキ、柑橘類、カキなどの幹に付着し樹液を吸い、排泄物がすす病を引き起こす。
生息環境	畑地、樹園地、道端、荒地
侵入経緯	柑橘類の苗に付着して侵入した。国内では1880年代に長崎県で初めて確認された。県内における侵入年代は不明であるが、1930年代には全国的に発生が確認されている。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（関東地方以南）、四国、九州、沖縄
影響・被害	果樹・園芸樹木の食害、すす病の発生源、在来植物の摂食
特記事項	なし

## ヤノネカイガラムシ

カメムシ目マルカイガラムシ科

*Unaspis yanonensis* (Kuwana, 1923)

選定理由	柑橘類の重要害虫として知られる。幼虫期を狙った薬剤散布、ヤノネキイロコバチやヤノネツヤコバチを用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。
原産地	中国南部
生態的特徴	雌の成虫は体長 3~4mm 程度で、頭部や脚が退化した紫褐色で矢じり状の特異な形態をしている。年 2~3 化し、夏期までに 1 回、晩秋までに 1~2 回新成虫が出現する。成虫で越冬する。幼虫、成虫ともに柑橘類の枝、幹、葉、果実などあらゆる部位に寄生し吸汁する。
生息環境	畑地、樹園地、道端
侵入経緯	詳細は不明であるが、果樹の苗木に付着して侵入した可能性が高いと考えられる。国内では 1907 年に長崎県で初めて確認された。県内への侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（関東地方以西）、四国、九州
影響・被害	果樹・園芸樹木の食害
特記事項	日本ワースト 100

## ヒメカツオブシムシ

コウチュウ目カツオブシムシ科

*Attagenus unicolor* (Brahm, 1791)

選定理由	乾燥食品や衣類などの害虫として知られる。県内における生息数は少ないと考えられるが、その生態から条件によっては増加し問題化する可能性がある。工場などでの防除対策を徹底するとともに、状況を注視して個体数の増加を未然に防ぐ対策が必要である。
原産地	不明（ヨーロッパという説がある）
生態的特徴	成虫は体長 5mm 程度。幼虫が乾燥した動物質を食べて成長し、成虫は野外において花粉を食べて生活する。通常は年 1 回羽化する。
生息環境	人家、工場、道端、森林
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って乾燥食品などに混入して侵入したと考えられるが、国内への侵入年代は不明。県内における侵入年代も不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品・動物剥製・衣類の食害、文化財被害
特記事項	なし

## シロオビマルカツオブシムシ

コウチュウ目カツオブシムシ科

*Anthrenus nipponensis* Kalik & Ohbayashi, 1985

選定理由	乾燥食品の害虫として知られる。県内における生息数は少ないと考えられるが、その生態から条件によっては増加し問題化する可能性がある。工場などでの防除対策を徹底するとともに、状況を注視して個体数の増加を未然に防ぐ対策が必要である。
原産地	中国、朝鮮半島
生態的特徴	成虫は体長 4mm 程度。幼虫は乾燥した動植物を食べて成長し、成虫は野外において花粉を食べて生活する。
生息環境	人家、工場、道端、森林
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って乾燥食品などに混入して侵入したと考えられるが、国内への侵入年代は不明。県内における侵入年代も不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品の食害、文化財被害
特記事項	なし

## トビカツオブシムシ

コウチュウ目カツオブシムシ科

*Dermestes ater* De Geer, 1774

選定理由	乾燥食品の害虫として知られる。県内における生息数は少ないと考えられるが、その生態から条件によっては増加し問題化する可能性がある。工場などでの防除対策を徹底するとともに、状況を注視して個体数の増加を未然に防ぐ対策が必要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	成虫は体長 9mm 程度。幼虫、成虫ともに乾燥した動物質を食べて成長する。乾燥食品の大害虫として知られ、食品包装などにも被害を与える。成虫で越冬し、年に 2 回羽化する。
生息環境	人家、工場
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って乾燥食品などに混入して侵入したと考えられるが、国内への侵入年代は不明。県内における侵入年代も不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品の食害、文化財被害
特記事項	なし

## ハラジロカツオブシムシ

コウチュウ目カツオブシムシ科

*Dermestes maculatus* De Geer, 1774

選定理由	乾燥食品の害虫として知られる。県内における生息数は少ないと考えられるが、その生態から条件によっては増加し問題化する可能性がある。工場などでの防除対策を徹底するとともに、状況を注視して個体数の増加を未然に防ぐ対策が必要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	成虫は体長 10mm 程度。幼虫、成虫ともに乾燥した動物質を食べて成長する。乾燥食品の大害虫で、特に魚粉などを扱う飼料工場で問題となることが多い。また、食品包装などにも被害を与える。幼虫の成育期間は条件により様々であるが、条件が良いと 2 か月ほどで成虫になる。
生息環境	人家、工場
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って乾燥食品などに混入して侵入したと考えられるが、国内への侵入年代は不明。県内における侵入年代も不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品の食害、文化財被害
特記事項	なし

## カドマルカツオブシムシ

コウチュウ目カツオブシムシ科

*Dermestes haemorrhoidalis* Küster, 1852

選定理由	乾燥食品や養蚕などの害虫として知られる。県内における生息数は少ないと考えられるが、その生態から条件によっては増加し問題化する可能性がある。工場などでの防除対策を徹底するとともに、状況を注視して個体数の増加を未然に防ぐ対策が必要である。
原産地	中～南部ヨーロッパ
生態的特徴	成虫は体長 8mm 程度。幼虫、成虫ともに乾燥した動物質を食べて成長する。
生息環境	人家、工場
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って乾燥食品などに混入して侵入したと考えられるが、国内への侵入年代は不明。県内における侵入年代も不明。
定着状況	県内：不明。国内：本州、四国、九州
影響・被害	乾燥食品の食害、文化財被害
特記事項	なし

## ハラアカコブカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科  
別名：ベニフカミキリ

*Moechotypa diphysis* (Pascoe, 1871)

選定理由	シイタケほだ木の害虫としてよく知られており、幼虫が木材を食害することでシイタケ栽培に大きな悪影響を与える。九州北部の中山間地には広く定着しており、根絶は困難であるがこれ以上の分布拡大がないよう、シイタケほだ木の取り扱いなどに注意する必要がある。
原産地	極東ロシア～中国広西省、朝鮮半島、対馬
生態的特徴	成虫は体長 30mm 程度。幼虫はクヌギやコナラなどの枯れ木を食べて成長する。年 1 回秋に羽化し、成虫で越冬する。
生息環境	森林
侵入経緯	対馬から持ち込まれたシイタケ栽培用のほだ木に混入して侵入した。県内では 1938 年の福岡市での採集例が最も古い。これは偶産と考えられている。確実に定着し被害を出した事例としては 1978 年の八女郡上陽町（現八女市）での報告が最も古い。
定着状況	県内：県南部（八女市など）の中山間地。国内：本州（広島県、山口県）、九州（福岡県、大分県）
影響・被害	在来種（カミキリムシ科）との競合、シイタケほだ木の食害
特記事項	なし

## アルファルフアタコゾウムシ

コウチュウ目ゾウムシ科

*Hypera postica* (Gyllenhal, 1813)

選定理由	世界的に問題となっているマメ科植物の害虫で、カラスノエンドウ、ウマゴヤシ、レンゲへの食害がよく知られている。海外では植物に有害なウイルスの媒介を行うとの報告もあり、新たな系統の持ち込みに注意する必要がある。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	成虫は体長 3～6mm。産卵期は 12～5 月。幼虫は植物体を食べて成長し、茎や葉などに繭を作って蛹となる。日本では年に 1 回羽化するとされている。
生息環境	草地、牧草地、水田、畑地、荒地、道端、河川敷
侵入経緯	輸入された植物種苗に付着して侵入したと考えられる。国内では 1982 年に福岡県と沖縄県で初めて確認され、その後は本州、四国、九州の全域に分布を広げた。
定着状況	県内：広く分布すると思われるが詳細は不明。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	マメ科植物の食害、ウイルスの媒介
特記事項	日本ワースト 100

## イネミズゾウムシ

コウチュウ目ゾウムシ科

*Lissorhoptrus oryzophilus* Kuschel, 1951

選定理由	イネの重要害虫としてよく知られており、主に幼虫が根を食害することでその成長に大きな悪影響を与える。イネのほかにもネザサやチガヤなどのイネ科植物を摂食する。根絶は困難であるが、個体数を一定以下に抑えるための計画的な防除が必要な状況である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	成虫は体長約 3mm。幼虫はイネの根を食べて成長し、そのまま土中で初夏に蛹化する。夏期に羽化した成虫はイネなどの葉を食べて生活し、成虫で越冬した後に、田植えされたイネに産卵する。日本に生息する系統は雌のみで単為生殖を行う。
生息環境	水田、放棄水田、池沼、河川敷
侵入経緯	輸入された乾燥植物に混入し侵入したと考えられている。国内では 1976 年に愛知県知多半島で初めて確認され、県内では 1983 年に大島で初めて確認された。
定着状況	県内：広く分布すると思われるが詳細は不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	イネ科植物の食害
特記事項	日本ワースト 100

## ヤサイゾウムシ

コウチュウ目ゾウムシ科

*Listroderes costirostris* Schoenherr, 1826

選定理由	農作物の重要害虫としてよく知られており、極めて多くの種類の植物を食害する。特にハクサイやコマツナ、ホウレンソウなどの害虫として知られる。根絶は困難であるが、個体数を一定以下に抑えるための計画的な防除が必要な状況である。
原産地	ブラジル
生態的特徴	成虫は体長約9mm。幼虫、成虫ともに植物の新芽や葉を食べる。アブラナ科、ナス科、セリ科を中心に34科以上の植物を食べることが知られる。春に蛹化し初夏に羽化した後に夏眠し、秋から活動を開始する。日本に生息する系統は雌のみで単為生殖を行う。
生息環境	畑地、水田、荒地、道端、河川敷
侵入経緯	輸入された植物種苗に付着して侵入したと考えられる。国内では1942年に岡山県で初めて確認され、県内では1951年に築上郡で初めて確認された。現在は本州以南に広く定着している。
定着状況	県内：広く分布すると思われるが詳細は不明。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	農作物の食害
特記事項	なし

## トマトハモグリバエ

ハエ目ハモグリバエ科

*Liriomyza sativae* Blanchard, 1938

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。農薬に対する抵抗性を持つため、ハモグリヤドリヒメコバチやイサエアヒメコバチなどの寄生蜂を用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	北アメリカ南部～南アメリカ
生態的特徴	幼虫は植物の葉の内部から組織を摂食する。ウリ科、ナス科、マメ科、キク科など様々な植物への食害が知られている。低温耐性が低く、加温施設以外での越冬は困難である。薬剤抵抗性が発達する。ヒメコバチ科やコマユバチ科などの在来寄生蜂に寄生されることが知られている。
生息環境	畑地、放棄畑、道端
侵入経緯	輸入された植物種苗に付着して侵入したと考えられる。国内では1999年に京都府で初めて確認された。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：不明。国内：本州（栃木県以西）、四国、九州、沖縄
影響・被害	農作物の食害
特記事項	日本ワースト100

## マメハモグリバエ

ハエ目ハモグリバエ科

*Liriomyza trifolii* (Burgess, 1880)

選定理由	食性が広く、農業の重要害虫として知られる。農薬に対する抵抗性を持つため、ハモグリヤドリヒメコバチやイサエアヒメコバチなどの寄生蜂を用いた生物的防除により、被害軽減が可能である。植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	幼虫は植物の葉の内部から組織を摂食する。マメ科、ナス科、キク科、セリ科、ウリ科など様々な植物への食害が知られている。薬剤抵抗性が発達している。ヒメコバチ科やコマユバチ科などの在来寄生蜂に寄生されることが知られている。
生息環境	畑地、放棄畑、道端
侵入経緯	詳細は不明であるが、ガーベラやキクなどの苗に付着して侵入したと考えられる。国内では1990年に初めて静岡県で発見され、県内では1992年に初めて確認された。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州（新潟県、富山県を除く）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	農作物の食害
特記事項	日本ワースト100

## ヒロヘリアオイラガ

チョウ目イラガ科

*Parasa lepida* (Cramer, 1777)

選定理由	幼虫は有毒な棘を持ち、触れると皮膚炎を起こす。また、幼虫は食性が広く庭木や果樹などの害虫として知られ、在来植物への悪影響も懸念される。発生状況の把握と、個体数を一定以下に抑えるための計画的な防除が必要である。
原産地	南アジア、東南アジア～中国
生態的特徴	幼虫は黄～黄緑色に2列の青い斑点と多数の肉質突起を持ち、突起にある棘に触れると皮膚炎を起こす。バラ科、ブナ科、カエデ科、マメ科など広い植物を摂食し、たびたび街路樹などで大発生する。外来種のヨコヅナサシガメが生息する場所では、密度が低くなるという報告がある。
生息環境	市街地、人家周辺、森林
侵入経緯	樹木に付着して侵入したと考えられている。国内では1921年に鹿児島県で初めて確認された。県内における侵入年代は不明であるが、1970年代から記録がある。
定着状況	県内：不明。国内：本州（茨城県以西）、四国、九州、沖縄
影響・被害	人体被害（皮膚炎）、花卉・園芸樹木の食害
特記事項	日本ワースト100

## スジマダラメイガ

チョウ目メイガ科

*Cadra cautella* (Walker, 1863)

選定理由	穀類をはじめとする乾燥食品の重要害虫として知られる。広域に分布しているため根絶は不可能であるが、食品衛生上の問題となる種のため、特に食品産業においては防除対策の徹底と混入防止の措置が必要である。
原産地	不明
生態的特徴	成虫は開張16～20mm、体長8～12mmで、前翅は灰褐色で濃い色の帯状紋がある。幼虫は体長約12mmの乳白色で、穀類、ナッツ類、乾燥果実、これらの乾燥加工食品などを食害する。また、幼虫や成虫が加工食品に混入して衛生害虫として問題となる。
生息環境	人家、工場
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って、農作物に混入して侵入したと考えられている。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品の食害
特記事項	なし

## ノシメマダラメイガ

チョウ目メイガ科  
別名：ノシメコクガ*Plodia interpunctella* (Hubner, 1813)

選定理由	穀類をはじめとする乾燥食品の重要害虫として知られる。広域に分布しているため根絶は不可能であるが、食品衛生上の問題となる種のため、特に食品産業においては防除対策の徹底や混入防止の措置が必要である。
原産地	不明
生態的特徴	成虫は開張13～16mm、体長7～8mmで、前翅は淡黄色と赤褐色の模様になる。幼虫は体長約10mmで、穀類、ナッツ類、チョコレート菓子などの油分の多い乾燥加工食品などを食害する。また、幼虫や成虫が加工食品に混入して衛生害虫として問題となる。
生息環境	人家、工場
侵入経緯	明治時代以降の貿易量の増加に伴って、農作物に混入して侵入したと考えられている。国内では、1917年に大豆倉庫で発生したのが初めての確認とされる。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	乾燥食品の食害
特記事項	なし

## アメリカシロヒトリ

チョウ目ヒトリガ科

*Hyphantria cunea* (Drury, 1773)

選定理由	食性が極めて広く、園芸樹木の害虫としてよく知られる。生態系への影響は明らかとなっていないが、600種以上の樹種を加害することが知られているため、在来植物への悪影響も懸念される。発生状況の把握と、計画的な防除の推進による被害軽減が必要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	サクラ、ヤナギ、カキ、クワ、コナラなど極めて広い植物を摂食する。幼虫はいわゆる毛虫であるが、触れても人体には影響がない。しばしば大発生を起こし、街路樹や公園樹木の葉をほとんど食べつくすことがあり、樹木の衰退や景観の悪化が生じる。
生息環境	市街地、人家周辺、森林
侵入経緯	第二次世界大戦後、アメリカ軍の物資に混入して侵入したと考えられている。国内では1945年に東京で初めて確認され、県内では1970年に福岡市で初めて確認された。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、小笠原
影響・被害	園芸樹木の食害
特記事項	日本ワースト100

## セイヨウミツバチ

ハチ目ミツバチ科

*Apis mellifera* Linnaeus, 1758

選定理由	在来のニホンミツバチと餌資源が競合し、巣を襲い盗蜜することが知られる。人への攻撃性は高くないが、刺傷被害が生じることがある。産業管理下から逸出しないよう注意が必要である。
原産地	ヨーロッパ、アフリカ、中近東
生態的特徴	ニホンミツバチよりも採蜜量が多いため、現在の養蜂のほとんどで使用されている。農作物の送粉者としても産業上重要である。スズメバチ類による捕食圧に対抗する行動を持たず、低温耐性が低い。
生息環境	畑地、樹園地、放棄畑、道端、荒地、草地
侵入経緯	野生種はヨーロッパ、アフリカ、中近東に分布していたが、北アメリカで養蜂用として品種改良されたものが、1876年から日本に導入された。県内では1900年頃からセイヨウミツバチを用いた養蜂の記録がある。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種（ニホンミツバチ）との競合
特記事項	なし

## スクミリンゴガイ

タマキビガイ目リンゴガイ科  
別名：ジャンボタニシ、ラプラタリンゴガイ

*Pomacea canaliculata* (Lamarck, 1822)

選定理由	イネを含む多くの水生植物を食害する。県内の全域で確認されており、根絶は困難な状況であるが、小規模な水域であれば局所根絶も可能と考えられる。また、摂食による影響を低減するための低密度化や、啓発による分布拡大防止が必要である。
原産地	南アメリカ（ラプラタ川、パナマ川、パラグアイ川などの流域）
生態的特徴	殻高8cm程度になる大型の淡水性巻貝。水田や池沼などの浅い止水環境に生息する。雌雄異体で、雌は水面上にある植物やコンクリート壁面などに鮮やかなピンク色の卵塊を産む。県内産種については当初ラプラタリンゴガイ <i>P. insularum</i> として扱われていたが、後に改められた。しかしラプラタリンゴガイも国内に侵入しており、こちらも県内に分布する可能性がある。
生息環境	水田、クレーク、河川、ため池、池沼、水路
侵入経緯	1981年に台湾を経由して長崎県に持ち込まれた。県内では1985年頃に確認されている。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州（茨城県・栃木県以南）、四国、九州、沖縄
影響・被害	水生植物の摂食、イネの食害
特記事項	国リスト：重点対策（No.136）、世界ワースト100、日本ワースト100

## カラムシロ

新腹足目オリイレコフバイ科

*Nassarius sinarus* (Philippi, 1851)

選定理由	希少種を含む在来の海産巻貝類と競合すると考えられており、生態系への影響が懸念される。個体数が増加すると、漁網中の漁獲物への食害が生じるとの報告もある。分布拡大しないよう、貝類などの放流時に本種が混入していないか注意する必要がある。
原産地	中国沿岸
生態的特徴	干潟に生息する巻貝で、殻高は2cm程度になる。腐肉食で、様々な動物の死骸を食べる。水質汚濁に耐性がある。
生息環境	干潟（潮間帯上部～潮下帯）
侵入経緯	アゲマキやアサリなどの放流種苗に混入して侵入したと考えられている。2000年に国内で初めて、佐賀県太良町～福岡県矢部川河口で生息が確認され、2001年には有明海で漁業被害が報告された。その後、2002年には瀬戸内海で生息が確認された。
定着状況	県内：有明海。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（海産巻貝類）との競合、漁網中の漁獲物（ハゼ類、エビ類など）の食害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.187）

## チャコウラナメクジ

新腹足目コウラナメクジ科

*Lehmannia valentiana* (Férussac, 1822)

選定理由	食性が広く、農業や家庭菜園の害虫として知られる。陸生貝類と競合する。広域に分布しているため根絶は困難であるが、メタアルデヒドによる誘殺や農薬散布により、被害軽減が可能である。また、植物に付着して分布拡大するため、苗の搬出入には注視が必要である。
原産地	イベリア半島
生態的特徴	体長5～7cmの中型のナメクジで、体の前方背面が甲羅状になり、甲羅には2本の縦条の模様がある。多湿な環境を好み、日没から明け方に活動し、昼間は石や植木鉢の下などにひそむ。
生息環境	市街地、人家周辺、畑地、道端、河川敷、荒地
侵入経緯	第二次世界大戦後の1950年代後半にアメリカ軍物資に混入して本州へ侵入したと考えられている。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、小笠原
影響・被害	農作物の食害、在来種（陸生貝類）との競合
特記事項	日本ワースト100

## ムラサキイガイ

イガイ目イガイ科

*Mytilus galloprovincialis* Lamarck, 1819

選定理由	カキやフジツボ類などの沿岸付着動物や、ヒジキなどの付着植物と生息環境が競合するため、水産業被害や生態系被害が生じる。県内で定着が確認されている洞海湾では、生息数が著しく減少しているが、他の未定着の場所へ分布拡大しないよう、船舶やブイなどへの付着及びバラスト水への混入について、定期的な監視を行う必要がある。
原産地	地中海沿岸
生態的特徴	沿岸の岩や護岸、排水施設、カキ棚などに付着する二枚貝で、表面は黒紫色や黒褐色、殻長は最大10cm程度になる。プランクトン食で、富栄養な港湾に多く生息し、高水温には弱い。
生息環境	岩礁、港湾
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のブイに付着のいずれかで侵入したと考えられる。国内では1932年に兵庫県で初めて確認され、県内では1990年代には洞海湾に定着していた。
定着状況	県内：各地にやや普通。全国：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（沿岸付着動植物）との競合、水産業被害、水質汚濁
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.191）、世界ワースト100、日本ワースト100

## ミドリイガイ

イガイ目イガイ科

*Perna viridis* Linnaeus, 1758

選定理由	カキやフジツボ類などの沿岸付着動物や、ヒジキなどの付着植物と生息環境が競合するため、水産業被害や生態系被害が生じる。県内で定着が確認されている洞海湾では、生息数が著しく減少しているが、他の未定着の場所へ分布拡大しないよう、船舶やパイなどへの付着及びバラスト水への混入について、定期的な監視を行う必要がある。
原産地	インド洋～西太平洋の熱帯域
生態的特徴	沿岸の岩や護岸、排水施設などに付着する二枚貝で、表面は緑青色で緑が鮮やかな緑色になり、殻長は最大 10cm 程度になる。プランクトン食で富栄養な港湾に多く生息し、低水温に弱い。
生息環境	岩礁、港湾
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のパイに付着のいずれかで侵入したと考えられる。国内では 1967 年に兵庫県で初めて確認され、県内では 1990 年代には洞海湾に定着していた。
定着状況	県内：洞海湾。国内：本州（山形県・千葉県以西）、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（沿岸付着動植物）との競合、水産業被害、水質汚濁
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.192）

## コウロエンカワヒバリガイ

イガイ目イガイ科

*Xenostrobus securis* (Lamarck, 1819)

選定理由	汽水性の付着動植物と生息環境が競合するほか、水路や排水施設などに付着して汚損被害や通水阻害を起こす。県内で定着が確認されている洞海湾では生息密度が高く根絶は困難であるが、未定着の場所へ分布拡大しないよう、船舶などへの付着について監視を行う必要がある。
原産地	オーストラリア、ニュージーランド
生態的特徴	汽水域の岩や護岸、排水施設などに付着する二枚貝で、表面は赤みがかった黒褐色になり、殻長は 3cm 程度になる。プランクトン食で、富栄養な港湾に多く生息する。水質汚濁に強く、幅広い塩分濃度に耐性がある。
生息環境	河口域、港湾
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のパイに付着のいずれかで侵入したと考えられる。国内では 1972 年に岡山県で初めて確認され、県内では 1990 年代には洞海湾に定着していた。
定着状況	県内：洞海湾、博多湾。全国：本州（千葉県・富山県以南）、四国、九州
影響・被害	在来種（汽水性付着動植物）との競合、排水施設の汚損、通水阻害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.193）、日本ワースト 100

## イガイダマシ

マゴコロガイ目カワホトトギスガイ科

*Mytilopsis sallei* (Recluz, 1849)

選定理由	汽水性の付着動植物と生息環境が競合するほか、水路や排水施設などに付着して汚損被害や通水阻害を起こす。県内で定着が確認されている洞海湾では生息密度が減少しているが、未定着の場所へ分布拡大しないよう、船舶やパイなどへの付着について監視を行う必要がある。
原産地	メキシコ湾、カリブ海
生態的特徴	汽水域の潮間帯の岩や護岸、排水施設などに付着する二枚貝で、表面は汚白色～淡褐色で、殻長は 2.5cm 程度になる。プランクトン食で、富栄養な港湾に多く生息し、低水温には弱い。
生息環境	河口域、港湾
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のパイに付着のいずれかで侵入したと考えられる。国内では 1974 年に静岡県で初めて確認され、県内では 1984 年に洞海湾で初めて確認された。
定着状況	県内：洞海湾。国内：本州（千葉県、東京都、富山県、静岡県、愛知県、和歌山県、大阪府）、九州（福岡県）
影響・被害	在来種（汽水性付着動植物）との競合、排水施設の汚損、通水阻害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.195）

## 台湾シジミ

マルスダレガイ目シジミ科

*Corbicula fluminea* (O.F. Müller, 1774)

選定理由	在来のシジミ類と生息環境が競合するほか、交配過程で在来シジミ類を駆逐する。また、死亡個体による水質汚濁や、取水施設での通水障害が生じた例もある。県内での詳細な分布状況は不明であるが、在来のマシジミと誤って放流されないよう、啓発が必要である。
原産地	ロシア、中国南東部、朝鮮半島、台湾
生態的特徴	淡水性の二枚貝で、在来のマシジミやヤマトシジミより小型で、殻長が 2.5cm 程度になる。雌雄同体で、雄性発生で精子側の遺伝子のみが遺伝する。在来シジミ類よりも精子の放出量が多く、在来のシジミ類が本種の精子を受精すると、幼生がすべて台湾シジミになる。
生息環境	水路、河川、池沼、湖沼
侵入経緯	食用として輸入された個体が放流・遺棄されて定着したと考えられている。国内では 1985 年に岡山県で初めて確認された。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：詳細は不明。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（シジミ類）との競合、在来種（シジミ類）との交雑、水質汚濁、通水障害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.194）

## カニヤドリカンザシ

ケヤリムシ目カンザシゴカイ科  
別名：ヤドカリカンザシ

*Ficopomatus enigmaticus* (Fauvel, 1923)

選定理由	カキなどの沿岸付着動物と生息環境が競合するため、水産業被害や生態系被害が生じる。また、発電所や工場などの取水施設に付着し、汚損被害が生じる例もある。根絶は困難であるが、幼生の定着直後に駆除を行うことで被害が軽減できる。
原産地	不明（ヨーロッパ大西洋岸またはインド洋・オーストラリア周辺原産という説がある）
生態的特徴	体長 1~2cm。白または茶色の石灰質の管（棲管）を作り、岩や護岸、排水施設、貝類の殻などに固着して生活する。懸濁物を濾過して食べる。低塩分と水質汚濁に耐性があり、内湾域まで広く分布する。
生息環境	岩礁、港湾、河口域
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のブイに付着などにより侵入したと考えられている。国内では 1966 年に岡山県で初めて確認され、県内では 1990 年代に博多湾で確認された。
定着状況	県内：博多湾。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（沿岸付着動物）との競合、水産業被害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.198）

## カサネカンザシ

ケヤリムシ目カンザシゴカイ科

*Hydroides elegans* (Haswell, 1883)

選定理由	カキやアコヤガイなどの沿岸付着動物と生息環境が競合するため、水産業被害や生態系被害が生じる。また、発電所や工場などの取水施設に付着し、汚損被害が生じる例もある。根絶は困難であるが、幼生の定着直後に駆除を行うことで被害が軽減できる。
原産地	不明（最も古い記録はオーストラリア）
生態的特徴	体長 2~4cm。白い石灰質の管（棲管）を作り、岩や護岸、排水施設、貝類の殻などに固着して生活する。懸濁物を濾過して食べる。低塩分への耐性があり、内湾域まで広く分布する。
生息環境	岩礁、港湾、河口域
侵入経緯	船のバラスト水に混入、船体に付着、外国製のブイに付着などにより侵入したと考えられている。国内では 1928 年に和歌山県で初めて確認され、1970 年代には太平洋側に分布を拡大し、1980 年代には日本海側にも分布するようになった。県内における侵入年代は不明。
定着状況	県内：博多湾。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（沿岸付着動物）との競合、水産業被害
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.199）、日本ワースト 100

## マツノザイセンチュウ

ヨウセンチュウ目アフエレンクス科

*Bursaphelenchus xylophilus* (Steiner & Buhrer, 1934)

選定理由	マツ枯れの進行により照葉樹林化が進むなど、植生や景観の変化が生じている。また、マツに依存する動植物の生息・生育環境の悪化も懸念される。海岸林や重要地域の残存マツ林に対しては殺線虫剤などによる防除が必要であるが、薬剤散布による在来動物への配慮も必要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	マツ枯れの原因となるセンチュウ。ヒゲナガカミキリ属 <i>Monochamus</i> の成虫の気門に入り、カミキリムシが健全なマツ類を採食する際に樹木内に侵入する。マツ類の体内に入ると、仮道管の閉塞などを引き起こし、通水障害により枯死に至る。
生息環境	森林（マツ林）
侵入経緯	造船用に輸入された木材に付着して侵入したと考えられる。1905年に長崎県で初めて確認された。県内における侵入年代は不明であるが、1920年代頃からマツ枯れ被害が生じている。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	マツ類の枯死、マツ林に生息する昆虫類への間接的影響
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.184)、日本ワースト 100

## オオマリコケムシ

掩喉目オオマリコケムシ科

別名：クラゲコケムシ

*Pectinatella magnifica* (Leidy, 1851)

選定理由	時として湖沼や水路で大発生し、取水口や水門に詰まる、漁網に絡むなどの被害が知られる。また、在来のコケムシ類に対しても何らかの悪影響を及ぼしている可能性がある。特に水質が悪化した池沼や水路での大発生がみられるため、水質環境の管理による対策が可能である。
原産地	北アメリカ東部
生態的特徴	止水域に生息し、最大で 40cm 程度の球形から円盤状の寒天質の群体を形成する。群体は多数の個虫が集合したもので、水中の微生物などを食べる。有性生殖と無性生殖により増殖する。
生息環境	クレーク、ため池、池沼、湖沼、水路、河川
侵入経緯	北アメリカ産魚類の種苗に混入して侵入した可能性があるが、詳細は不明。国内では 1972 年に山梨県河口湖で初めて確認された。県内では 2007 年には各地で確認されているが、それ以前から定着していたことは明らかである。正確な侵入年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州（福島県・新潟県以西）、四国、九州
影響・被害	通水障害、漁網の破損、在来種（コケムシ類）との競合、景観上の不快感
特記事項	なし

## オカダンゴムシ

等脚目オカダンゴムシ科

別名：ダンゴムシ

*Armadillidium vulgare* (Latreille, 1804)

選定理由	様々な農作物の若芽、若苗の茎や葉を食害することが知られている。また、在来のワラジムシ類との競合のおそれもある。県内のほぼ全域で確認されており根絶は困難な状況であるが、適切な雑草管理や湿度管理を行うことにより、大量発生が抑制され、農業被害が軽減できる。
原産地	ヨーロッパ（地中海沿岸）
生態的特徴	体長 14 mm 程度になる陸上節足動物。やや湿った石灰質の土壌を好む。刺激を受けるとほぼ完全な球形になり静止する。雑食性で様々な動植物を食べて成長する。
生息環境	市街地、人家周辺、畑地、道端、河川敷、荒地
侵入経緯	1880 年代～1920 年頃にかけて輸入物資に紛れて国内に侵入、定着したと考えられている。県内での正確な侵入年代は不明であるが、1940 年代には全国的に広く定着していたようである。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	農作物の食害、在来種（ワラジムシ類）との競合
特記事項	なし

## 外来アゾラ属

*Azolla* spp.

アカウキクサ科  
別名：アイオオアカウキクサ、  
アメリカオオアカウキクサほか

選定理由	アイガモ農法で使用されており、県内においても、ため池やクリークなどで野生化している。繁殖力が旺盛で、水面全体を赤く覆うこともあり、在来種への影響が危惧される。
原産地	アメリカオオアカウキクサ（アゾラ・クリスタータ） <i>A. cristata</i> は南北アメリカ
生態的特徴	シダ植物に分類される小型の浮遊植物。全体は円形～やや五角形、長さ5～30mm。藍藻のアナベナ属 <i>Anabaena</i> が共生し空中窒素固定を行う。水鳥の足などに付着して容易に拡散する。アメリカオオアカウキクサは急激に姿を消し、現在、分布を拡大しているものの大半は、人工雑種のアイオオアカウキクサ <i>A. cristata</i> × <i>A. filiculoides</i> であり、胞子による繁殖は行われない。
生育環境	ため池、クリーク、水路、湖沼、水田
侵入経緯	アイガモ農法における餌飼料として2000年代前半頃から外来アゾラ類が使用されるようになり、それが2000年代中頃に逸出・野生化した。県内でも同時期に野生化したと考えられる。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、在来種（アカウキクサ類）との交雑、富栄養化、全面繁茂による陸地誤認
特記事項	特定外来生物（アメリカオオアカウキクサ）。国リスト：緊急対策（No.23、外来アゾラ類）

## オオバヤシャブシ

*Alnus sieboldiana* Matsum.

カバノキ科

選定理由	砂防緑化樹として植栽された個体由来のものが、玄界灘沿岸、島嶼、丘陵～山地に野生化しており、在来種との競合が懸念される。大量の花粉を飛散させるため、花粉症の原因植物である。
原産地	国内由来の外来種：本州（福島県～和歌山県の太平洋岸）
生態的特徴	落葉小高木。幹は高さ5～10m。花は3～4月、葉の展開前に咲く。雄花（花序）は長さ約4.5cmで頭は垂れ下がり、雌花（花序）は上向きに1つ咲く。果実（果穂）は10～11月に熟し、長さ2～2.5cm。種子（堅果）は翼があり、風で散布される。空中窒素固定を行う放線菌と共生するため、痩せ地や乾燥地でもよく生育する。
生育環境	海岸林、二次林、崩壊地
侵入経緯	明治時代から砂防用樹種として植栽されてきたものが逸出・野生化した。県内では、第二次世界大戦後に海岸林への植栽や砂防用に植栽されたものが逸出し、1970年代には野生化した。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（近畿地方以西）、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、花粉症の原因植物
特記事項	なし

## ナガバギシギシ

*Rumex crispus* L.

タデ科

選定理由	道端や草地などにやや稀に見られる。平尾台や玄界灘海岸域などにも侵入し、在来種との競合、在来種ギシギシ <i>R. japonicus</i> との交雑が懸念される。
原産地	ヨーロッパ～アジア
生態的特徴	多年草。ギシギシによく似る。茎は直立して高さ0.8～1.5m、上部で分枝する。根出葉は長柄があり、長さ10～30cm、幅3～8cm。花期は4～7月、円錐状に花をつける。日当たりのよい、やや湿ったところを好む。ギシギシ属 <i>Rumex</i> の植物は交雑しやすいという特性を持つ。
生育環境	道端、荒地、河川敷、草地、畑地、樹園地、牧草地
侵入経緯	明治中期に渡来したと考えられている。1891年に東京で採集された個体に和名がつけられた。県内では福岡及其近郊植物目録（1925）に掲載されていることから、1910年代には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、在来種（ギシギシ）との交雑、畑作物や牧草との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.108）

## エゾノギシギシ

*Rumex obtusifolius* L.

タデ科  
別名：ヒロハギシギシ

選定理由	道端や草地などにやや普通に見られる。平尾台や玄界灘海岸域などにも侵入し、在来種との競合、在来種ギシギシ <i>R. japonicus</i> との交雑が懸念される。また、根茎からの再生力が強い雑草であるため、畑作物との競合も懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。茎は直立して高さ 0.5~1.3m、中部以上で分枝する。根出葉は長柄があり、葉は長さ 30cm、幅 12cm に達する。花期は 5~7 月、円錐状に花をつける。日当たりのよい、やや湿ったところを好む。根茎からの再生力が強く、世界的な強害雑草として知られている。
生育環境	道端、荒地、河川敷、草地、畑地、樹園地、牧草地
侵入経緯	明治中期に非意図的に渡来した。その後、1909 年に北海道での採集個体に和名がつけられた。県内には第二次世界大戦後（1945 年以降）に侵入し、1960 年代に急激に分布を拡大した。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、在来種（ギシギシ）との交雑、畑作物や牧草との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.109）

## ヨウシュヤマゴボウ

*Phytolacca americana* L.

ヤマゴボウ科  
別名：アメリカヤマゴボウ

選定理由	県内各地の草地、荒地などに野生化し、普通に見られる。沖ノ島などの島嶼において、台風倒木後の林内や林縁で増加しており、在来種との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	大型の多年草。茎は高さ 0.7~2.5m、分枝し、しばしば紅色を帯びる。根は肥大して肉質。花期は 6~8 月、白色または紅色を帯びた花をつける。果実は液果で黒熟し、房は垂れ下がる。根に有毒な硝酸カリウムを含み、アレロパシー作用がある。葉や果実も有毒である。
生育環境	道端、空地、荒地、草地、林内、林縁
侵入経緯	明治初期（1870 年頃）に渡来したといわれている。国内における定着年代の詳細は不明。県内では、福岡県植物目録（1952）に「やや稀」として掲載されていることから、1930~1940 年代に定着したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、有毒植物（全草、特に果実、根）
特記事項	なし

## シロバナマンテマ

*Silene gallica* L. var. *gallica*

ナデシコ科

選定理由	海岸砂浜やクロマツ林内、河原などに生育する。特に海岸に多く、しばしば群生するので、在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	一年草または越年草。マンテマ <i>S. gallica</i> var. <i>quinquevulnera</i> の基本変種。全体に粗い毛が生えている。茎は基部より分枝し、高さ 20~50cm。花期は 5~6 月、直径 8mm 程度の花をつける。花は白色または淡紅色である。温帯~熱帯にわたり広く見られる雑草で、種子繁殖をする。
生育環境	海岸砂浜、海岸林、海岸埋立地、草地、河川敷、畑地、荒地
侵入経緯	園芸植物として渡来したマンテマと異なり、非意図的に持ち込まれたといわれているが、定着年代、場所などの詳細は不明。県内では 1960 年代にときどき見受けられたとの記録がある。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.111、マンテマに含まれる）

## マンテマ

ナデシコ科

*Silene gallica* L. var. *quinquevulnera* (L.) W.D.J. Koch

選定理由	海岸砂浜やクロマツ林内、河原などに生育する。特に海岸に多く、しばしば群生するので、在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	一年草または越年草。シロバナマンテマ <i>S. gallica</i> var. <i>gallica</i> の変種。シロバナマンテマと同様に、全体に粗い毛が生え、茎は高さ 20~50cm。花期は 5~6 月、シロバナマンテマと異なり、花は紅紫色で花弁の縁に白い縁取りがある。
生育環境	海岸砂浜、海岸林、海岸埋立地、草地、河川敷、畑地、荒地
侵入経緯	江戸時代の弘化年間（1844~1848 年）に園芸植物として渡来し、その後、逸出・野生化した。県内では 1892 年に福岡市（当時の那珂郡堅粕村及び糟屋郡名島）で初めて確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.111）

## ホコガタアカザ

アカザ科

別名：アレチハマアカザ

*Atriplex prostrata* Boucher ex DC.

選定理由	海岸砂浜や埋立地などに生育し、群生しているところもある。同属の在来海浜植物であるハマアカザ <i>A. subcordata</i> などとの競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	一年草。茎は高さ 20~60cm で、下部より分枝する。葉は三角形で、基部がほこ形に張り出し、長さ 2~7cm。若い葉や茎は白色を帯びた球状突起で覆われる。花期は 8~10 月、雌雄の小さな花が穂状につく。
生育環境	海岸砂浜、海岸岩上、海岸埋立地、河口域
侵入経緯	1945 年に東京で採集されたものが最初の記録。県内では 1966 年に北九州市で採集された記録がある。
定着状況	県内：各地の海岸に普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種（海浜植物）との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.112）

## ウラジロアカザ

アカザ科

*Chenopodium glaucum* L.

選定理由	海岸砂浜や埋立地、河川などに生育し、群生しているところもある。在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ~アジア
生態的特徴	一年草。茎は高さ 10~40cm。茎は多数の枝を分枝し、ときに紅色を帯びる。葉は厚く、長楕円形、長さ 3~6cm。葉の裏は球状突起が密生して白色になる。花期は 6~9 月、茎の先や葉の付け根から伸びた軸に穂状に花をつける。種子の生産量は 1 株あたり 8 万個にもなる。
生育環境	海岸砂浜、海岸岩上、海岸埋立地、河口域、河川
侵入経緯	1891 年に神奈川県及び宮城県での生育が報告された。県内では 1965 年頃に北九州市での採集記録がある。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種（海浜植物）との競合
特記事項	なし

## ナガエツルノゲイトウ

ヒユ科

*Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb.

選定理由	茎切片による栄養繁殖が極めて旺盛で、日当たりのよい肥沃な条件下では急激に増殖することから、在来種との競合、水生動物の生息環境悪化が懸念される。農業用水路の通水阻害も懸念される。県内分布は限定されているので、刈り取りなどによる分布拡大防止対策が望まれる。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	水辺の湿った環境に生える多年草。茎は長さ0.5~1mに達する。横にはう茎の基部から数多く分枝し、発根する。花期は4~10月、花は球状で直径12~16mm、1~4cmの柄がある。花の色は白色または灰白色。長期間の乾燥に耐えられるので、陸上でも生育できる。
生育環境	河川、クリーク、水路
侵入経緯	1989年に兵庫県尼崎市で採集された。観賞用水草として意図的に導入後、逸出・野生化したと考えられる。県内では2005年に遠賀川での確認記録があるが、現状不明である。
定着状況	県内：不明。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、通水阻害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.24）

## ホソアオゲイトウ

ヒユ科

*Amaranthus hybridus* L.

選定理由	県内各地に普通に見られ、平尾台などの重要地域にも繁茂している。高さ2mにも達する大型の草本であることから、在来種との競合が懸念される。最近、ダイズ畑での発生が急激に拡大しており、防除対策が求められている。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	高さ1~2mになる大型の一年草。主茎が伸び上がり、その後下方から枝が分かれて斜上し、大きな株を形成する。葉は長さ5~13cm。8月頃から花をつけはじめる。花は緑色。種子生産量が多く、1つの花の枝に7,000個以上の種子をつける。
生育環境	畑地、放棄畑、荒地、草地、河川敷
侵入経緯	1920年代後半には国内に定着していたといわれている。県内では第二次世界大戦終結（1945年）までに侵入・定着したと推測されている。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物（ダイズ）との競合
特記事項	なし

## ウチワサボテン属

サボテン科

別名：ウチワサボテン、センニンサボテンほか

*Opuntia* spp.

選定理由	玄界灘の海岸砂浜で稀に野生化個体が見られ、在来の海浜植物と競合する可能性がある。観賞用に栽培されており、逸出防止のための啓発も重要である。
原産地	南北アメリカ
生態的特徴	多年草。ウチワサボテン属は種数が300種近くあり、小型で茎が横にはう種から、大型で木本性の茎を持つ種までである。観賞用に多くの種が栽培され、果実も食用になる。ウチワサボテン <i>O. ficus-indica</i> やセンニンサボテン <i>O. stricta</i> は、高さ1~2mになる大型の種で、うちわ状の茎をもつ。葉は鱗片状ですぐに脱落し、脱落したところから多数の棘を出す。
生育環境	海岸砂浜、海岸岩上
侵入経緯	江戸時代に観賞用として渡来した。最近、剪定枝や不要な株が廃棄されて野生化したと考えられるが、その年代は不明。
定着状況	県内：玄界灘の海岸。国内：不明（長野県、愛知県、香川県、沖縄県などで報告がある）
影響・被害	在来種（海浜植物）との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.39）、世界ワースト100（センニンサボテン）

## アツミゲシ

ケシ科

*Papaver somniferum* L. subsp. *setigerum* (DC.) Arcang.

選定理由	道端、荒地などで分布を拡大している。未熟果実にもルヒネ成分を含むことから、あへん法により栽培が禁止されている植物である。
原産地	地中海沿岸
生態的特徴	一年草または越年草。茎や葉は白みがかった緑色。茎は直立し、高さ 30~70cm。葉の基部は茎を抱く（栽培が禁止されているケシ類の特徴の一つ）。花期は 4~5 月、花は直径 6~10cm、赤~濃紫色で中心は濃色になる。
生育環境	道端、空地、荒地、人家周辺、河川敷、堤防、畑地、樹園地
侵入経緯	1964 年に愛知県渥美半島での野生化が国内で初めて報告された。県内では、福岡県植物誌（1975）に未掲載であるので、1970 年代後半以降に定着したと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	有毒植物（未熟果実にもルヒネ成分を含む）
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.115）

## カラシナ

アブラナ科

別名：セイヨウカラシナ、菜の花

*Brassica juncea* (L.) Czern.

選定理由	河川、荒地などで分布を拡大している。群生することがあるため、河原や草原に生育する植物との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ~アジア
生態的特徴	一年草または二年草。茎は直立し、上部で分枝して、高さ 30~100cm。葉は下部のもので長さ 30cm に達する。花期は 3~5 月、花は黄色で、花弁の長さ 10~12mm。日当たりのよい温暖地を好み、肥沃地ほど生育がよい。
生育環境	河川敷、堤防、草地、道端、荒地、畑地、樹園地、牧草地
侵入経緯	奈良時代~平安時代初期頃に中国から渡来した。第二次世界大戦後（1945 年以降）に分布を広げたものは、別にヨーロッパや北アメリカから入ったものと推測されている。県内では、福岡県植物誌（1975）に未掲載であるので、1970 年代後半以降に定着したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、堤防の強度低下（根が土中に深く入るため）、家畜（反芻動物）の中毒
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.117）

## セイヨウアブラナ

アブラナ科

別名：セイヨウナタネ、菜の花

*Brassica napus* L.

選定理由	河川、草地などで分布を拡大している。県内ではカラシナ <i>B. juncea</i> よりも群生していることが多い。大繁茂することから、河原や草原に生育する植物との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ~アジア
生態的特徴	一年草または二年草。茎は粉白色を帯びる。茎は直立し、上部で分枝して、高さ 30~150cm。花期は 2~5 月、花は黄色。花弁の長さ 10~18mm でカラシナよりやや大きい。日当たりのよい温暖地を好み、肥沃地ほど生育がよい。
生育環境	河川敷、堤防、草地、道端、荒地、畑地、樹園地、牧草地
侵入経緯	明治初期（1870 年代）頃に菜種油を採るためにヨーロッパから導入された。栽培に伴う周辺への逸出であるのか、野生化しているのかの判断が困難なこともあり、国内における野生化の年代は不明。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、堤防の強度低下（根が土中に深く入るため）、家畜（反芻動物）の中毒
特記事項	セイヨウアブラナは世界的に温帯地域の最も重要な油料作物の一つ。

## オランダガラシ

*Nasturtium officinale* R.Br.

アブラナ科  
別名：クレソン

選定理由	繁殖力が強いため、各地で野生化している。清冽な水域にも生育するため、このような環境に生育する在来種との競合が懸念される。また、水路で大繁茂した場合、通水阻害も懸念される。
原産地	ヨーロッパ、中央アジア
生態的特徴	水辺から水中に群生する多年草。茎は高さ 20~40cm、中空、下方の節間より根が出る。花期は 5~8 月、花は白色で、直径 4~5mm。日当たりのよいところを好む。低水温で生育しやすい。
生育環境	水田、河川、クレーク、水路、湖沼、溪流
侵入経緯	食用栽培植物として 1870 年頃に渡来した。その後、逸出・野生化して広がったといわれている。県内では 1930 年代に太宰府市で初めて確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、通水阻害
特記事項	国リスト：重点対策 (No.43)。クレソンと呼ばれて肉料理の付け合わせやサラダなどに利用される。山菜としてもよく採取される。

## モリシマアカシア

*Acacia mearnsii* De Wild.

マメ科

選定理由	平地から丘陵にかけて分布する。県内では第二次世界大戦後の造林木として積極的に植栽されたため、野生化した個体が各地に見られる。成長が速く、アレロパシー作用もあるため、在来種と競合する。また、窒素固定によって土壌が富栄養化し、植生の変化をもたらす。
原産地	オーストラリア (タスマニア島)
生態的特徴	常緑高木。高さ 6~15m。葉は羽状複葉、枝に棘はない。5 月頃に直径約 1cm で淡黄白色の花 (頭状花) を多数つける。種子の生産量が多く、繁殖力が強い。種子の生存期間も長く、森林火災の後などに一斉に発芽する。樹皮はタンニンの原料となるため、世界的に植栽されている。
生育環境	二次林、崩壊地、荒地
侵入経緯	タンニンの原料用として昭和初期 (1920 年代) に鹿児島県に導入された。県内では、全国に率先して 1951 年に造林が開始され、その後、植林由来の個体が各地の二次林などで野生化した。
定着状況	県内：各地にやや稀。蛇紋岩地 (篠栗町) にも侵入している。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、土壌窒素の蓄積
特記事項	国リスト：重点対策 (No.46)、世界ワースト 100

## メラノキシロンアカシア

*Acacia melanoxylon* R.Br.

マメ科  
別名：ブラックウッドアカシア

選定理由	成長が速いため、在来種と競合する。また、窒素固定によって土壌が富栄養化し、植生の変化をもたらす。
原産地	オーストラリア (タスマニア島)
生態的特徴	常緑高木。高さ 25m に達する。葉は葉柄が変化して単葉 (1 枚の葉) のように見え、その先に羽状複葉をつけることもある。3 月頃に淡黄色の球形の花 (頭状花) を多数つける。常緑のアカシア属 <i>Acacia</i> の中では比較的低温に耐える。種子により繁殖し、急速に成長する。
生育環境	二次林、荒地、市街地
侵入経緯	1883 年に渡来し、街路樹、公園樹などに利用された。第二次世界大戦後 (1945 年以降)、治山緑化用樹木として痩せ地などで使用された。県内でも花崗岩地などに植栽され、それが逸出・野生化した。
定着状況	県内：四王寺山などの花崗岩地。国内：本州、九州
影響・被害	在来種との競合、土壌窒素の蓄積
特記事項	国リスト：重点対策 (No.45)

## イタチハギ

*Amorpha fruticosa* L.

マメ科

別名：クロバナエンジュ

選定理由	平地から山地にかけて分布する。法面緑化、砂防用として植栽されたため、野生化した個体が各地に見られる。萌芽力があり、成長が速い。アレロパシー作用もあるため、在来種と競合する。また、窒素固定によって土壌の富栄養化が進行し、植生の変化をもたらす。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	落葉低木。高さ 1～5m。葉は羽状複葉、枝に棘はない。5～6 月に長さ 6～20cm の軸を伸ばし、黒紫色の花を多数つける。成長が速く、暑さや乾燥に強い。地下茎を横に出して群生する。
生育環境	荒地、草地、道端、崩壊地、河川敷、堤防、海岸砂浜
侵入経緯	1912 年に観賞用として渡来した。第二次世界大戦後（1945 年以降）は、主に法面緑化に使用され、それが逸出・野生化した。県内でも福岡県植物誌（1975）に掲載されていることから、1970 年代には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、土壌窒素の蓄積、菌類（炭疽病菌）の寄主
特記事項	国リスト：重点対策（No.47）、日本ワースト 100

## エニシダ

*Cytisus scoparius* (L.) Link

マメ科

選定理由	法面緑化、砂防用として植栽されたため、野生化した個体が稀に見られる。アレロパシー作用があるため、在来種と競合する。また、窒素固定によって土壌の富栄養化が進行し、植生を変化させる。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	常緑低木。高さ 1～3m 程度。葉は 3 小葉（ときに 1 小葉に退化）からなる複葉。4～5 月に、葉の付け根に約 2cm の黄色の花を 1 個ずつつける。日当りのよい乾燥した砂質の荒地を好む。種子の生産量が多い。種子の寿命も長い。埋土種子を形成する。
生育環境	荒地、崩壊地、道路法面、林縁、海岸砂浜、河川敷
侵入経緯	園芸植物として江戸時代に渡来し、観賞用として庭に植えられた。近年は緑化植物として利用され、道路法面や造成地などで野生化した。福岡県での定着年代は不明。
定着状況	県内：各地に稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、土壌窒素の蓄積
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.120）

## アレチヌスビトハギ

*Desmodium paniculatum* (L.) DC.

マメ科

選定理由	種子の分散能力が高く、道端、荒地などで急激に分布を拡大している。アレロパシー作用があり、在来種と競合する。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	多年草。高さ 30～100cm になり、全体的に毛が多い。葉は 3 小葉からなる複葉。9～10 月に紅紫色の花をつける。果実（さや）は扁平で、3～6 個に分かれる。鉤毛の多い付着しやすい果実で、種子の分散能力が高い。また、太い地下茎があり、刈り取られても早期に回復する。
生育環境	荒地、道端、市街地、空地、河川敷、堤防
侵入経緯	1940 年に大阪府で定着が確認された。非意図的な移入と考えられる。その後、東海～近畿地方にかけて分布が拡大した。県内では 1971 年に大牟田市の三池港周辺の空地で初めて定着が確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.121）

## トウコマツナギ

*Indigofera bungeana* Walp.

マメ科

別名：キダチコマツナギ

選定理由	在来のコマツナギ <i>I. pseudotinctoria</i> に似ていることから、法面緑化に利用された。県内でも、荒地、河川敷などに野生化している。高さ 2m を超え、在来種と競合する。コマツナギとの交雑も懸念される。
原産地	中国
生態的特徴	落葉低木。高さ 2~4 m になる。葉は羽状複葉。開花は 5~9 月、淡紫色の花を多数つける。花は 11 月頃まで咲き残る。結実は良好で、たくさんの果実（さや）をつける。
生育環境	荒地、河川敷、道端、道路法面、空地、林縁
侵入経緯	在来のコマツナギと同一種とみなして、法面緑化用に中国から種子を輸入し、利用された。その後、2000 年代前半に逸出・野生化した。県内でも 2000 年代に野生化したと考えられる。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、在来種（コマツナギ）との交雑、土壌窒素の蓄積
特記事項	改訂新版日本の野生植物 2（2016）では中国植物誌（2010）に従い、トウコマツナギとコマツナギは同一種 <i>I. bungeana</i> として学名を表記している。

## ハリエンジュ

*Robinia pseudoacacia* L.

マメ科

別名：ニセアカシア

選定理由	海岸、平地から丘陵にかけて分布し、しばしば群生する。玄界灘の海岸砂丘ではマツ枯れ後に繁茂しているところもある。競争力、再生力が旺盛であり、アレロパシー作用もあるため、在来種と競合する。また、窒素固定によって土壌の富栄養化が進行し、植生の変化をもたらす。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	落葉高木。高さ 25m になる。葉は羽状複葉、枝に棘がある。5 月頃、白い花を房状につける。種子繁殖のほか、土中の水平根からの萌芽によって分布を拡大する。切株からも萌芽する。
生育環境	海岸林、海岸砂浜、二次林、河川敷、荒地、市街地
侵入経緯	1873 年に渡来。第二次世界大戦後（1945 年以降）に緑化木、街路樹として広く植栽された。県内では海岸砂防林としてクロマツとともに植栽された。また、ボタ山の緑化にも用いられた。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、土壌窒素の蓄積、菌類（炭疽病菌）の寄主
特記事項	国リスト：産業管理（No.179）、日本ワースト 100。花は養蜂の蜜源として利用されるため、国リストでは産業管理外来種に選定されている。

## オオキバナカタバミ

*Oxalis pes-caprae* L.

カタバミ科

別名：キイロハナカタバミ

選定理由	球根（鱗茎）で盛んに栄養繁殖し、各地で野生化している。県内では、特に玄界灘沿岸や島嶼の道端、クロマツ林、林縁などで急激に分布を拡大している。
原産地	南アフリカ
生態的特徴	多年草。地上茎はなく、地際に球根（鱗茎）を多数つけて増える。葉は根生、または地上をほう茎の先にまとまってつける。花期は 3~5 月、花茎の頂部に直径 3~4cm の黄色の花を 1~5 個つける。日当たりがよい、肥沃地を好む。観賞用に栽培され、世界中に広がっている。
生育環境	海岸砂浜、海岸林、道端、河川敷、草地、畑地、人家周辺、樹園地、荒地
侵入経緯	園芸植物として明治中期（1890 年代）に渡来。1961 年に鹿児島県で採集されたものが国内最初の野生化の記録と考えられる。県内では福岡県植物誌（1975）に記載がないことから、1980 年代以降に分布を拡大したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州（関東地方以西の太平洋側）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.122）

## トウゴマ

*Ricinus communis* L.トウダイグサ科  
別名：ヒマ

選定理由	県内では、河原や草地などで稀に野生化した個体が見られる。種子に猛毒のリシンを含む。
原産地	熱帯アフリカ北東部
生態的特徴	大型の一年草。茎は太く高さ2 m程度になり、直径20～70cmもある大きな葉をつける。花期は夏～秋、花は多数かたまってつき、雌花が上方、雄花が下方につく。種子から得られる油は、ヒマシ油として広く使用される。種子にはリシンという毒性タンパク質が含まれる。この物質は、ヒマシ油を生産する時の絞りかすに含まれる猛毒の天然毒素で、人間の致死量は3～5μg/kgとの報告がある。
生育環境	河川敷、草地、荒地
侵入経緯	第二次世界大戦中（1940年代）、機械油用として栽培を奨励されたため、西日本で広く逸出・野生化した。県内でも第二次世界大戦後（1945年以降）に野生化したと考えられる。
定着状況	県内：各地に稀。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、有毒植物（種子）
特記事項	なし

## ナンキンハゼ

*Triadica sebifera* (L.) Small

トウダイグサ科

選定理由	鳥散布型の蠟を含む種子を多産し、初期成長が著しく速いことから、河原、草地、ため池の岸辺などに分布を拡大しており、これらの環境に生育する植物への影響が懸念される。
原産地	中国中南部
生態的特徴	落葉高木。高さ15mになる。花期は6～7月、花は枝先の軸につき、上部に多数の雄花、下部に1～3個の雌花をつける。果実は直径約1.5cm。種子は白色蠟状の脂肪物質に覆われ、かつて木蠟採取のために植栽された。日当たりのよい場所を好み、様々な環境への耐性がある。
生育環境	河川敷、堤防、荒地、草地、ため池、湿地、二次林
侵入経緯	園芸植物として江戸時代に渡来。木蠟採取や用材としても植栽された。近年、紅葉が美しいことから、街路樹や公園樹として利用され、その後、逸出・野生化した。県内では福岡県植物誌（1975年）に記載がないことから、1980年代以降に野生化し、分布を広げたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.123）

## アレチウリ

*Sicyos angulatus* L.

ウリ科

選定理由	河原や林縁で繁茂しており、在来種との競合が懸念される。特定外来生物に指定され、全国各地で芽生えの抜き取りやつるの刈り取りが行われている。県内でも対策が求められている。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	つる性の一年草。茎は粗い毛を密生し、巻きひげで他の植物などに巻きつきながら、長さ10m以上にまで伸長する。花期は8～10月、直径1cm程度の黄白色の花を雌雄別につける。大量の種子を生産し、一部は埋土種子となる。日当たりのよい肥沃な場所を好む。
生育環境	河川敷、林縁、荒地、畑地、樹園地
侵入経緯	1952年に静岡県清水港で確認された。輸入大豆に混入していた種子由来と考えられている。県内では1964年に北九州市足立山で確認されており、これが最初の記録と推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.25）、日本ワースト100

## メマツヨイグサ

アカバナ科

*Oenothera biennis* L.

選定理由	県内各地に広く分布している。平尾台などの草原や玄界灘の海岸砂浜にも定着し、しばしば群生するため、在来の草原性植物や海浜植物との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	越年草。茎は全体に毛が多く、高さ 30~150cm。花期は 5~9 月、花は茎の上部に密につき、直径 2.5~5cm で黄色。夕方から咲き始め、朝にはしばむ一日花である。開けた攪乱された場所に生える。
生育環境	道端、荒地、河川敷、草地、畑地、牧草地、樹園地
侵入経緯	明治後期に渡来したといわれている。本種はしばしばアレチマツヨイグサ <i>O. parviflora</i> と混同されており、定着年代の詳細は国内、県内ともに不明である。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物や牧草との競合
特記事項	なし

## コマツヨイグサ

アカバナ科

*Oenothera laciniata* Hill

選定理由	県内各地に広く分布している。海岸砂浜にも定着し、しばしば群生するため、特に在来の海浜植物との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ東部
生態的特徴	越年草。全体に粗毛がある。茎は地面をはうことが多く、高さ 5~50cm。葉の形は変異が大きく、深く切れ込むものから、鋸歯状のものまである。花期は 4~11 月、花は直径 2~3cm で黄色。日当たりのよい攪乱地や砂地を好む。
生育環境	道端、荒地、海岸砂浜、海岸埋立地、河川敷、堤防、市街地、畑地、樹園地
侵入経緯	1914 年の文献に国内で初めて記録されている。それ以前の 1910 年前後に非意図的に移入されたと推測される。県内では第二次世界大戦後（1945 年以降）間もなく侵入し、1950 年代に急激に分布を拡大した。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.51）

## アレチマツヨイグサ

アカバナ科

*Oenothera parviflora* L.

選定理由	県内各地に分布している。平尾台などの草原や玄界灘の海岸砂浜にも定着しているため、在来の草原性植物や海浜植物との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ東部
生態的特徴	越年草。メマツヨイグサ <i>O. biennis</i> によく似ているが、花の直径が 1.7~3.5cm とメマツヨイグサよりも小さいこと、開花したときに花卉の間に隙間があることなどで区別される。全国的にはメマツヨイグサよりも稀である。メマツヨイグサ同様に、開けた攪乱された場所に生える。
生育環境	道端、荒地、河川敷、海岸砂浜、草地、畑地、牧草地、樹園地
侵入経緯	明治後期に渡来し、1940 年頃から身近に見られるようになったといわれているが、本種はメマツヨイグサと混同されており、定着年代の詳細は国内、県内ともに不明である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物や牧草との競合
特記事項	なし

## ウチワゼニクサ

*Hydrocotyle verticillata* Thunb. var. *triradiata* (A.Rich.) Fernald

セリ科  
別名：タテバチドメグサ、  
ウォーターマッシュルーム

選定理由	県内各地のため池、湿地、河川の水際などで繁茂している。繁殖力が旺盛で、在来水生植物との競合が懸念される。観賞用水草として流通しており、逸出防止のための啓発も重要である。
原産地	北アメリカ南部
生態的特徴	多年生の抽水～湿生植物。直径 2～3mm の茎が地中を横走し、各節から 1 枚の葉と根が伸びる。葉柄は盾状（ハスの葉状）につく。花期は 5～9 月、葉の付け根から 1 本の花茎を伸ばす。茎断片からの再生能力が高く、野生化すると急速に分布を拡大する。
生育環境	ため池、河川、クレーク、水路、湿地
侵入経緯	1960 年頃に観賞用に輸入されたものが逸出・野生化した。県内では 1990 年代後半に古賀市千鳥ヶ池での定着が確認された。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.52）

## オオフタバムグラ

*Diodia teres* Walter

アカネ科  
別名：タチフタバムグラ

選定理由	海岸砂浜、河原の砂地などに侵入・定着し、分布を拡大している。しばしば群生するため、在来種との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	小型の一年草。高さ 10～20cm で斜めに立ち上がる。茎の長さは 10～50cm。葉の両面に硬くて短い毛があり、ざらつく。花期は 7～9 月で、花は葉の付け根につき、白または淡紅色。同属のメリケンムグラ <i>D. virginiana</i> が湿った場所を好むのに対して、本種は乾いた砂地を好む。
生育環境	海岸砂浜、海岸埋立地、河川敷、道端
侵入経緯	1927 年に東京で定着が確認された。非意図的な移入と考えられる。県内では、1951 年に福岡市で採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（宮城県以南）、四国、九州
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.127）

## メリケンムグラ

*Diodia virginiana* L.

アカネ科

選定理由	河原などの湿った場所に侵入・定着し、急激に分布を拡大している。しばしばマット状に群生するため、在来の湿生植物との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草。茎は長さ 10～80cm、根際から四方に広がり、横にはう。花期は 7～9 月で、花は葉の付け根につき、白色。冠水耐性が強く、湿性環境でよく生育する。このため、ダムの湛水斜面の緑化植物として利用される。筑後川、遠賀川などの河川敷に群生している。
生育環境	河川、河川敷、堤防、水田畦畔、放棄水田、ため池、湿地
侵入経緯	1953 年に岡山市で採集された標本が国内最初の記録で、非意図的な移入と考えられる。県内では、福岡県植物誌（1975）に未掲載であるので、1970 年代後半以降に定着したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州（千葉県以西）、四国、九州
影響・被害	在来種（湿生植物）との競合
特記事項	なし

## アメリカネナシカズラ

ヒルガオ科

*Cuscuta campestris* Yuncker

選定理由	県内各地に見られる。特に海岸砂浜に多い。様々な在来植物や栽培植物に寄生するつる植物であるため、寄生された植物の生育を阻害する。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物。葉緑素を持たない寄生植物で、全体は黄褐色。宿主を選ばず、様々な草本に寄生する。細い茎で宿主に巻きつき、吸盤（寄生根）を出して付着する。8～9月に、多数の白い花を咲かせる。花は直径約3mmで白色。
生育環境	海岸砂浜、海岸岩上、河川敷、道端、荒地、畑地
侵入経緯	1970年頃東京の多摩川で定着が確認された。輸入穀物や緑化用の種子に混入していた種子由来と考えられる。県内では、福岡県植物誌（1975）に記載がないことから、1980年代以降に分布を拡大したと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.128）

## マルバルコウ

ヒルガオ科

別名：マルバルコウソウ

*Ipomoea coccinea* L.

選定理由	県内各地に見られる。繁茂して一面を覆うつる植物であるため、在来種との競合が懸念される。観賞用に栽培されていることから、むやみにつるを捨てないなどの啓発も重要である。また、ダイズ畑の雑草として効果的な防除が求められている。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物。長さ3mに達する。葉は卵形で両側に1～2個の角がある。花期は夏～秋、花は直径1.5cm程度、朱赤色。花の先が5裂し、上から見ると五角形に見える。県内のダイズ畑で多く発生しており、大量の埋土種子を産すると考えられる。
生育環境	道端、荒地、草地、河川敷、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	江戸時代の嘉永年間（1848～1853年）に観賞用として渡来した。国内各地で野生化しているが、その年代は不明。県内では1960年頃に大牟田市で確認されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	なし

## アメリカアサガオ

ヒルガオ科

*Ipomoea hederacea* Jacq. var. *hederacea*

選定理由	県内各地に定着している。繁茂して一面を覆うつる植物であるため、在来種との競合が懸念される。また、ダイズ畑の雑草として効果的な防除が求められている。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物で、長さ数mになる。葉は深く3（稀に5）裂する。花期は8～9月、葉の付け根から軸を出し、1～3個の花をつける。花は幅3cm程度で、白色、桃色、青紫色など様々である。土壌環境に対する適応性が高く、耐陰性もあるため、世界的な雑草となっている。
生育環境	道端、人家周辺、草地、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	園芸植物として明治前期（1882年頃）に渡来した。現在定着しているものは輸入穀物に混入していた種子由来と考えられ、第二次世界大戦後（1945年以降）に国内各地で見られるようになった。県内では1962年に北九州市で採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.55、外来ノアサガオ類）

## マルバアメリカアサガオ

ヒルガオ科

*Ipomoea hederacea* Jacq. var. *integriscula* A.Gray

選定理由	県内各地に定着している。アメリカアサガオ <i>I. hederacea</i> var. <i>hederacea</i> と同様に、繁茂して一面を覆うつる植物であるため、在来種との競合が懸念される。また、ダイズ畑の雑草として効果的な防除が求められている。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物。アメリカアサガオの変種で、葉は分裂せず、卵円形である。そのほかの形態的、生態的特徴は、基本変種のアメリカアサガオと同様である。しばしば両変種は混在しているが、中間型はないという。
生育環境	道端、人家周辺、草地、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	第二次世界大戦後（1945年以降）、アメリカアサガオと前後して非意図的に移入されたと考えられる。県内では1965年に大牟田市で採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.55、外来ノアサガオ類）

## マメアサガオ

ヒルガオ科

*Ipomoea lacunosa* L.

選定理由	県内各地に定着している。繁茂して一面を覆うつる植物であるため、在来種との競合が懸念される。また、ダイズ畑の雑草として効果的な防除が求められている。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物。茎は長さ1~3mになる。葉は卵形で全縁または浅く3裂する。花期は夏~秋、花は直径1.5cm程度で白色または淡紅色である。花の先が5裂し、上から見ると五角形~星形に見える。県内のダイズ畑で多く発生する難防除雑草の一つである。
生育環境	道端、荒地、草地、河川敷、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	1950年代に関東地方で初めて確認されるようになった。輸入穀物に混入していた種子由来と考えられる。県内では1960年頃に大牟田市で確認されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	なし

## オオバアメリカアサガオ

ヒルガオ科

*Ipomoea learii* Knight ex J.Paxton

別名：イリオモテアサガオ、オーシャンブルー、宿根アサガオ、ノアサガオ

選定理由	海岸域~低地にかけての道端、林縁などで野生化しており、在来種との競合が懸念される。葉の付け根から発根して周辺に広がるため、むやみにつるを捨てないなどの啓発も重要である。
原産地	不明
生態的特徴	多年生のつる植物。繁殖力が旺盛で、茎は10m以上に達する。繁茂して一面を覆うため、グリーンカーテンとしても利用される。花期は6~11月頃と長く、花は青~紫色で、直径10cm程度になる。種子ができないため、茎断片からの栄養繁殖により分布を拡大する。
生育環境	道端、人家周辺、草地、海岸砂浜、海岸林、林縁
侵入経緯	オーシャンブルーなどの園芸品種が作出され、最近、盛んに栽培されるようになった。それらが放置され、国内各地で野生化したと考えられる。その年代については不明である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、九州
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.55、外来ノアサガオ類）。本種を和歌山県以南に自生する在来のノアサガオ <i>I. indica</i> と同一種とする見解もある。

## ホシアサガオ

ヒルガオ科

*Ipomoea triloba* L.

選定理由	県内各地に定着している。繁茂して一面を覆うつる植物であるため、在来種との競合が懸念される。また、ダイズ畑の雑草として効果的な防除が求められている。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	一年生のつる植物。葉は卵円形で全縁または浅く3裂する。花期は夏～秋、花は直径約1.5cm、淡紅色で中心部が濃い色となる。花の先が5裂し、上から見ると五角形～星形に見える。北部九州のダイズ畑で多く発生する難防除雑草の一つで、耐陰性もある。
生育環境	道端、荒地、草地、河川敷、畑地、樹園地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	第二次世界大戦後（1945年以降）に国内各地で見られるようになった。輸入穀物に混入していた種子由来と考えられる。県内では北九州市の植物（1957）に掲載されていることから、1950年代には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.129）

## シチヘンゲ

クマツヅラ科  
別名：ランタナ

*Lantana camara* L.

選定理由	県内では沿海地の道端、草地などに逸出・野生化しており、玄界灘の島嶼にも多い。海岸植物との競合が懸念される。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	常緑低木。枝は密に分枝し、高さ2～5m。枝の先は横にはい、半つる性となる。茎や枝に下向きの小棘がある。葉の付け根から軸を伸ばし、小さな花を球形につける。多数の園芸品種があり、花色は多様。種子は鳥によって遠方に運ばれる。根茎でも繁殖する。
生育環境	海岸砂浜、道端、草地、河川敷、荒地、林縁
侵入経緯	江戸時代末期（1865年）に園芸植物として渡来した。その後、ランタナの名前で観賞用に栽培されたものが沖縄、小笠原などの暖地で逸出・野生化しているが、その年代は不明である。県内でも栽培されたものが海岸域で野生化状態となっている。
定着状況	県内：沿海地にやや稀。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、有毒植物（未熟果実）
特記事項	国リスト：重点対策（No.56）、世界ワースト100

## ヤナギハナガサ

クマツヅラ科  
別名：サンジャクバーベナ

*Verbena bonariensis* L.

選定理由	旺盛な繁殖力を持つため、在来種との競合が懸念される。サンジャク（三尺）バーベナとも呼ばれ栽培されることもあるため、逸出防止のための啓発も重要である。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年草。茎は直立して高さ1.5mに達する。全体に剛毛があつてざらつく。茎の断面は四角形。花期は6～8月、茎や枝の先にかたまつて傘形に花をつける。花は紅紫色、直径約3mmでアレチハナガサよりも大きく、美しく見える。種子と根茎で繁殖する。
生育環境	道端、草地、荒地、海岸埋立地、河川敷、堤防
侵入経緯	園芸植物として導入されたが、渡来年代は不明である。その後逸出し、1940年代に野生化したと考えられている。県内では1960年に福岡市で採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.130、アレチハナガサ類）

## アレチハナガサ

クマツヅラ科

*Verbena brasiliensis* Vell.

選定理由	旺盛な繁殖力を持ち、群生するため、絶滅危惧種を含む在来種との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年草。茎は直立して高さ 1.5m に達する。全体に剛毛があってざらつく。茎の断面は四角形。花期は 6～9 月、茎や枝の先に穂状の花をつける。花は淡紫色で直径 2～3mm。種子は光発芽種子で、一部は埋土種子となる。根茎のほか、茎の倒伏による繁殖も確認されている。
生育環境	道端、草地、荒地、海岸埋立地、河川敷、堤防
侵入経緯	1957 年頃に神奈川県久里浜、北九州市及び大牟田市の沿海地での定着が確認された。非意図的な移入と考えられる。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.130、アレチハナガサ類)。和名は帰化植物図譜 (1967) において故長田武正博士 (福岡県在住) によって名付けられた。「近い将来日本各地に広がる可能性がある」と同書に記されていたが、そのとおりになった。

## シロバナチョウセンアサガオ

ナス科

*Datura stramonium* L. f. *stramonium*

別名：シロバナヨウシュチョウセンアサガオ

選定理由	有毒植物であるため、人や動物が誤って摂取することがないように適切に管理する必要がある。
原産地	不明
生態的特徴	大型の一年草。高さ 1～2m になる。葉は長さ 5～18cm。花期は 6～9 月、花はロート形で、上から見るとほぼ五角形、白色で長さ 7～9cm、直径 3～4cm。果実は球形で鋭い刺で覆われる。全部位にアルカロイド類を含み有毒であるが、薬用植物として有用である。
生育環境	道端、荒地、草地、畑地
侵入経緯	明治初期 (1870 年前後) に薬用、観賞用として渡来した。栽培と野生化との区別が困難なこともあり、国内における定着の年代は不明。
定着状況	県内：不明。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、有毒植物 (全草)
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.131、チョウセンアサガオ属)。チョウセンアサガオ類による食中毒として、根をゴボウ、蕾をオクラ、葉をモロヘイヤに誤認した事例などがある。

## ヨウシュチョウセンアサガオ

ナス科

*Datura stramonium* L. f. *tatura* (L.) B.Boivin

選定理由	有毒植物であるため、人や動物が誤って摂取することがないように適切に管理する必要がある。
原産地	不明 (熱帯アメリカ原産ともいわれているが、古くから世界中に分布し、はっきりしない)
生態的特徴	大型の一年草。高さ 1～2m になる。花期は 6～9 月、花はロート形、淡紫色で長さ 7～9cm、直径 3～4cm。花が淡紫色であることで、シロバナチョウセンアサガオ <i>D. stramonium</i> f. <i>stramonium</i> と区別される。他の特徴は、シロバナチョウセンアサガオと同様である。
生育環境	道端、荒地、草地、畑地
侵入経緯	明治初期 (1870 年頃) に薬用、観賞用として渡来。現在定着しているものは、第二次世界大戦後 (1945 年以降) に輸入穀物に混入していた種子由来のものと考えられる。県内では福岡県植物誌 (1975) に掲載されていることから、1970 年代には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合、有毒植物 (全草)
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.131、チョウセンアサガオ属)。チョウセンアサガオ類による食中毒として、根をゴボウ、蕾をオクラ、葉をモロヘイヤに誤認した事例などがある。

## ヒロハフウリンホオズキ

*Physalis angulata* L.

ナス科  
別名：センナリホオズキ

選定理由	県内各地の道端、畑、水田の畦などに見られる。繁殖力が強いいため、在来種との競合が懸念される。畑雑草としても効果的な防除が求められている。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草。茎は高さ 20～90cm。花期は 7～9 月で、葉の付け根に 1 花つける。萼(がく)が袋状になって果実を包み、長さ 2.5～3cm になる。種子の生産量が多く、1 個体で 100 個以上の果実をつけ、1 つの果実には 200 粒程度の種子が入っているという。
生育環境	道端、荒地、草地、畑地、水田畦畔、放棄水田、放棄畑、樹園地
侵入経緯	園芸植物として江戸時代末期に渡来した。現在定着しているものは、第二次世界大戦後（1945 年以降）に輸入農作物に混入していた種子由来と考えられる。県内では福岡県植物目録（1952）に「稍普通」として掲載されており、1940 年代後半には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	なし

## アメリカアゼナ

*Lindernia dubia* (L.) Pennell subsp. *major* (Pursh) Pennell

ゴマノハグサ科

選定理由	県内各地の水田、河川、水路、湿った畑などに生育し、場所によっては在来種のアゼナ <i>L. procumbens</i> より普通に見られる。繁殖力が強いいため、在来種との競合が懸念される。水田雑草としても防除が求められている。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草。茎は高さ 10～30cm。花期は 7～10 月で、葉の付け根に 1 花つける。長さ約 0.4mm の微小な種子を大量に生産する。種子は主として水流により分散する。
生育環境	水田、水田畦畔、放棄水田、河川、クリーク、水路、ため池、畑地、放棄畑
侵入経緯	1936 年に兵庫県西宮市で採集された標本が国内最初の記録。非意図的に移入されたと考えられる。県内では、福岡県植物誌（1975）に未掲載であるので、1970 年代後半以降に定着したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（湿生植物）との競合、イネや畑作物との競合
特記事項	なし

## ヘラオオバコ

*Plantago lanceolata* L.

オオバコ科

選定理由	県内各地の道端などに普通に見られる。平尾台や玄界灘海岸域にも定着しており、これらの場所に生育する在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。地下に太い根茎がある。葉はすべて根生、細長く、長さ 20～30cm。花期は 4～8 月、高さ 30～70cm の花茎を出し、その先に穂状に花をつける。日当たりのよい場所から日陰地まで生育し、温度適応性が大きい。また、刈り取りにも強い。
生育環境	道端、空地、荒地、堤防、草地、畑地
侵入経緯	江戸時代末期に牧草種子に混入して渡来し、定着した。県内では福岡及其近郊植物目録（1925）に掲載されていることから、1910 年代には定着していたと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、花粉症の原因植物
特記事項	なし

## ヌマツルギク

キク科

*Acmella oppositifolia* (Lam.) R.K.Jansen

選定理由	河川、水路、水田の畦などに見られる。繁殖力が強い多年草で、茎が横になって群生するため、在来の湿生植物との競合が懸念される。水田畦畔の難防除雑草でもある。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	多年草。河岸や水路に生える湿生植物。茎は横に倒れて長さ 20~60cm。しばしば茎から根を出す。花期は 9~11 月、花（頭花）は直径 1~1.5cm で黄色。茎断片による栄養繁殖が盛んで、草刈りなどによる畦畔管理によって切断された茎が、水路から分散して分布を拡大する。
生育環境	河川、河川敷、クリーク、水路、水田畦畔、放棄水田、湿地
侵入経緯	1960 年に大野城市で採集されたものが国内で最初の記録である。1975 年には福岡市周辺の河岸の湿地にかなり広がったと報告されている。当時のアメリカ軍駐留地から逸出し、広がったものと推測されている。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（千葉県、神奈川県）、九州（福岡県）
影響・被害	在来種（湿生植物）との競合、通水阻害（水路）
特記事項	なし

## オオブタクサ

キク科

別名：クワモドキ

*Ambrosia trifida* L.

選定理由	成長が速く、かなり大型になるので、在来種との競合が懸念される。抜き取りなどの駆除が継続的に行われている地域もあり、より効果的な防除対策が望まれている。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	大型の一年草。茎は太く枝分かれして、高さ 1~4m、ときに 6m になる。花期は 7~9 月、茎の先に長さ 5~20cm の穂を伸ばし、雄花と雌花をつける。風媒花で花粉アレルギーを起こす。多数の種子をつくり、一部は埋土種子となって生存する。肥沃で湿った場所を好む。
生育環境	河川敷、堤防、道端、空地、荒地、草地、畑地、樹園地、牧草地
侵入経緯	1952 年に静岡県清水港及び千葉県で定着が確認された。輸入飼料穀物や豆類に混入していた種子由来と考えられている。県内では 1960 年代初め頃に、大牟田市や北九州市で確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物や牧草との競合、花粉症の原因植物
特記事項	国リスト：重点対策（No.63）、日本ワースト 100

## アメリカセンダングサ

キク科

別名：セイタカタウコギ

*Bidens frondosa* L.

選定理由	繁殖力が旺盛で、各地の草地、田畑、水路、湿地などに普通に見られる。在来種、特に湿生植物との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草。茎は高さ 1~1.5m。花（頭花）は直径 1~2cm で黄色。果実は扁平でかぎ状の剛毛の生えた 2 本の刺があり、動物に付着して散布される。また、水に流されても広がる。繁殖力が非常に旺盛で、種子の生産量は 1 株あたり 25~7,540 個、寿命は 16 年に及ぶこともあるという。水辺や湿地に好んで生育し、水田中に見られることもある。
生育環境	道端、荒地、水田、放棄水田、水路、河川敷、堤防、湿地、草地、畑地、樹園地
侵入経緯	大正中期（1920 年頃）に琵琶湖畔で定着が確認された。非意図的な移入と考えられる。県内では 1939 年に北九州市で採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、イネや畑作物との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.136）

## ハルシャギク

*Coreopsis tinctoria* Nutt.

キク科  
別名：ジャンメギク、コレオプシス

選定理由	道端や河川敷などに繁茂し、しばしば群生することから、在来種との競合が懸念される。人家の庭などにも植えられており、むやみに庭の外に出さないなどの啓発も重要である。
原産地	北アメリカ西部
生態的特徴	一年草。高さ 0.6～1.2 mになる。秋に発芽したものは根出葉で越冬する。葉は羽状複葉で細く、コスモス <i>Cosmos bipinnatus</i> に似ている。花期は 6～10 月、花（頭花）は長い柄があり、黄色で中心部が紫褐色、直径 3～4cm で、全体が蛇の目模様に見える。
生育環境	道端、河川敷、空地、荒地、草地、人家周辺
侵入経緯	明治初期（1870 年代）に観賞用として渡来した。国内において野生化した年代は不明。県内では 1960 年代に入ってから広く見られるようになったという。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.140）

## ヒメジョオン

*Erigeron annuus* (L.) Pers.

キク科

選定理由	海岸、低地から山地まで、様々な環境に定着している。平尾台、玄界灘海岸、山地上部の自然植生域などの重要地域にも群生しており、在来種との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草または越年草。茎は直立し、高さ 50～130cm。茎の中心部は中空にならない。根出葉はさじ形、花の時期には枯れる。花期は 5～10 月、花（頭花）は直径約 2cm、中心は丸く盛り上がって黄色、外側は白色。環境適応性が高く、いたるところに生育する。
生育環境	道端、荒地、草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、畑地、樹園地、牧草地、人家周辺、市街地
侵入経緯	江戸時代末期に観賞用として渡来し（当時は“柳葉姫菊”と呼ばれたという）、明治初年（1868 年）には野生化した。県内には明治末期～大正初期（1910 年代）に侵入・定着したと考えられている。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、畑作物や牧草との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.141）、日本ワースト 100

## ハルジオン

*Erigeron philadelphicus* L.

キク科

選定理由	海岸、低地から山地まで、様々な立地に定着している。平尾台、玄界灘海岸などの重要地域にも生育しており、在来種との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	多年草。茎は高さ 30～80cm。同属のヒメジョオン <i>E. annuus</i> よりやや小型で、全体に軟毛が多い。茎の中心部は中空。根出葉は花の時期まで残る。花期は 4～8 月、花（頭花）は直径 2～2.5cm、中心部は黄色、外側は淡紅色～白色。横走する根から盛んに発芽して栄養繁殖する。
生育環境	道端、荒地、草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、畑地、樹園地、人家周辺
侵入経緯	大正中期（1920 年頃）に観賞用として渡来。昭和初期（1920 年代後半）には逸出・野生化していたという。県内では 1960 年代に北九州市で野生化が確認され、その後、分布を拡大したと考えられる。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物や牧草との競合
特記事項	日本ワースト 100

## オオアレチノギク

キク科

*Erigeron sumatrensis* Retz.

選定理由	道端、畑地、樹園地などに広く見られる大型の雑草で、平尾台や玄界灘海岸域などの重要地域にも侵入している。しばしば群生するため、在来種との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	越年草。全体に軟毛を密生する。茎は高さ1~1.8m。花期は7~11月、茎の先に短い枝を出し多数の花（頭花）をつけ、円錐状になる。花は直径4~5mmの筒型。種子の生産量が多く、風によって遠方まで飛散する。環境適応性が高く、いたるところに生える。
生育環境	道端、荒地、空地、畑地、水田畦畔、樹園地、牧草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、海岸埋立地
侵入経緯	1926年に文献に記載されたことから、1920年前後に東京で定着したと推測される。非意図的な移入と考えられる。その後、急激に分布を拡大し、県内には1930年代に侵入・定着したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合
特記事項	日本ワースト100

## アラゲハンゴンソウ

キク科

別名：キヌガサギク

*Rudbeckia hirta* L. var. *pulcherrima* Farw.

選定理由	道端や草地に逸出・野生化しており、在来種との競合が懸念される。人家の庭などにも植えられており、むやみに庭の外に出さないなどの啓発も重要である。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	多年草。横走る地下茎がある。茎は直立し、高さ40~90cm。全体に粗い毛があり、ざらつく。葉は長楕円形。花期は7~10月、花（頭花）は長い柄があり、直径6~10cm、中心は暗紫色で、外側は橙黄色。様々な園芸品種が作出されている。
生育環境	道端、道路法面、草地、荒地、人家周辺、市街地
侵入経緯	園芸植物として渡来した。1938年に北海道での野生化が報告されていることから、1930年頃に国内に定着したと考えられる。県内では1972年に大牟田市で確認されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.147）

## セイタカアワダチソウ

キク科

別名：セイタカアキノキリンソウ

*Solidago altissima* L.

選定理由	県内全域に分布し、平尾台などの重要地域にも侵入している。単一群落を形成するとともに、在来種と競合する。重要地域における引き抜きなどの防除対策が望まれる。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	大型の多年草。長い地下茎を持ち、旺盛に栄養繁殖する。アレロパシー活性を有し、根から周囲の植物の成長を抑制する化学物質を出す。茎は高さ1~1.5mになる。花期は10~11月、直径3~5mmの黄色の花（頭花）を多数つける。種子は風によって散布される。
生育環境	道端、空地、荒地、草地、河川敷、堤防、海岸埋立地、放棄水田、放棄畑
侵入経緯	観賞用として明治時代（1897年頃）に渡来し、その後、野生化した。第二次世界大戦後、急速に分布を拡大した。県内でも1950年代初めにボタ山や荒地が多い筑豊地域で確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.64）、日本ワースト100。筑豊地域の大繁茂は筑豊炭田の閉山時期と重なり、炭鉱住宅の人々は本種を「閉山草」と呼んだという。

## アカミタンポポ

キク科

*Taraxacum laevigatum* (Willd.) DC.

選定理由	様々な場所に定着し、在来タンポポ類との競合及び交雑が生じている。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。葉は全て根元から放射状に出る。花期はほぼ一年中。花茎の先に直径2~3cmの鮮黄色の花(頭花)を1個つける。萼状部分(総苞外片)は下方へ反り返る(在来タンポポ類は反り返らない)。果実が暗赤色~赤紫色であることがセイヨウタンポポ <i>T. officinale</i> (灰~茶褐色)との区別点。セイヨウタンポポに比べてやや小型で、市街地、荒地に生育する傾向がある。
生育環境	道端、荒地、市街地、人家周辺、草地、河川敷、堤防
侵入経緯	1876年に北海道に渡来し、1918年に野生化が報告された。県内では福岡県植物誌(1975)に掲載されていないことから、1980年代に分布を拡大したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種(在来タンポポ類)との競合、在来種(在来タンポポ類)との交雑
特記事項	国リスト：重点対策(No.66、外来性タンポポ種群)、日本ワースト100(外来種タンポポ種群)

## セイヨウタンポポ

キク科

*Taraxacum officinale* Weber ex F.H.Wigg.

選定理由	低地から山地まで様々な場所に定着し、在来タンポポ類との競合及び交雑が生じている。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。太い直根があり、葉は全て根元から放射状に出る。花期はほぼ一年中。花茎は中空で葉をつけず、直径3.5~4.5cmの鮮黄色の花(頭花)を1個つける。萼状部分(総苞外片)は下方へ反り返る(在来タンポポ類は反り返らない)。
生育環境	道端、空地、荒地、草地、河川敷、堤防、畑地、樹園地、牧草地、人家周辺、市街地
侵入経緯	食用や飼料用として渡来し、1904年には札幌での野生化が報告された。県内では福岡県植物目録(1952)に「稀」と記されていることから1950年代以降に分布を拡大したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種(在来タンポポ類)との競合、在来種(在来タンポポ類)との交雑
特記事項	国リスト：重点対策(No.66、外来性タンポポ種群)、日本ワースト100(外来種タンポポ種群)。県内にはセイヨウタンポポと在来タンポポ類との交雑に由来する雑種タンポポがすでに広範に分布している。

## オオオナモミ

キク科

*Xanthium orientale* L. subsp. *orientale*

選定理由	果実が水に運ばれて分布を拡大し、群生するため、ため池の岸边や河原に生育する植物との競合が懸念される。また、畑作物や牧草との競合も懸念される。
原産地	メキシコ
生態的特徴	一年草。茎は高さ0.5~2m。花期は8~10月、葉の付け根から出た軸の下方に雄花、上方に雌花をつける。果実(いが)は長さ2~2.5cm、3~6mmの棘を密に持ち、褐色に熟す。動物に付着して散布されるほか、水に運ばれて分布を広げるため、河原やため池などにも多い。
生育環境	ため池、河川敷、畑地、放棄畑、荒地、道端、樹園地、牧草地
侵入経緯	1929年に岡山県で初めて確認された。非意図的な移入と考えられる。県内における定着年代は不明であるが、第二次世界大戦後(1945年以降)に急激に分布を拡大したという。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、在来種(オナモミ <i>X. strumarium</i> subsp. <i>sibiricum</i> )との交雑、畑作物や牧草との競合、家畜の中毒(カルボキシアトラクティロシドを含む)
特記事項	国リスト：その他の総合対策(No.148)、日本ワースト100

## オオカナダモ

*Egeria densa* Planch.トチカガミ科  
別名：アナカリス

選定理由	無機養分の吸収力が強く、水質汚濁に強い。栄養繁殖が盛んであることに加えて、常緑で一年中群生するため、クロモ、エビモなど在来の沈水植物と競合する。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	常緑の多年生沈水植物。茎は盛んに分枝し、長さ 1m を超えることもある。葉は茎に密につき、3~6 枚輪生。日本では雄株のみ見られる。花期は 5~10 月、花は白色で花弁は 3 枚、長さ 5~10mm。日本では切れ藻による栄養繁殖で分布を広げている。
生育環境	河川、クレーク、水路、ため池、湖沼
侵入経緯	植物生理学の実験材料として導入され、1940 年代に野生化が始まったと推測される。1970 年代には琵琶湖で異常繁茂し、問題化した。県内でも、1970 年代前半には筑後川水系、福岡市周辺河川などでかなり広く分布していたとの記録がある。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合、通水障害
特記事項	国リスト：重点対策（No.69）、日本ワースト 100

## コカナダモ

*Elodea nuttallii* (Planch.) St.John

トチカガミ科

選定理由	栄養繁殖が盛んであることに加えて、常緑で一年中群生するため、クロモなど在来の沈水植物と競合する。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	常緑の多年生沈水植物。茎は盛んに分枝し、長さ 1m を超えることもある。葉は茎に密につき、普通 3 枚輪生。日本では雄株のみ見られる。花期は 5~9 月、雄花は水面に浮遊して開花する。花弁は乳白色で 3 枚、長さ 5~10mm。日本では切れ藻による栄養繁殖で分布を広げている。
生育環境	河川、クレーク、水路
侵入経緯	植物生理学の実験材料として導入されたといわれるが、正確な導入年代は不明。1961 年に琵琶湖で確認されたのが野生化の最初の記録である。県内では 2002 年に矢部川で確認されたのが最初の記録で、2004 年には矢部川水系二ツ川での大繁茂が確認された。
定着状況	県内：矢部川水系。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種（水生植物）との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.70）、日本ワースト 100

## シンテッポウユリ

*Lilium × formolongo* Hort.ユリ科  
別名：タカサゴユリ

選定理由	早咲き性（条件がよいと 1 年で開花）で繁殖力旺盛であるため、在来種との競合が懸念される。
原産地	台湾原産の外来種タカサゴユリ <i>L. formosanum</i> と南西諸島に分布する（福岡県には自生しない）テッポウユリ <i>L. longiflorum</i> との交雑種。様々な園芸品種が作出されている。
生態的特徴	多年草。球根（鱗茎）は球形で直径 5cm になる。茎は高さ 30~150cm 程度で、最大 2m に達する。7~9 月頃、茎の先に 1~数個、最大で 15 個程度の白い花をつける。種子生産量が多く、1 果実あたり最大 1,500 個にもなる。種子は軽いため遠方に散布されやすい。
生育環境	道端、道路法面、荒地、空地、人家周辺
侵入経緯	観賞用として 1924 年にタカサゴユリの種子が導入され、1939 年頃に本種が作出された。1970 年代から国内各地で野生化個体が増えた。県内での野生化は 1980 年代と考えられる。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.149）。タカサゴユリと呼ばれているものには本種も含まれているため、本リストでは別名としてタカサゴユリを記した。

## ヒメヒオウギズイセン

*Crocoshia × crocosmiiflora* (Lemoine) N.E.Br.

アヤメ科  
別名：モントブレチア

選定理由	県内各地の草地～林縁に野生化しており、玄界灘の海岸草地、平尾台の草原などの重要地域にも見られる。強健でよく増えるため、しばしば群生し、生育する植物との競合が懸念される。
原産地	南アフリカ原産のヒオウギズイセン <i>C. aurea</i> とヒメトウショウブ <i>Tritonia pottsii</i> との交雑によって作られた園芸品種群。フランスで 19 世紀に作出された。
生態的特徴	多年草。雑種由来の園芸植物。地下に球根（球茎）があり、地面をはう茎を出して繁殖する。葉は長さ 20～50cm。花期は 8～9 月、高さ 50～80cm の花茎を伸ばして多数の花をつける。花は朱赤色で、直径 2.5～3cm。庭や学校の花壇などでもよく栽培されている。
生育環境	海岸砂浜、海岸林、草地、人家周辺、道端、河川敷、林縁、林内
侵入経緯	明治中期（1890 年頃）に観賞用として渡来した。県内では、福岡県植物目録（1952）に「稍稀」として掲載されていることから、1940 年代には県内に広まっていたと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.151）

## キショウブ

*Iris pseudacorus* L.

アヤメ科

選定理由	県内各地のため池、河川、水路の水際などで野生化し、群生しているところもある。花が美しく、湿地ビオトープ創出のために使用されることもあるため、周辺に逸出させないような啓発も重要である。
原産地	ヨーロッパ～西アジア
生態的特徴	多年生の抽水植物。地下には横にはう太い根茎があり、分枝して繁殖する。葉は長さ 1.2m に達する。花期は 5～6 月、花は鮮黄色で、直径約 12cm。様々な園芸品種が作出されている。日当たりのよい水際や湿地を好むが、やや乾燥した場所にも見られる。
生育環境	ため池、クリーク、河川、水路、湖沼
侵入経緯	1897 年頃に観賞用として渡来した。県内では、福岡県植物目録（1952）には未掲載で、福岡県植物誌（1975）には掲載されていることから、この間に分布を拡大したと推測される。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合、在来種（アヤメ属 <i>Iris</i> ）との交雑
特記事項	国リスト：重点対策（No.76）、日本ワースト 100

## ノハカタカラクサ

*Tradescantia fluminensis* Vell.

ツククサ科  
別名：トキワツククサ

選定理由	県内各地の森林内などに野生化している。玄界灘の海岸クロマツ林内などの重要地域にも侵入・定着し、しばしば一面に群生している。林内に生育する植物との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	常緑の多年草。茎は横にはって分枝し、先が斜めに立つ。花期は 5～8 月頃、花は白色で直径 1.5cm 程度。やや湿った日陰に生育するため、林内や水辺に侵入して群生する。
生育環境	林内、林縁、海岸林、湿地、河川敷、人家周辺、道端
侵入経緯	園芸植物として昭和初期（1926 年頃）に渡来した。1950 年頃に和歌山県で初めて野生化が確認され、近年になって急速に分布を拡大した。県内では 1965 年頃に北九州市と大牟田市の林内で見られたという記録がある。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.78）。園芸品種はシロフハカタカラクサ <i>T. fluminensis</i> 'Variegata' と呼ばれ、葉に白色の縦縞がある。野生化するに従い、この縦縞を失って緑色の葉となる。

## コヌカグサ

*Agrostis gigantea* Roth

イネ科

別名：レッドトップ

## 選定理由

県内各地に普通に分布し、平尾台や玄界灘海岸域にも定着している。多年草で競争力が強いいため、在来種との競合が懸念される。緑化植物（法面緑化、砂防用）として非常に優れていることから、広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。

## 原産地

ヨーロッパ

## 生態的特徴

多年草。茎は高さ 50~100cm で、株立ちする。葉は長さ 5~20cm。花期は 5~6 月、円錐状に花をつける。日当たりのよいところを好む。耐寒性が強く、強酸性土壌にも生える。乾燥耐性もあり、やせた土地にも適応する。

## 生育環境

道端、荒地、草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、湿地、畑地、樹園地

## 侵入経緯

明治初期（1870 年代）に牧草として導入された。県内では福岡及其近郊植物目録（1925）に掲載されていることから、1910 年代には野生化していたと推測される。

## 定着状況

県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州

## 影響・被害

在来種との競合、畑作物との競合、在来種（ヌカボ属 *Agrostis*）との交雑、花粉症の原因植物

## 特記事項

国リスト：産業管理（No.181）

## クロコヌカグサ

*Agrostis nigra* With.

イネ科

## 選定理由

県内各地に散見される。同属のコヌカグサ *A. gigantea* と同様に多年草で競争力が強いいため、在来種との競合が懸念される。

## 原産地

不明

## 生態的特徴

多年草。茎は高さ 50~100cm、花期は 5~6 月。コヌカグサに比べて、花（小穂）がより紫褐色を帯び、花をつける枝が横に広がることで区別される。そのほかの形態的、生態的特徴はコヌカグサと同様で、日当たりのよいところを好む。

## 生育環境

道端、荒地、草地、河川敷、堤防、湿地、畑地、樹園地

## 侵入経緯

1950 年以前に渡来したという。県内における野生化の年代については不明。

## 定着状況

県内：各地に稀。国内：北海道、本州、四国、九州

## 影響・被害

在来種との競合、畑作物との競合、在来種（ヌカボ属 *Agrostis*）との交雑、花粉症の原因植物

## 特記事項

国リスト：産業管理（No.181、コヌカグサと同一番号）。コヌカグサとの中間型があり、両者を同一種とする見解もある。国リストでは両種を含むリスト番号になっている。

## メリケンカルカヤ

*Andropogon virginicus* L.

イネ科

## 選定理由

県内各地に普通に見られ、玄界灘海岸や平尾台などの重要地域にも定着している。しばしば群生しており、在来種との競合が懸念される。

## 原産地

北アメリカ

## 生態的特徴

多年草。茎は直立して、高さ 50~120cm、大きな株をつくる。花期は 9~11 月、花（小穂）の根元には白い綿毛が密生する。種子の生産量が多く、主として風により運ばれる。日当たりがよく、土壌が乾いたところを好む。酸性土壌や岩山にも生育する。

## 生育環境

道端、草地、海岸、河川敷、堤防、海岸埋立地、荒地、水田畦畔、畑地、樹園地、牧草地

## 侵入経緯

1940 年頃に愛知県で初めて確認された。非意図的な移入と考えられる。福岡県植物誌（1975）には記載がないことから、県内では 1970 年代以降に定着し、近年、急激に分布を拡大したと推測される。

## 定着状況

県内：各地に普通。国内：本州（関東地方以西）、四国、九州

## 影響・被害

在来種との競合

## 特記事項

国リスト：その他の総合対策（No.152）

## シロガネヨシ

*Cortaderia selloana* (Schult. et Schult.f.) Asch. et Graebn.

イネ科  
別名：パンパスグラス

選定理由	県内各地の道端、河原、海岸などに逸出・野生化しており、玄界灘海岸域にも見られる。高さ3mに達する大型で強健な株をつくるため、在来種との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ（アルゼンチン～ブラジル南部）
生態的特徴	大型の多年草。根茎から多数の茎を出して大きな株をつくり、高さ2～3mになる。葉は硬く縁はススキのようにざらつく。花期は9～10月、花茎を出して長さ30～100cmの大型の穂をつける。斑入りや花穂が紫色の園芸品種がある。
生育環境	海岸砂浜、草地、道端、荒地、河川敷、堤防
侵入経緯	観賞用として庭園などで栽培するために、明治中期（1890年代頃）に渡来した。栽培と野生化との区別が困難なこともあり、国内における野生化の年代は不明。
定着状況	県内：各地にやや稀。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.154）

## カモガヤ

*Desmodium paniculatum* (L.) DC.

イネ科  
別名：オーチャードグラス

選定理由	再生力が旺盛で、根茎で繁殖する。花粉症の原因植物である。県内各地の道端、畑地、草地などに見られ、緑化植物や牧草として広く利用されている。しばしば群生するため、在来種との競合が懸念される。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。茎は株立ちして高さ0.5～1.2m、葉は10～40cm、幅5～14mm。花は6～8月、高さ10～30cmの花茎を伸ばし緑色の花をつける。飼料用、早期緑化用として優れていることから、様々な品種が育成されている。
生育環境	畑地、樹園地、道端、荒地、草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、林縁
侵入経緯	江戸時代の文久年間（1861～1864年）に渡来した。明治初期（1868年）には北アメリカから牧草として導入され、その後、野生化した。県内では1935年頃に北九州市で確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物
特記事項	国リスト：産業管理（No.182）、日本ワースト100

## シナダレスズメガヤ

*Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees

イネ科  
別名：ウィーピングラブグラス

選定理由	県内各地に分布し、平尾台や玄界灘海岸域などの重要地域にも侵入している。大きな株となり、在来種と競合する。また、株の根元に砂を堆積させることにより、砂礫河原や海岸砂浜の生物の生育・生息環境を悪化させる。
原産地	南アフリカ
生態的特徴	多年草。高さ60～120cm、密生して大きな株をつくる。葉は細長く、しなやかに垂れ下がる。花期は8～10月、穂は長さ20～40cm。成長が速く発芽後1年目で結実する個体もある。種子生産量が多く発芽率も高い。日当たりのよい砂質土壌を好み、耐暑性や乾燥耐性が強い。
生育環境	道端、道路法面、河川敷、堤防、空地、荒地、草地、海岸、市街地
侵入経緯	第二次世界大戦前後（1940年代）に砂防用に導入された。その後、道路法面の緑化用に利用されるようになり、逸出・野生化した。県内では1962年に大牟田市で初めて確認された。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、砂の堆積による生育・生息環境の悪化
特記事項	国リスト：重点対策（No.80）、日本ワースト100

## ネズミホソムギ

*Lolium × hybridum* Hausskn.

イネ科

別名：ハイブリッドライグラス

## 選定理由

競争力が強く、在来種との競合が懸念される。牧草や緑化植物（法面緑化、砂防用）として非常に優れていることから、広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。

## 原産地

ヨーロッパ

## 生態的特徴

一年草または二年草。ネズミムギ *L. multiflorum* とホソムギ *L. perenne* は容易に交雑し、ネズミホソムギと名付けられている。雑種ではあるが、稔性を失わない（種子をつくる）ため、自然状態でも様々な中間型が見られ、識別が困難なものも多い。人為的に交配した栽培品種が多数あり、牧草、芝草として利用される。

## 生育環境

道端、河川敷、堤防、荒地、草地、畑地、樹園地、海岸砂浜、市街地

## 侵入経緯

1962年頃に牧草として導入されたという。県内における定着年代については不明。

## 定着状況

県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州

## 影響・被害

在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物

## 特記事項

国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## ネズミムギ

*Lolium multiflorum* Lam.

イネ科

別名：イタリアンライグラス

## 選定理由

競争力が強く、在来種との競合が懸念される。牧草や緑化植物（法面緑化、砂防用）として非常に優れていることから、同属のホソムギ *L. perenne* と同様に広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。

## 原産地

ヨーロッパ

## 生態的特徴

一年草または二年草。茎は高さ30～100cm。葉は長さ6～25cm。花期は5～7月、穂は長さ10～30cm。長さ5～12mmの芒（のぎ：果実の先端にある針状の突起）がある。日当たりのよい温暖な肥沃地を好む。栽培品種が多く、牧草、芝草として利用される。

## 生育環境

道端、荒地、空地、市街地、河川敷、堤防、草地、畑地、水田畦畔、樹園地、海岸砂浜

## 侵入経緯

明治初期（1870年代）に牧草として導入。1880年に東京で採集されたものが野生化の最初の記録と思われる。県内では第二次世界大戦終結（1945年）までに野生化したと考えられる。

## 定着状況

県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄

## 影響・被害

在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物

## 特記事項

国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## ホソムギ

*Lolium perenne* L.

イネ科

別名：ペレニアルライグラス

## 選定理由

競争力が強く、在来種との競合が懸念される。牧草や緑化植物（法面緑化、砂防用）として非常に優れていることから、同属のネズミムギ *L. multiflorum* と同様に広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。

## 原産地

ヨーロッパ

## 生態的特徴

多年草。茎は直立し、高さ30～60cmで、ネズミムギよりやや小型。花期は5～7月、穂は長さ15～20cm、ネズミムギと異なり、芒（のぎ：果実の先端にある針状の突起）はない。日当たりのよい温暖な肥沃地を好む。栽培品種が多く、最近では芝草としてもよく利用される。

## 生育環境

道端、荒地、空地、市街地、河川敷、堤防、草地、畑地、樹園地、海岸砂浜

## 侵入経緯

明治初期（1870年代）に牧草として導入された。1881年に東京で採集されたものが野生化の最初の記録と思われる。県内において野生化した年代は不明。

## 定着状況

県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄

## 影響・被害

在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物

## 特記事項

国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## ボウムギ

イネ科

*Lolium rigidum* Gaudin

選定理由	主に海岸砂浜やその周辺に生育し、玄界灘の海岸にも定着している。競争力が強く、在来の海浜植物との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ（地中海地方）
生態的特徴	一年草。茎は直立して、高さ10~50cmで、株立ちする。花期は6~8月、穂は長さ9~25cm、花（小穂）が花の軸に埋まるため、穂全体が1本の棒のように見える。芒（のぎ：果実の先端にある針状の突起）はないことが多い。海岸砂浜や沿海地の荒地などに多く見られる。
生育環境	海岸砂浜、海岸林、荒地、草地、道端、河川敷
侵入経緯	1931年に神奈川県横浜市で採集されたものが定着の最初の記録である。非意図的に移入されたと考えられる。県内における定着年代は不明。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州
影響・被害	在来種（海浜植物）との競合
特記事項	国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## ノゲナシドクムギ

イネ科

*Lolium temulentum* L. f. *arvense* (With.) Junge

選定理由	県内に定着している。競争力が強く、在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	一年草。茎は長さ30~80cm、葉は長さ20~50cm、花期は5~7月。ドクムギ <i>L. temulentum</i> f. <i>temulentum</i> の芒（のぎ：果実の先端にある針状の突起）のない型で、ドクムギの品種として分類される。芒の特徴を除いて、形態的、生態的特徴はドクムギと同様である。日当たりのよい温暖な肥沃地を好む。
生育環境	道端、空地、荒地、河川敷、堤防、草地、畑地、樹園地
侵入経緯	明治時代に非意図的に移入されたと考えられる。国内における定着年代は不明。県内では1935年に確認されたものが最初の記録と考えられる。
定着状況	県内：各地に稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、菌類（麦角菌）の寄主、家畜の中毒（麦角菌が寄生した果実）の可能性
特記事項	国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## ドクムギ

イネ科

*Lolium temulentum* L. f. *temulentum*

選定理由	県内に定着している。競争力が強く、在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	一年草。茎は直立して高さ30~80cmで、株立ちする。葉は長さ20~50cm。花期は5~7月、穂は長さ10~30cm、7~20mmの芒（のぎ：果実の先端にある針状の突起）がある。果実に有毒なアルカロイドを産出する菌（麦角菌の仲間）が寄生し、それを家畜が食べると中毒を起こすことがあるという。日当たりのよい温暖な肥沃地を好む。
生育環境	道端、空地、荒地、河川敷、堤防、草地、畑地、樹園地
侵入経緯	明治時代に非意図的に移入されたと考えられる。国内における定着年代は不明。
定着状況	県内：各地に稀。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、菌類（麦角菌）の寄主、家畜の中毒（麦角菌が寄生した果実）の可能性
特記事項	国リスト：産業管理（No.184、ドクムギ属）

## オオクサキビ

イネ科

*Panicum dichotomiflorum* Michx.

選定理由	県内各地に分布するが、玄界灘海岸林内や林縁にも多い。大型で、しばしば大群落を形成するため、在来種との競合が懸念される。
原産地	北アメリカ
生態的特徴	一年草。茎は太く、直立または斜上し、高さ40~100cm。葉は長さ20~40cm。花期は8~10月、穂は円錐状で長さ15~30cm、花をつける枝は広く開く。日当たりのよい湿ったところを好む。冠水耐性は強いが、乾燥耐性はやや弱い。
生育環境	道端、荒地、河川敷、海岸林、林縁、畑地、樹園地、放棄畑、放棄水田、湿地
侵入経緯	1929年に千葉県で初めて確認された。非意図的な移入と考えられる。県内では1950年頃から沿海地で確認され、1965年頃には各地で見られるようになった。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.155）

## シマスズメノヒエ

イネ科

*Paspalum dilatatum* Poir.

選定理由	繁殖力が強い。各地の道端、荒地、河川敷などに繁茂している。平尾台などの重要地域へも侵入している。アレロパシー作用もあるため、在来種との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年草。高さ0.5~1.5mで株立ちする。葉は長さ10~30cm。花期は6~10月、穂の枝は長さ5~10cmで3~7本つく。花は黒紫色の柱頭と葯が目立つ。種子と根茎で繁殖する。
生育環境	道端、荒地、空地、河川敷、堤防、草地、畑地、放棄畑、樹園地
侵入経緯	1915年に小笠原で採集されたものが国内最初の記録である。第二次世界大戦後（1945年以降）に緑化用に使用され、急激に分布を拡大した。県内では、1948年頃より福岡市内で見られるようになり、1965年頃には同属の在来種スズメノヒエ <i>P. thunbergii</i> よりはるかに普通なものになったという記録がある。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、菌類（麦角菌）の寄主
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.172）

## キシウスズメノヒエ

イネ科

*Paspalum distichum* L. var. *distichum*

選定理由	繁殖力が旺盛で、浮遊状態になって水面を覆い尽くすこともあるため、生態系影響が懸念される。クリークなどでは、通水阻害や枯死した腐敗個体による水質悪化を引き起こしている。
原産地	不明（北アメリカ原産ともいわれる）
生態的特徴	多年生の抽水~湿生植物。浮遊状態で群生していることもある。茎の基部は水中または地表を横にはい、分枝した茎が直立して水上茎となり、高さ10~50cm。茎の断片は再生されやすい。花期は7~10月、穂はV字状に分かれた長さ3~8cmの2本の枝からなる。
生育環境	河川、クリーク、水路、ため池
侵入経緯	1924年に和歌山県で定着が確認された（和名“キシウ”の由来）。非意図的に移入されたと考えられる。県内では第二次世界大戦後（1945年以降）に散見されるようになり、1970年代には大繁茂を見るようになった。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、イネとの競合、通水阻害、水質悪化、菌類（麦角菌）の寄主
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.156）

## チクゴスズメノヒエ

イネ科

*Paspalum distichum* L. var. *indutum* Shinners

選定理由	繁殖力が旺盛で、各地の河川、クレーク、ため池などの水際で繁茂している。浮遊状態になって水面を覆い尽くすこともあるので、生態系影響が懸念される。クレークなどでは、通水障害や枯死した腐敗個体による水質悪化を引き起こしている。基本変種キシウズメノヒエ <i>P. distichum</i> var. <i>distichum</i> (p.69) に比べて大型であるので、大繁茂するとより問題化する。
原産地	不明
生態的特徴	多年生の抽水～湿生植物。浮遊状態で群生することもある。高さ 30～80cm。葉（葉鞘）に毛が密生する。花期は 7～10 月、穂の枝は長さ 5～8cm、2 または 3（稀に 4）本である。
生育環境	河川、クレーク、水路、ため池
侵入経緯	1970 年代前半に筑後地域において国内で初めて確認され、その後急激に分布を拡大した。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、イネとの競合、通水障害、水質悪化、菌類（麦角菌）の寄主
特記事項	国リスト：重点対策（No.81）。本種の生態と防除に関する研究が 1980 年代に福岡県農業総合試験場（現福岡県農林業総合試験場）において精力的に行われた。

## アメリカスズメノヒエ

イネ科

別名：バヒアグラス

*Paspalum notatum* Flüggé

選定理由	痩せ地や乾燥地でもよく育ち繁殖力も旺盛であるため、在来種との競合が懸念される。緑化植物として非常に優れていることから、広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	多年草。高さ 30～80cm。根茎は太く、横にはう。葉は長さ 10～30cm。花期は 6～10 月、穂の枝は長さ 6～15cm で 2 本または 3 本つく。花は黒紫色の柱頭と葯が目立つ。種子生産量が多く、繁殖力が旺盛である。
生育環境	道端、空地、荒地、河川敷、堤防、草地、畑地、樹園地
侵入経緯	1969 年に徳島県で採集されたものが国内最初の野生化の記録。飼料植物として利用していたものが逸出したと考えられる。県内では 1973 年に採集されたものが最初の記録である。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：産業管理（No.189）

## タチスズメノヒエ

イネ科

*Paspalum urvillei* Steud.

選定理由	種子生産量が多く、繁殖力が極めて強い。各地の道端、空地、河川敷などに繁茂し、平尾台などの重要地域へも侵入している。アレロパシー作用もあるため、在来種との競合が懸念される。
原産地	南アメリカ
生態的特徴	多年草。高さ 0.7～1.5m で株立ちする。葉は長さ 10～40cm、葉（葉鞘）の基部に剛毛があり、手に刺さる。花期は 6～11 月、年に 2 回程度穂をつける。穂の枝は長さ 4～10cm で 10～20 本つき、全体的に毛が多い。同様の立地に生育する同属の外来種シマスズメノヒエ <i>P. dilatatum</i> (p.69) よりも種子生産量が多く、繁殖力が旺盛と考えられている。
生育環境	道端、荒地、空地、河川敷、堤防、草地、畑地、放棄畑、樹園地、海岸埋立地、市街地
侵入経緯	1958 年に北九州市で国内最初の定着が確認された。朝鮮戦争に際してアメリカ軍の軍需品とともに非意図的に移入されたと考えられている。
定着状況	県内：各地に普通（分布図 p.92）。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、菌類（麦角菌）の寄主
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.173）

## オニウシノケグサ

*Schedonorus phoenix* (Scop.) Holubイネ科  
別名：トールフェスク

選定理由	競争力が強い多年草で、在来種との競合が懸念される。飼料用のほか、緑化植物（法面緑化、砂防用）として非常に優れていることから、広く利用されている。利用地外への個体や種子の逸出を防止するなどの啓発が重要である。
原産地	ヨーロッパ
生態的特徴	多年草。茎は直立して、高さ 40～180cm。葉は長さ 10～50cm。花期は 6～8 月、穂は上部で枝を分けて多数の花（小穂）をつける。日当たりのよい、肥沃で水分の豊富なところを好む。
生育環境	道端、空地、荒地、畑地、樹園地、牧草地、河川敷、堤防、海岸砂浜、林縁
侵入経緯	1905 年に牧草として導入された。利用が増大したのは、1960～1970 年代にアメリカの品種ケンタッキー 31 が導入されてからで、緑化植物としての使用とともに分布を拡大したと推測される。県内では、1965 年頃に稀に野生化したものが見られたという記録がある。
定着状況	県内：各地に普通。国内：北海道、本州、四国、九州、沖縄
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物
特記事項	国リスト：産業管理 (No.183)、日本ワースト 100

## セイバンモロコシ

*Sorghum halepense* (L.) Pers.

イネ科

選定理由	県内各地の河川敷や道端などで分布を拡大している。大型の多年草で、単一群落を形成することもあり、河原や草地に生育する在来種との競合が懸念される。
原産地	ヨーロッパ（地中海地域）
生態的特徴	大型の多年草。高さ 1～2.5m、葉は長さ 20～70cm、ススキに似ているが、葉の縁はあまりざらつかず、手を切ることはない。花期は 7～9 月、赤茶色を帯びた円錐状の穂をつける。穂は高さ 20～50cm になる。地下茎による栄養繁殖及び種子繁殖の両方で分布を拡大する。
生育環境	道端、河川敷、堤防、草地、畑地、樹園地
侵入経緯	飼料植物として 1943 年に千葉県に導入された。県内では 1950 年頃に福岡市で初めて確認され、その後、1960 年代中頃には各地で繁茂するようになった。
定着状況	県内：各地に普通。国内：本州、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合、畑作物との競合、交雑（モロコシ（ソルガム））の可能性
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.157)。遠賀川において繁殖抑制技術の検討が行われている。

## シュロガヤツリ

*Cyperus alternifolius* L.カヤツリグサ科  
別名：カラカサガヤツリ

選定理由	繁殖力が旺盛で、寒さにも強いいため、各地の河川やため池で野生化している。群生しているところもあり、在来の水生植物、湿生植物との競合が懸念される。水質浄化に有効とされるため、調整池などに植栽されることがある。池外に逸出させないよう啓発することも重要である。
原産地	アフリカ（マダガスカル）
生態的特徴	多年生の抽水植物。茎は高さ 1～2m になり、株立ちする。葉（苞葉）は、シュロの葉状で、長さ 10～30cm、茎の先に傘状につく。花期は 5～9 月、茎の先に 5～15cm の枝を伸ばして球状につける。花茎が倒れると茎の先から芽が伸長して新しい個体になる。
生育環境	河川、クリーク、水路、ため池、湿地
侵入経緯	観賞用の園芸植物として 1937 年以前に渡来し、その後、逸出・野生化した。県内では 2000 年代になって野生化状態のものが各地で見られるようになった。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（関東地方以西）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策 (No.83)

## メリケンガヤツリ

カヤツリグサ科

*Cyperus eragrostis* Lam.

選定理由	繁殖力が旺盛で、県内各地の河川や水路などで急速に分布を広げている。群生しているところもあり、在来の湿生植物との競合が懸念される。
原産地	熱帯アメリカ
生態的特徴	多年草。茎は高さ 30～100cm になり、株立ちする。葉は茎とほぼ同じ長さ。花期は 6～11 月、茎の先に 1～10cm の枝を 5～10 個伸ばして球状につける。木質で太くて短い根茎で盛んに繁殖する。日当たりのよい、やや湿ったところを好む。
生育環境	河川、河川敷、クリーク、水路、海岸埋立地、湿地
侵入経緯	1959 年に三重県で初めて確認された。非意図的な移入と考えられる。その後、1980 年代に神奈川県で確認され、1990 年代後半に急速に分布を拡大した。県内では 2000 年代になって筑後川や遠賀川の河川敷などでよく見られるようになった。
定着状況	県内：各地にやや普通。国内：本州（関東地方以西）、四国、九州、沖縄、小笠原
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：重点対策（No.84）

# 要注意外来種

動物  
(鳥類・魚類・昆虫類・貝類・甲殻類その他)

No.	高次分類群	種名	由来	影響・被害	特記事項
1	鳥類	コジュケイ	国外	在来種(地上性鳥類)との競合、地上性昆虫の捕食	
2	鳥類	コバクチョウ	国外	在来種(水禽類)との競合、水生植物の摂食、レンコンなどの食害	国リスト:その他の総合対策(No.144)
3	魚類	グッピー	国外	在来種(淡水性魚類)との競合、水生動物の捕食	国リスト:その他の総合対策(No.174)
4	魚類	ナイルティラピア	国外	在来種(淡水性魚類)との競合、水生動物の捕食	国リスト:緊急対策(No.163)
5	魚類	カムルチー(ライギョ)	国外	在来種(魚類、両生類、淡水性無脊椎動物など)の捕食	
6	昆虫類	チャバネゴキブリ	国外	食品の食害、人体被害(アレルギー)、病原菌の媒介	日本ワースト 100
7	昆虫類	プラタナスグンバイ	国外	園芸樹木の食害、在来植物の摂食	
8	昆虫類	ミカントゲコナジラミ	国外	農作物の食害、すす病の発生源、在来植物の摂食	
9	昆虫類	チャトゲコナジラミ	国外	農作物の食害、すす病の発生源、在来植物の摂食	
10	昆虫類	ザクロシロトゲコナジラミ	国外	農作物の食害、在来植物の摂食	
11	昆虫類	キョウチクトウアブラムシ	国外	農作物の食害、すす病の発生源	
12	昆虫類	アルファルファアブラムシ	国外	農作物の食害	
13	昆虫類	ワタフキカイガラムシ(イセリアカイガラムシ)	国外	農作物の食害	
14	昆虫類	チガヤシロオカイガラムシ	国外	芝草の食害	
15	昆虫類	シロテンハナムグリ	国外 国内	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策(No.178)
16	昆虫類	ツシمامナクボカミキリ	国外 国内	マツ科植物の食害	
17	昆虫類	オオタコゾウムシ	国外	在来種との競合、芝草の食害	
18	昆虫類	ヤシオオオサゾウムシ	国外	ヤシ科植物の食害、植物に対する病原体の媒介	
19	昆虫類	シバオサゾウムシ	国外	芝草の食害	
20	昆虫類	ココゾウムシ	国外	穀類の食害	
21	昆虫類	ホソオチョウ(ホソオアゲハ)	国外	在来種(ジャコウアゲハ)との競合	国リスト:その他の総合対策(No.133)
22	昆虫類	タケノホソクロバ	国外	人体被害(かぶれ、皮膚炎)	
23	昆虫類	シバツトガ	国外	芝草の食害	
24	昆虫類	イッテンオオメイガ(サンカメイガ)	国外	イネの食害	
25	貝類	シマメノウフネガイ	国外	在来種(海産貝類)との競合	国リスト:その他の総合対策(No.185)
26	貝類	オオクビキレガイ	国外	在来種(陸生貝類、ミミズなど)の捕食、農作物の食害	国リスト:その他の総合対策(No.189)
27	貝類	サカマキガイ	国外	在来種(淡水性貝類)との競合	日本ワースト 100
28	貝類	ハブタエモノアラガイ	国外	在来種(淡水性貝類)との競合	国リスト:その他の総合対策(No.188)
29	甲殻類その他	タテジマフジツボ	国外	在来種(汽水性付着動植物)との競合、水産業被害、排水施設の汚損、通水阻害	国リスト:その他の総合対策(No.200)
30	甲殻類その他	アメリカフジツボ	国外	在来種(汽水性付着動植物)との競合、水産業被害、排水施設の汚損、通水阻害	国リスト:その他の総合対策(No.201)
31	甲殻類その他	ヨーロッパフジツボ	国外	在来種(汽水性付着動植物)との競合、水産業被害、排水施設の汚損、通水阻害	国リスト:その他の総合対策(No.202)
32	甲殻類その他	ナンオウフジツボ	国外	在来種(汽水性付着動植物)との競合、水産業被害、排水施設の汚損、通水阻害	
33	甲殻類その他	フロリダマミズヨコエビ	国外	在来種(ヨコエビ類)との競合の可能性、ワサビの食害	国リスト:その他の総合対策(No.204)
34	甲殻類その他	チチュウカイミドリガニ	国外	在来種(カニ類)との競合、在来種(貝類)の捕食	国リスト:その他の総合対策(No.205)、日本ワースト 100

# 要注意外来種

## 植物

No.	高次分類群	種名	由来	影響・被害	特記事項
1	植物	ミカヅキゼニゴケ	国外	在来種（コケ植物）との競合	国リスト：その他の総合対策（No.100）
2	植物	コンテリクラマゴケ	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.103）
3	植物	ジャクチリソバ	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.104）
4	植物	ヒメツルソバ	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.106）
5	植物	ヒメスイバ	国外	在来種との競合、畑作物や牧草との競合	国リスト：その他の総合対策（No.107）
6	植物	アレチギシギシ	国外	在来種との競合	
7	植物	ヒメマツバボタン （ケツメクサ）	国外	在来種との競合	国リスト：重点対策（No.89）
8	植物	アカザカズラ	国外	在来種との競合	
9	植物	ムシトリナデシコ	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.110）
10	植物	オオホナガアオゲイトウ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
11	植物	アオゲイトウ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
12	植物	ハリビユ	国外	在来種との競合、畑作物との競合、家畜（反芻動物）の中毒	
13	植物	フサジュンサイ （ハゴロモモ、カボンバ）	国外	在来種（水生植物）との競合	国リスト：重点対策（No.40）
14	植物	キウイフルーツ（オニマタ タビ、シナサルナシ）	国外	在来種との競合	国リスト：産業管理（No.177）
15	植物	ナガミヒナゲシ	国外	在来種との競合	
16	植物	ハルザキヤマガラシ （セイヨウヤマガラシ）	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.116）、日本ワースト 100
17	植物	オカタイトゴメ	国外	在来種との競合	
18	植物	ツルマンネングサ	国外	在来種との競合	
19	植物	トキワサンザシ	国外	在来種との競合、人体被害（刺によるけが）	国リスト：その他の総合対策（No.119、ピラカンサ類）
20	植物	カザンデマリ	国外	在来種との競合、人体被害（刺によるけが）	国リスト：その他の総合対策（No.119、ピラカンサ類）
21	植物	セイヨウミヤコグサ	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	
22	植物	コメツブウマゴヤシ	国外	在来種との競合、畑作物や牧草との競合、土壌窒素の蓄積	
23	植物	ムラサキウマゴヤシ	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	
24	植物	クスダマツメクサ	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	
25	植物	ムラサキツメクサ	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	
26	植物	シロツメクサ	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	
27	植物	ナヨクサフジ （ヘアリーベッチ）	国外	在来種との競合、土壌窒素の蓄積	国リスト：産業管理（No.180、外来クサフジ類）
28	植物	ハナカタバミ	国外	在来種との競合	
29	植物	ベニカタバミ	国外	在来種との競合	
30	植物	ムラサキカタバミ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
31	植物	ニワウルシ （シンジュ）	国外	在来種との競合	国リスト：重点対策（No.49）
32	植物	フヨウ	国外	在来種との競合	国リスト：その他の総合対策（No.163）
33	植物	ホソバヒメミソハギ	国外	在来種（湿生植物）との競合、イネとの競合	
34	植物	マツヨイグサ	国外	在来種との競合	
35	植物	カミヤツデ	国外	在来種との競合、人体被害（皮膚炎）	国リスト：その他の総合対策（No.125）
36	植物	トウネズミモチ	国外	在来種との競合	国リスト：重点対策（No.53）
37	植物	ツルニチニチソウ	国外	在来種との競合	国リスト：重点対策（No.54）
38	植物	セイヨウヒルガオ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
39	植物	ネコアサガオ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
40	植物	イモネアサガオ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
41	植物	マルバアサガオ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	国リスト：重点対策（No.55、外来ノアサガオ類）
42	植物	ヒメイワダレソウ	国外	在来種との競合	国リスト：重点対策（No.96）

# 要注意外来種

No.	高次分類群	種名	由来	影響・被害	特記事項
43	植物	ハマクマツヅラ (ヒメクマツヅラ)	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.130、アレチハナガサ類)
44	植物	ハコベホオズキ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
45	植物	ワルナスビ	国外	在来種との競合、畑作物との競合、有毒植物(全草にソラニンを含む)、菌類(うどんこ病菌)の寄主	
46	植物	アメリカイヌホオズキ	国外	在来種との競合、畑作物との競合、有毒植物(全草にソラニンを含む)、菌類(うどんこ病菌)の寄主	
47	植物	ウキアゼナ	国外	在来種(水生植物)との競合、イネとの競合	国リスト:その他の総合対策 (No.132)
48	植物	フサフジウツギ (ブッドレア)	国外	在来種との競合	国リスト:重点対策 (No.59)
49	植物	ビロードモウズイカ	国外	在来種との競合	
50	植物	ヤナギバルイラソウ	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.167)
51	植物	セイヨウノコギリソウ	国外	在来種との競合	
52	植物	カッコウアザミ (アゲラタム)	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.168)
53	植物	ブタクサ	国外	在来種との競合、花粉症の原因植物	
54	植物	ブタクサモドキ	国外	在来種との競合	
55	植物	コセンダングサ	国外	在来種との競合	
56	植物	オオバナノセンダングサ (アワユキセンダングサ)	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.169)、日本ファースト 100
57	植物	アメリカオニアザミ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.138)
58	植物	ペラペラヨメナ	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.142)
59	植物	ケナシヒメムカシヨモギ	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.139)
60	植物	キクイモ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
61	植物	フランスギク	国外	在来種との競合、花粉症の原因植物	国リスト:その他の総合対策 (No.146)
62	植物	ノボロギク	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
63	植物	オオアワダチソウ	国外	在来種との競合	国リスト:重点対策 (No.65)、 日本ファースト 100
64	植物	メリケントキンソウ	国外	在来種との競合、人体被害(刺によるけが)	
65	植物	ユウゼンギク	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.135)
66	植物	イヌカミツレ	国外	在来種との競合	
67	植物	ミズヒナゲシ	国外	在来種(水生植物)との競合	
68	植物	アマゾンチカガミ (アマゾンフロッグビット)	国外	在来種(水生植物)との競合	国リスト:重点対策 (No.72)
69	植物	ハナニラ	国外	在来種との競合	国リスト:その他の総合対策 (No.150)
70	植物	アツバキミガヨラン	国外	在来種との競合	国リスト:重点対策 (No.74)
71	植物	マルバツクサ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
72	植物	オオスズメノテッポウ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	
73	植物	フトボメリケンカルカヤ	国外	在来種との競合	
74	植物	ハルガヤ	国外	在来種との競合、花粉症の原因植物	国リスト:その他の総合対策 (No.153)
75	植物	オオカニツリ	国外	在来種との競合	
76	植物	シバムギ	国外	在来種との競合、畑作物や牧草との競合	
77	植物	オオアワガエリ (チモシー)	国外	在来種との競合、畑作物との競合、花粉症の原因植物	国リスト:産業管理 (No.185)
78	植物	ナガハグサ	国外	在来種との競合、花粉症の原因植物	
79	植物	ツノアイアシ	国外	在来種との競合	
80	植物	ナギナタガヤ	国外	在来種との競合、畑作物や牧草との競合	国リスト:産業管理 (No.187)
81	植物	ミジンコウキクサ	国外	在来種(水生植物)との競合	
82	植物	ショクヨウガヤツリ	国外	在来種との競合、畑作物との競合	

## 福岡県に侵入・定着する可能性が高い侵略的外来種の概要

福岡県ではこれまで、ホンセイインコ、カミツキガメ、ワニガメ、アリゲーターガー、外来カブトムシ類、外来クワガタムシ類など、飼育個体の逸出または意図的な放逐と考えられる個体の目撃・捕獲事例がある。現時点では定着はみられないが、在来種との競合や捕食による悪影響が及ぶ可能性があり、普及啓発の実施により遺棄・逸出の防止を図ることが重要である。特定外来生物のヒアリ、アカカミアリ、ツマアカスズメバチは、輸入貨物にまぎれて侵入したと考えられている。2017年にヒアリは博多港、北九州港を含む全26事例12都府県、アカカミアリは苅田町を含む全17事例12都府県で確認された。また、対馬に定着しているツマアカスズメバチは、2015年に北九州市、2016年に宮崎県、2017年に壱岐で確認された。これらの種は今後も県内に侵入してくる可能性が高いと考えられる。

一方、近県には、特定外来生物の動物として、ヌートリア、クリハラリス、アルゼンチンアリ、クロゴケグモ、植物ではオオカワヂシャ、オオハンゴンソウ、ヒガタアシの定着が確認されている。これらの種は県境近くに生息・生育していないが、アルゼンチンアリなどは車や物資の移動に伴って分布を拡大していると考えられており、いつ侵入してきても不思議ではない。また、ヌートリアやクリハラリスは移動分散能力が高いと考えられることから、近県における分布拡大状況について把握しておく必要がある。

本リストで選定した29種は、県内に侵入・定着する可能性が特に高いと考えられる種であるが、その他の侵略的外来種が侵入する可能性も十分に考えられる。日本は野生生物の輸入大国であり、種ごとに輸出入が記録されているワシントン条約(正式名称「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」)掲載種だけをみても、2007年には生きた動物12万頭以上、植物1万件以上が輸入されている。また、本県のコンテナ取扱量は全国でも上位にあたり、非意図的な導入により侵略的外来種が侵入してくる可能性も相対的に高いと考えられ、十分な監視が必要である。

表8 定着予防外来種の一覧

No. (通し)	No. (分類群)	高次分類群	目名	科名	種名(和名)	種名(学名)	生態系被害 防止外来種 リスト	特定外 来生物	ワースト100	
									世界	日本
1	1	哺乳類	ネズミ	ヌートリア	ヌートリア	<i>Myocastor coypus</i>	89	○	○	○
2	2	哺乳類	ネズミ	リス	クリハラリス	<i>Callosciurus erythraeus</i>	86	○		
3	3	哺乳類	ネコ	ジャコウネコ	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	114			
4	4	哺乳類	クジラウシ	イノシシ	イノブタ (ニホンイノシシ×ブタ)	<i>Sus scrofa leucomystax</i> × <i>S. s. domesticus</i>	117		○	○
5	1	鳥類	インコ	インコ	ホンセイインコ	<i>Psittacula krameri</i>	146			
6	1	爬虫類	カメ	カミツキガメ	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>	92	○		○
7	2	爬虫類	カメ	カミツキガメ	ワニガメ	<i>Macrochelys temminckii</i>	38			
8	3	爬虫類	カメ	イシガメ	セマルハコガメ	<i>Cuora flavomarginata</i>	42			
9	4	爬虫類	有鱗	イグアナ	グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	127			
10	1	魚類	ガー	ガー	アリゲーターガー	<i>Atractosteus spatula</i>	54	○		
11	2	魚類	ガー	ガー	スポッテッドガー	<i>Lepisosteus oculatus</i>	54	○		
12	3	魚類	コイ	コイ	ソウギョ	<i>Ctenopharyngodon idellus</i>	156			○
13	4	魚類	コイ	コイ	ハクレン	<i>Hypophthalmichthys molitrix</i>	154			
14	5	魚類	サケ	サケ	ニジマス	<i>Oncorhynchus mykiss</i>	206		○	○
15	1	昆虫類	コウチュウ	クワガタムシ	外来クワガタムシ類	Lucanidae gen spp.	70	○ (一部)		
16	2	昆虫類	コウチュウ	コガネムシ	外来カブトムシ類	Dynastinae gen spp.	71			
17	3	昆虫類	ハチ	アリ	アルゼンチンアリ	<i>Linepithema humile</i>	102	○	○	○
18	4	昆虫類	ハチ	アリ	アカカミアリ	<i>Solenopsis geminata</i>	103	○		
19	5	昆虫類	ハチ	アリ	ヒアリ	<i>Solenopsis invicta</i>	12	○	○	
20	6	昆虫類	ハチ	スズメバチ	ツマアカスズメバチ	<i>Vespa velutina</i>	104	○		
21	1	クモ形類	クモ	ヒメグモ	クロゴケグモ	<i>Latrodectus mactans</i>	107	○		
22	1	植物		マメ	ナガバアカシア	<i>Acacia longifolia</i>	44			
23	2	植物		アカバナ	ウスゲオオバナミズキンバイ	<i>Ludwigia grandiflora</i> subsp. <i>hexapetala</i>	26	○		
24	3	植物		ヒルガオ	モミジバヒルガオ	<i>Ipomoea cairica</i>	95			
25	4	植物		ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	<i>Veronica anagallis-aquatica</i>	29	○		
26	5	植物		キク	ネバリノギク	<i>Symphotrichum novae-angliae</i>	134			○
27	6	植物		キク	オオハンゴンソウ	<i>Rudbeckia laciniata</i>	32	○		
28	7	植物		イネ	ヒガタアシ	<i>Spartina alterniflora</i>	34	○		
29	8	植物		ショウガ	ハナシユクシャ	<i>Hedychium coronarium</i>	176			

## ヌートリア

ネズミ目ヌートリア科

*Myocastor coypus* Molina, 1782

選定理由	中部以西の12府県で定着が確認されており、水生動植物や農作物への食害が報告されている。近県では山口県に定着しているほか、熊本県でも単発的な捕獲情報があり、監視が必要である。
原産地	南アメリカ（ブラジル南部、ボリビア、チリ、アルゼンチン）
影響・被害	水生動植物の捕食・摂食、農作物の食害、営巣による堤防の強度の低下
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.89）、世界ワースト100、日本ワースト100

## クリハラリス

ネズミ目リス科  
別名：台湾リス

*Callosciurus erythraeus* (Bonhote, 1901)

選定理由	果樹などの農作物や植林木への食害のほか、電線を損傷したり民家に侵入するなどの生活環境被害も生じている。近県では大分県と熊本県で定着しており、侵入状況の監視が必要である。
原産地	中国南部、インド東部、東南アジア（ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム、台湾）
影響・被害	農作物の食害、植林木の食害、生活環境被害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.86）

## ハクビシン

ネコ目ジャコウネコ科

*Paguma larvata* (C.E.H. Smith, 1827)

選定理由	農業被害や在来動植物への食害、中型哺乳類との競合、民家への侵入による生活環境被害が報告されている。県内で単発的な目撃情報があり、侵入状況の確認と監視が必要である。
原産地	中国南部、ヒマラヤ、東南アジア（台湾、マレー半島、スマトラ、ボルネオ）
影響・被害	農作物の食害、在来動植物の捕食・摂食、在来種（中型哺乳類）との競合、建造物の汚損
特記事項	国リスト：重点対策（No.114）

## イノブタ（ニホンイノシシ×ブタ）

クジラウシ目イノシシ科  
別名：ノブタ

*Sus scrofa leucomystax* Temminck, 1842 × *S. s. domesticus* Erxleben, 1777

選定理由	成長が早く産仔数が多いため、野生のニホンイノシシ集団にイノブタの遺伝子が流入すると、農業被害が加速するおそれがある。県内での定着状況が不明なため、現状把握が必要である。
原産地	不明（ブタの原産地にはヨーロッパ型とアジア型がある）
影響・被害	在来種（ニホンイノシシ）との交雑、農作物の食害
特記事項	国リスト：重点対策（No.117、ノブタ・イノブタ）、世界ワースト100、日本ワースト100

## ホンセイインコ

インコ目インコ科  
別名：ワカケホンセイインコ、ツキノワインコ

*Psittacula krameri* (Bechstein, 1800)

選定理由	樹洞性鳥類と営巣場所が競合する可能性や、密度の増加による農業被害の可能性がある。県内でも単発的に野外で観察されており、侵入状況の監視が必要である。
原産地	南アジア（インド、パキスタン、スリランカ）
影響・被害	在来種（樹洞性鳥類）との競合、農作物の食害、オウム病の媒介の可能性
特記事項	国リスト：その他の総合対策（No.146、ワカケホンセイインコ）

## カミツキガメ

カメ目カミツキガメ科

*Chelydra serpentina* (Linnaeus, 1758)

- 選定理由** 魚類や両生類をはじめとする水生動物への食害や、在来カメ類との競合が生じる可能性がある。県内でも単発的に捕獲されており、侵入状況の監視が必要である。
- 原産地** 北アメリカ～南アメリカ（カナダ～エクアドルにかけてのアメリカ大陸）
- 影響・被害** 水生動物の捕食、在来種（カメ類）との競合、漁具の破損、水産物の食害、人体被害（咬傷）
- 特記事項** 特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.92）、日本ワースト 100

## ワニガメ

カメ目カミツキガメ科

*Macrochelys temminckii* (Troost, 1835)

- 選定理由** 魚類や両生類をはじめとする水生動物への食害や、在来カメ類との競合が生じる可能性がある。県内でも単発的に捕獲されており、侵入状況の監視が必要である。
- 原産地** 北アメリカ南東部
- 影響・被害** 水生動物の捕食、在来種（カメ類）との競合、人体被害（咬傷）
- 特記事項** 国リスト：定着予防（No.38）

## セマルハコガメ

カメ目イシガメ科  
別名：チュウゴクセマルハコガメ

*Cuora flavomarginata* (Gray, 1863)

- 選定理由** ニホンイシガメと交雑するおそれがあるほか、昆虫や貝などの陸生小動物や種子類を食害する可能性がある。県内でも単発的に捕獲されており、侵入状況の監視が必要である。
- 原産地** 中国、台湾、石垣島、西表島
- 影響・被害** 在来種（ニホンイシガメ）との交雑、陸生小動物の捕食、種子類の摂食
- 特記事項** 国リスト：定着予防（No.42、チュウゴクセマルハコガメ）

## グリーンイグアナ

有鱗目イグアナ科

*Iguana iguana* (Linnaeus, 1758)

- 選定理由** 在来の小動物が食害されるほか、観葉植物や果実、花卉の食害の可能性がある。九州以北での定着の可能性は低いですが、県内では単発的に野外で捕獲されており、侵入状況の監視が必要である。
- 原産地** メキシコ～ブラジル・ボリビアまでの中央アメリカ～南アメリカ、西インド諸島
- 影響・被害** 小動物の捕食、農作物の食害
- 特記事項** 国リスト：重点対策（No.127）

## アリゲーターガー

ガー目ガー科

*Atractosteus spatula* (Lacepède, 1803)

- 選定理由** 在来動物を捕食するおそれがある。県内で複数の採集・目撃事例がある。国内での定着は確認されていないが越冬は可能で、大河川の湛水域では定着の可能性もあるため、注意が必要である。
- 原産地** 北アメリカ～中央アメリカ（メキシコ湾流入河川）
- 影響・被害** 在来動物の捕食、人体被害（咬傷）
- 特記事項** 特定外来生物、国リスト：定着予防（No.54、ガー科）

## スポットテッドガー

ガー目ガー科

*Lepisosteus oculatus* Winchell, 1864

- 選定理由** 在来動物を捕食するおそれがある。県内で複数の採集・目撃事例がある。国内での定着は確認されていないが越冬は可能で、大河川の湛水域では定着の可能性もあるため、注意が必要である。
- 原産地** 北アメリカ東部
- 影響・被害** 在来動物の捕食、人体被害（咬傷）
- 特記事項** 特定外来生物、国リスト：定着予防（No.54、ガー科）

## ソウギョ

コイ目コイ科

*Ctenopharyngodon idellus* (Valenciennes, 1844)

- 選定理由** 県内ではかつて除草目的で多く放流され、それらに由来すると思われる個体の採集例が近年も継続してある。西日本における定着事例はないが、新規の放流に注意が必要である。
- 原産地** 中国大陸東部
- 影響・被害** 水生植物の摂食とそれによる生態系改変
- 特記事項** 国リスト：その他の総合対策（No.156）、日本ワースト 100

## ハクレン

コイ目コイ科

*Hypophthalmichthys molitrix* (Valenciennes, 1844)

- 選定理由** 筑後川水系ではかつて放流された個体の採集例が近年も継続してある。西日本における定着事例はないが、北アメリカなどでは侵略的外来種として問題視されており注意が必要である。
- 原産地** 中国大陸東部
- 影響・被害** 植物プランクトンの摂食とそれによる生態系改変
- 特記事項** 国リスト：その他の総合対策（No.154）

## ニジマス

サケ目サケ科  
別名：レインボートラウト

*Oncorhynchus mykiss* (Walbaum, 1792)

- 選定理由** 県内では釣り目的での放流が行われており、多くの採集例がある。西日本における定着事例はないが、ダム上流などでは環境条件によって定着の可能性もあり、注意が必要である。
- 原産地** 北アメリカ（カムチャッカ半島～北アメリカ西岸）、メキシコ北西部の一部
- 影響・被害** 在来種（魚類）との競合、水生動物の捕食
- 特記事項** 国リスト：産業管理（No.206）、世界ワースト 100、日本ワースト 100

## 外来クワガタムシ類

コウチュウ目クワガタムシ科

Lucanidae gen spp.

- 選定理由** 県内で複数の採集事例、目撃事例がある。国内での定着は確認されていないが、多く販売されているため、それらが逸出しないよう普及啓発とともに注視が必要である。
- 原産地** 種により原産地は様々であるが、よく販売されている種は東南アジア原産のものが多い
- 影響・被害** 在来種（樹液食昆虫）との競合、在来種（クワガタムシ類）との交雑
- 特記事項** 特定外来生物（マルバネクワガタ属 10 種）、国リスト：定着予防（No.70、外国産クワガタムシ）

## 外来カブトムシ類

コウチュウ目コガネムシ科

Dynastinae gen spp.

選定理由	県内で複数の採集事例、目撃事例がある。国内での定着は確認されていないが、多く販売されているため、それらが逸出しないよう普及啓発とともに注視が必要である。
原産地	種により原産地は様々であるが、よく販売されている種は東南アジア原産のものが多い
影響・被害	在来種（樹液食昆虫）との競合、在来種（カブトムシ類）との交雑
特記事項	国リスト：定着予防（No.71、外国産カブトムシ）

## アルゼンチンアリ

ハチ目アリ科

*Linepithema humile* (Mayr, 1868)

選定理由	攻撃性が強く、在来のアリ類の巣を襲って幼虫、成虫を捕食するほか、ハチや鳥の巣も襲う。九州では未定着であるが、近県では山口県に定着しているため、侵入状況の監視が必要である。
原産地	南アメリカ
影響・被害	在来種（アリ類）との競合、小型動物の捕食、アブラムシ類の保護による農業被害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.102）、世界ワースト 100、日本ワースト 100

## アカカミアリ

ハチ目アリ科

*Solenopsis geminata* (Fabricius, 1804)

選定理由	攻撃性が強く、人への咬傷や刺傷被害がある。刺されると激しい痛みと腫れを伴う。国内では硫黄島を除いて未定着。博多港と苅田町で採集例があるため、侵入状況の監視が必要である。
原産地	北アメリカ南部～中央アメリカ
影響・被害	人体被害（咬傷、刺傷）、在来アリ類との競合、小型動物の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.103）

## ヒアリ

ハチ目アリ科

*Solenopsis invicta* Buren, 1972

選定理由	攻撃性が強く、人への咬傷や刺傷被害がある。刺されると激しい痛みと腫れを伴う。国内では未定着であるが、博多港と北九州港で採集例があるため、侵入状況の監視が必要である。
原産地	南アメリカ
影響・被害	人体被害（咬傷、刺傷）、在来アリ類との競合、小型動物の捕食
特記事項	特定外来生物、国リスト：侵入予防（No.12）、世界ワースト 100

## ツマアカスズメバチ

ハチ目スズメバチ科

*Vespa velutina* (Lepeletier, 1836)

選定理由	飛翔昆虫を捕食するほか、ミツバチを捕食して養蜂業に被害が出ている。県内では北九州市で1例の捕獲記録があり、近隣では対馬で定着していることから、侵入状況の監視が必要である。
原産地	東アジア、東南アジア、南アジア
影響・被害	在来種（ハチ類）との競合、養蜂被害
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.104）

## クロゴケグモ

クモ目ヒメグモ科

*Latrodectus mactans* (Fabricius, 1775)

- 選定理由** 毒性が強く、人への健康被害の懸念が強い。九州では未定着であるが、近県では山口県に定着しているため、侵入状況の監視が必要である。
- 原産地** 北アメリカ
- 影響・被害** 人体被害（神経毒）、在来種（クモ類）と競合の可能性
- 特記事項** 特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.107）

## ナガバアカシア

マメ科

*Acacia longifolia* (Andrews) Willd.

- 選定理由** 観賞用に植栽される。窒素固定によって土壌が富栄養化し、植生の変化をもたらすため、逸出させないよう啓発することが重要である。近県では山口県での野生化が報告されている。
- 原産地** オーストラリア（タスマニア島）
- 影響・被害** 在来種との競合、土壌窒素の蓄積
- 特記事項** 国リスト：重点対策（No.44）

## ウスゲオオバナミズキンバイ

アカバナ科

*Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter et Burdet subsp. *hexapetala* (Hook. et Arn.) G.L.Nesom et Kartesz

- 選定理由** 国内で急速に分布を拡大しており、侵入に対する監視が必要である。最近まで観賞用水草として利用されていたことから、逸出も懸念される。九州では鹿児島県で野生化が確認されている。
- 原産地** 北アメリカ南部～南アメリカ
- 影響・被害** 在来種（水生植物）との競合
- 特記事項** 特定外来生物（ルドウィギア・グランディフロラ）、国リスト：緊急対策（No.26）

## モミジバヒルガオ

ヒルガオ科  
別名：モミジヒルガオ、台湾アサガオ

*Ipomoea cairica* (L.) Sweet

- 選定理由** 熱帯～亜熱帯に広く分布するつる性の多年草で、強健な植物であることから、在来種との競合が懸念される。九州では熊本県、宮崎県、鹿児島県で定着が確認されている。
- 原産地** アジア～アフリカの熱帯
- 影響・被害** 在来種との競合
- 特記事項** 国リスト：重点対策（No.95）

## オオカワヂシャ

ゴマノハグサ科

*Veronica anagallis-aquatica* L.

- 選定理由** カワヂシャ *V. undulata*（福岡県・環境省レッドデータブック準絶滅危惧）との交雑が懸念される。九州では佐賀県、長崎県、大分県で定着が確認されている。
- 原産地** ヨーロッパ～アジア北部
- 影響・被害** 在来種との競合、在来種（カワヂシャ）との交雑
- 特記事項** 特定外来生物、国リスト：緊急対策（No.29）

## ネバリノギク

*Symphyotrichum novae-angliae* (L.) G.L.Nesom

キク科  
別名：アメリカシオン

選定理由	観賞用に栽培されるため、逸出しないよう啓発を行うことが重要である。北海道で道路法面を中心に急激に分布を拡大しており、九州では大分県、宮崎県で野生化が確認されている。
原産地	北アメリカ
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.134)、日本ワースト 100

## オオハンゴンソウ

*Rudbeckia laciniata* L.

キク科  
別名：ハナガサギク

選定理由	高さ 1～3m になる大型の多年草で、大群落を形成する。湿原の周辺などに繁茂して在来種の生育に大きな影響を与える可能性がある。九州では大分県、宮崎県で野生化が確認されている。
原産地	北アメリカ
影響・被害	在来種との競合
特記事項	特定外来生物、国リスト：緊急対策 (No.32)

## ヒガタアシ

*Spartina alterniflora* Loisel.

イネ科  
別名：スパルティナ・アルテルニフロラ

選定理由	繁殖力が旺盛で、干潟域の動植物への影響が危惧される。熊本県の白川、坪井川、大野川の 3 河川に生育しており、特に有明海沿岸の河口～干潟域において、侵入を監視する必要がある。
原産地	北アメリカ東部、カリブ海島嶼、南アメリカ東部
影響・被害	在来種（塩生植物）との競合、陸地化による湿地環境の改変・消失
特記事項	特定外来生物（スパルティナ属全種）、国リスト：緊急対策 (No.34)

## ハナシュクシャ

*Hedychium coronarium* J.Koenig

ショウガ科

選定理由	高さ 2m になる常緑の多年草で、在来種と競合する。観賞用に栽培されるため、逸出しないよう啓発を行うことが重要である。九州では宮崎県で野生化が確認されている。
原産地	インド～マレーシア
影響・被害	在来種との競合
特記事項	国リスト：その他の総合対策 (No.176)